
侍女と総司令官

方位磁針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍女と総司令官

【Nコード】

N0294W

【作者名】

方位磁針

【あらすじ】

聖女様に仕える元下っ端メイドのピーナ。大好きな聖女様の為に、一生懸命にお仕えしてます！・・・なのになのにあの方のせいで、気苦労が絶えません。ぎゃー！ー！！今日もまた来た！

聖女の侍女と総司令官のほのぼのラブコメディです。

はじまる（前書き）

このお話はファンタジーですが、だからといって大層なものではありません。その世界に生きる人の日常生活のお話です。よろしくお願ひします。

はじまる

「黄金の都」、そんな名称で他国からも呼ばれている程に、この国
アインシュベルツは栄えている。この国は、300年前に賢王シュ
ベルが悪しき魔王を倒し、苦しんでいた民を救い、出来たのだとさ
れる。そんな大層な国の誕生の話も、今を生きている私には、あま
り関係ないものだった。何せ、一分一秒を争うように、忙しい下っ
端メイドライフを営んでいるからだ。

「ピーナ！そのシーツ畳んだら、次は神殿の廊下をモップでかけて
！」

「はい！今すぐー！」

下っ端メイドを仕切るアンナさんの掛け声に、元気に私は挨拶をし
た。ここは、王邸の中にある、神殿。国の中でも特に権威ある神官
様方が、この神殿には多くいる。そんな神殿で下っ端メイドとして
働いているのが私――ピーナ・リロットである。10歳の頃にこ
の神殿に奉公に出され、18歳となる今は、それなりに仕事の経験
をし、ベテランとはいえなくも、それなりに頼りにされるようにな
ってきたこの頃だ。

しかし、習慣の朝の掃除いつもなら既に終わってもいい頃なのに、
今日は念入りに掃除をさせられている。

「うう、忙しい。なんで、こんな忙しいのよう」

「なんでも、お偉いさんのいうことでは、明日に待ちに待った聖女様が来られるらしいよ。先日その聖女としての能力が認められたようで、急遽明日に来られることになったんだ」

小声でぼやいた私の声を、地獄耳のアンナさんは聞き逃さなかったようで、苦笑いしながら答えてくれた。

「せ、聖女様ですか!？」

何と！それはとてもすばらしい！！

「ああ、ピーナは熱狂的な聖女様信者だもんね。ようやく、聖女様が見つかったよかったじゃないか」

そうなのだ、私は聖女様の大ファンなのである。小さい時から、よく両親に聖女さまにまつまる話を好んでせがんだし、神殿で働いているのもいつかは聖女様が現れて、何らかのかたちでお仕え出来るかもしれない、と考えたからだ。

アンナさんは「聖女様がこられるのはいいけど、急すぎるよ。神殿の掃除や準備やらをするあたしらの身にもなつて欲しいもんだ」とブツブツ言つて、忙しそうに他のメイド達へ指示する為に、小走りでかけていった。

「うわーうわー、聖女様が来るんだ!!」

興奮しながら、廊下をぐるぐる歩いて私は、はたから見たらとても変だろぅが、そんなの気にしていられない。やっと、憧れの聖女様に会えるのだ。先代の聖女様がお亡くなりになられて15年。新しい風を運びながら、聖女様が神殿に來られる。

とりあえず、來られる聖女様のために、精一杯神殿をきれいにしよう、と思った私は「オー!」と腕をあげた。

そんな私を不審な目でメイド仲間が見ていますが、そんなの気にしませんともっ!

「32代聖女ルナスタリーナ様、到着されました!!」

翌日、聖女様ルナスタリーナ様が無事に神殿にお着きになった。私のような下っ端のメイドは遠くからしか、聖女様を見ることがしかできないが、それでも聖女様のお美しさは分かる。

亜麻色の長い髪、翡翠のような瞳はパツチリしていて、小さい陶器

のような白い顔には、バラ色の頬、とれたての果物のようなみずみずしい唇、どれをとっても文句ありません。名前もルナスターナ様と、とっても高貴な雰囲気があると思いませんか？

うつとりと眺めていると、同期のアリーが「涎がでているわよ、ピーナ」と引き気味に小声で言われてしまった。おっと、失礼。

涎をふき、また神官方に迎えられている聖女様を見ると、緊張しているのか少し顔が強張っているようです。まあ、こんな人数でおむかえされたら、びっくりですよね。

とりあえず、聖女様を迎える儀式など滞りもなく進み、我が国の神殿には15年ぶりの聖女様がお住まいになることになった。

私のような下使いは、聖女様に直接仕えることはできませんが、せめて快適に神殿ライフを楽しんでもらおうと、ピーナはお掃除を頑張るのです！

お掃除にも力が入り、やる気満々で働いているので、アンナさんに褒められるほどだ。

だから、遠く聖女様を見かけると、つい自分の聖女様の想像世界に入ってしまうのは、許してほしい。

そんな感じで働いている私だが、噂では聖女様はあまりこの神殿に馴染んではないらしい。

まあ、今まで暮らしていた所と全然違う所に連れてこられたら、誰だって戸惑うけどね。

早く、この神殿に馴染んでもらえばいい、と願うばかりだ。

いちわめ

「ルナスタリーナ様！お待ちください！ルナスタリーナ様！」

奥の廊下から侍女の必死な声と、あわただしい足音が聞こえる。何事かと、掃除中の私は、音の聞こえる方向に目を向けるとなんと小走りになってこっちにくる聖女様と、追いかける神官や侍女たちが見えた。

うわあ、すごい近くに聖女様がくる！

と、ただならぬ感じを匂わせてこちらにくるのを、一瞬忘れ、近づく聖女様にドギマギした。

「ルナスタリーナ様、まだお勉強が残っています！すばらしい聖女様になるためにも、是非お勉強を・・・」

「いいかげんにしてよっ！！ずっと聖女の勉強やお作法ばかりじゃないの！いいかげん、飽き飽きだわ！」

「そんなことを言わずに」

「嫌ったら、嫌！！」

「子供のようなことを・・・」

「何よ、ずっとこの神殿から出られなくて、自由はないし、やることといったらあなた達がやらせるものだけ！！もう、嫌よこんな生活」

・・・どうやら、結構な場面に遭遇してしまったらしい。顔を真っ赤にして、聖女様は神官達に怒っている。翡翠のような瞳には、怒りと悔しさを滲ませているのが分かった。

聖女様の一団が、目の前を通り過ぎるのを腰をおっておじぎをして待った。

でも、こんなに近くに、聖女様を見ることはそうそうないので、私は好奇心に負けてそっと目を上げて、聖女様を見た。

すると、すれ違う瞬間聖女様と目がバチンッと合ってしまったのだ。

うわ、どうしよう！

目を外すことはなんだか失礼だし、かといって見つめるのも失礼だ。逡巡していると、翡翠の目につっすら溜まっていた涙が、ポロリと一滴流れるのを見た。

ピーナは、はっとした。

「・・・お辛いんですね。そりゃあ、家族と離れ、見ず知らずの人にずっと見張られながら、生活するのはさぞ大変だろう。」

急に、聖女様が憧れに似た気持ちではなく、どうしようもなく愛しく感じられた。今までは、雲の上の存在であったのに、家族に向けるような気持ちだ。

励ます気持ちで、聖女様に微笑みかけると、聖女様は大きな目をまばたきして、さらに私をじっと見つめた。

怒鳴っていた聖女様が、急に立ち止まってメイドを見つめるのを不審に思ったのか、神官は聖女様と私を交互に見て、「どうなされたのですか？」と聖女様に話しかけた。

聖女様は、しばらく私を見た後、

「この子をわたし付きの侍女にしてくれるなら、勉強してもいいわ」とさりと爆弾発言をした。

・・・えっ!?

「なんです・・・？あれは、メイドとはいえ下使いですよ？」
神官達は、とっても驚いた様子だけど、当の本人の私のほうが、驚いてますから!!

本来、聖女様のような高い身分の方につく侍女は、貴族の娘と相場が決まっている。パン屋の娘である庶民の私に、そんな大役が務まるはずない。

務まるはずないんだけど・・・。

「別に、関係ないわ。この子は私専用の侍女にして。あとは侍女い

らないから」

聖女様は、腕を組みあごを挑戦的に上げ、さらに、問題発言をしてくださいました。

にわめ

「本日から、ルナスタリーナ様の侍女を務めさせていただきます、ピーナ・リロットと申します。どうぞ、よろしくおねがいします」

深々とおじぎをする私を、聖女様が満足げにみて

「顔を上げて」

と声をかけてくださった。私は、恐る恐る顔をあげて、美しいルナスタリーナ様の顔を見つめた。

あの日、聖女様が私を侍女へと指名してくださった日は、その後がとても大変だった。

神官達は、私を侍女に（しかも私だけ）と主張する聖女様を説得するのに躍起になっていたし、聖女様は聖女様で自分の意見を最後まで変えなかった。私はというと両方に挟まれ、オロオロとするばかり。

「彼女は貴族の教養ある娘ではありません！国の宝である大事な聖女様にお仕えする侍女にはふさわしくはありません！」

うっ！その通りだけど、本人を前にして言うかー！
地味に傷ついている私の横で聖女様は

「相応しいかは、私が決めることよ！この子を侍女にしないなら、聖女の務めやらはぜーんぶ放棄するんだから！！」

と最終手段の脅しをかけた。
これには、神官達も困ったようで、最後には神官たちも聖女様の願いに折れるしかなかったのだ。

私は、この騒動のあと、神官たちやメイド長やらに連れて行かれ、聖女様の侍女の仕事を通り教えられ侍女用の服を渡された。そして、今日に至るわけだ。

機嫌がいいのか、私をニコニコと見つめてくださっている聖女様に、何やらうれしい気持ちと申し訳ない気持ちで一杯になった。

「・・・聖女様、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「いいよ、なに？」

「あの、今更なのですが、私なんかを侍女にしてもいいのですか・・・？」

「なんで？」

「神官様が言われるように、私は貴族の娘ではなく、しがない下町のパン屋の娘にございます。大事な聖女様の侍女ですから、優秀な方がそのお仕事をすべきだと思うのですが」

聖女様は、私を選んでくださった。そのことはとてもうれしいし、名誉なこととは思う。でも、その聖女様の期待に答えられるかは不安があるし、その能力もない。

「・・・どうして、そんなことを気にするの？」

聖女様は、笑顔を引っ込め、窓際に歩いていき、外を見た。

「寂しかったの・・・ここには、大好きな御父様やお母様、お兄様もない。なのに、聖女様聖女様と期待ばかりされて・・・確かに、私には聖女としての能力はあるかもしれない。でも、それを発揮できるかは分からない。もし、皆の期待に答えられなかったら、どうしようと思ったら、眠れやしない・・・期待に押しつぶされそうよ」

「聖女様・・・」

「ルナスタリーナ」

寂しげに、聖女様は呟いた。

「え？」

「私の名よ。御父様たちは『ルナ』と呼んでいる。ここに来て、私は『聖女様』になって、ともに名を呼ばれたことはない。呼ばれたとしても『ルナスタリーナ様』。・・・私は何も変わっていないのに」

「あ・・・」

私は、自分の口を思わず手でふさいだ。そうだ、私もだ。私もまともに、名を呼ぶとはせず、「聖女様」とばかり・・・。

「ここに来て、私自身、ルナスタリーナ自身を見てくれる人はいないの。私は私よ！聖女としての力はあるかもしれない。でもルナスタリーナであることは変わらない！なのに、なのに・・・、聖女

としての務めとやらで一日の大半は終わるし、自分が自分でなくなってしまうようで、恐い……!!」

そう吐き出すと、聖女様、いや、ルナスタリーナ様ははらと涙を流し、手で顔を覆った。

私は、目の前で泣いている、華奢な少女を見つめた。確か、年は19歳だったはず。地方の貴族の次女だが、御父様は人柄も素晴らしいらしく、国の中心までその人柄は有名だ。

そんな方に、聖女様が誕生するのは、当たり前かもしれない、と人々は噂した。

また、そんな聖女様だから、きっと素晴らしいことをしてくれるに違いない、と。

ああ、なんて惨いのだろう。こんな少女にそんな期待を押し付けることは。過度の期待は、その人を苦しめる。ましてやその対象が、まだうら若い少女なのだ。

彼女は、さぞ苦しかったに違いない。

「……ルナスタリーナ様は、お辛かったですね」

ポツリと、私の口から、自然にその言葉が出てきた。
ルナスタリーナ様は、ピクリと動き、ゆっくり、顔を覆っていた手を下に下げた。

「あなたと目が合ったとき、あなたは微笑んでくれた。私自身を見てくれている気がして、うれしかったの。自分の中にある聖女像を私に押し付ける神官たちのようではなく、私を認めてくれている気がして、ホッとした」

「ルナスタリーナ様」

じーんと暖かい気持ちで、胸に行き渡るのを感じた。

「ピーナ、どうか私の側にいて頂戴。一人ではここは押しつぶされそうなの」

ルナスタリーナ様は、真摯に翡翠の瞳をこちらに向けた。

「ええ、もちろんです。私で良ければ」

そこまで言われて、引つ込む私ではない。大好きなルナスタリーナ様のため、誠心誠意尽くしますと motto !

その日、私は人生で大きな決意をしたのだ。この決意が、後の私の人生を大きく変えるとも知らずに。

さんわめ(前書き)

やっと相手が出ます。

さんわめ

「おはようございますルナスタリーナ様、朝ですよ」

窓のカーテンを開けながら、ルナスタリーナ様に挨拶をする。

ルナスタリーナ様は目をこすりながらも、「おはよう」とやわらかく笑い、私に挨拶を返してくれた。

私がルナスタリーナ様に仕えるようになって、早くも一ヶ月経った。初めてのことに戸惑っていた侍女の仕事も少しずつではあるが、様になるようになったと思う。

ルナスタリーナ様も聖女として学びを嫌そうにしてはいるが、さばらずに励むようになったので、とてもうれしい。

異例な聖女の環境に、あーだこーだと言っていた周りも聖女様がしつかりと務めをはたされるようになったので、陰口も減ってきている。

そんな中、今日は実は大切な日だったりする。

「今日は、初めての王族や軍部の方々とご面会の日ですね」

顔を洗う水桶にお湯をはったものを渡しながら言うと、ルナスタリーナ様は眉をひそめてしまった。

「そうなのよねえ、緊張するわ・・・」

この国の権利体制は特殊で、神殿と王権は完全とは言えないが、分権している。持ちつ持たれつの関係なのだ。さらに、軍も大きな権力を保持していて、この3つの権力がお互いをけん制しあっている。もちろん、王には神殿も軍部も従う形ではある。しかし、祭司長と元帥というトップがいて、建前では王に従っているが、それも形式的なもので実際に従うリーダーはそれぞれ違うのだ。

聖女であるルナスタリーナ様は、神殿の保護の下にあり、本来は一番の神殿の権力者である祭司長よりも位は高い。

ルナスタリーナ様が神殿に入って2ヶ月経った今日、他の2つの勢力である王・貴族、軍部に挨拶・お披露目をする。

「少し、お偉いさんにご挨拶をするだけですよ！そんな気を張らないでください」

「ふふ、そうね。ありがとう」

「人前にでるのに緊張するなら、みんな力ボチャだと思えばいいって、昔祖母が言ってましたー」

「ピーナったら」

くすくすと笑う、ルナスタリーナ様は今日もお美しいです。そんなだから、ピーナは別の意味で心配になるのです。

「あまりにもルナスタリーナ様がお美しいので、殿方が変な気でも起こさないといいのですけれど……」

「なにそれ。ありえないわ」

ぽつりと呟いた私の言葉に、ルナスタリーナ様は笑ったが、なんだか本当に心配になってきた。

「ルナスタリーナ様ご入場です！」

門兵が、声たからかにルナスタリーナ様の謁見の間への入場を告げた。侍女である私はルナスタリーナ様の後ろを歩いているが、門の中までしかついてはいけない。門の中に入れば、そこで立ち止まり、ルナスタリーナ様だけが王達のところまで進み行く。

『頑張れ、ルナスタリーナ様　！！』と一生懸命に念を送りながら、一人で歩いていくルナスタリーナ様を見送る。

ルナスタリーナ様は、神殿を出る前は、そわそわと緊張している様

子だったが、いざお披露目の場所に向かうと堂々と別人のような振る舞いだ。

また、ルナスタリーナ様のすばらしい一面を見れて、誇らしい気持ちになった。

「お初にお目にかかります。32代聖女ルナスタリーナと申します。ご挨拶が遅れてしまい、申し訳ありませんが、このように皆様にご挨拶できましたこと、大変うれしく存じます」

ルナスタリーナ様の凜とした声が、会場に響いた。

ちらっと見回してみても、この場所にいるのは、そうそうたる顔ぶれだと実感する。

まず、一番高い所にいるのが王らしい貫禄を漂わせるこの国を治める王シュレル様と、三人の子持ちとは思えないような若く美しいお后エレーン様だ。

一つ下の段にいるのが、第一王子シオン様と、第二王子アレックス様。また、第一王女フィレナ様。

第一王子のシオン様は、お母様似の柔和な顔をしていて、中性的な雰囲気醸し出している。一方、16歳のアレックス様は、まだやんちゃそうな瞳を隠せずに物珍しそうにルナスタリーナ様を見ていた。

挨拶を述べるルナスタリーナ様をシオン様は、熱心に見ていた。優しい眼差しではあるが、何だか熱いものを含んだその瞳に、ピーナは少し落ち着かない気持ちがあった。

よく分からないが、シオン様は要注意人物だと女のカンが騒いでい

る気がした。

とりあえず、心のメモに書いておこう。

王の右側には宰相やら、有力貴族がずらっと並んでいる。

そして、左側には軍部のトップの元帥であるサルマン様を始め、高位の軍人達が並んでいる。軍人の長とは思えない、温厚な顔をしているサルマン様の隣には、まさに軍人らしい威圧感を出している男性がいた。

ああ、あの人が有名なエドガー様か

軍人のトップである総帥の隣で高位の軍服をきこなして、たたずんでいる彼は総司令官である。

24歳という若さで総司令官までのし上がった彼は、現在26歳であるが圧倒的な軍人達の尊敬・畏敬を集めている。5年前に、大きい群れをなしてこの国へと攻めてきた魔物を知力戦で壊滅状態へと追いやった英雄だ。しかも、彼自身この国で、一番強い軍人だと言われ、賢王シュベルの再来などとも影ながら諸外国からも言われ恐れられているくらいだ。

極め付けには、彼はまれに見る美男子で、まっすぐな銀色の髪に、灰色の切れ長の瞳、雄鹿のようにすらっとした体型だがつくべきところにはしっかりついている筋肉だと（エドガーファンクラブいわ

く)この国の貴族から下町までの娘たちのハートをつかんで離さない。
ここ数年、「付き合いたい人ランキング」で一位をとっているらしい。

彼は、シオン王子とは逆に鋭い視線を王に挨拶するルナスタリーナ様に向けている。

(かつこいいけど、ルナスタリーナ様をあんなふうに見るなんて、いただけないな)

彼も要注意人物だな、とピーナは心のメモに付け加えた。

「うーん！疲れたあー……」

「お疲れ様です。とっても立派でした！ピーナは感激です!!」

部屋に戻って背伸びをするルナスタリーナ様に、紅茶の用意をしながらいかにルナスタリーナ様が素晴らしかったかを述べた。

「ありがとう。なんだか、ピーナにそういつて貰えるとうれしいわ」

「そんな！みんな絶対そう思ってますよ！ピーナだけじゃありません」

「ふふ」

少し笑ってルナスタリーナ様は視線を下に下げた。

「本当に、ピーナがいてくれてうれしいの……。ピーナがいてくれなかったら今日の挨拶なんて絶対無理だったわ。ピーナが後ろで見ていると思うたから、勇気を出していった。……。ピーナは私の大切な友人よ」

少し頬を赤くしながら、照れたように言うルナスタリーナ様に、私は胸がキュウツとなるのを感じた。

ルナスタリーナ様、かわいいです！！

「そ、そ、そ、そんな。ピーナはただルナスタリーナ様に仕えているだけで、特別なことは……。時々失敗とかしてしまって、侍女のお勤めも完璧ではないし、ルナスタリーナ様にもご迷惑をかけてしまっただけで……。」

「そんなことない。ピーナは私の心の支えよ。ピーナがいてくれるだけでいいの」

「ルナスタリーナ様……。」

「あとね、……。お願いなんだけど二人でいる時だけでいいから、私のこと『ルナ』って愛称で呼んで欲しいの。家族とか近い人と同じように呼んで欲しい。ダメ……？」

上目遣いで私を見るルナスタリーナ様に誰が逆らえよう。私はあまりにもものかわいらしさにクラツとしながら、なんとか頷いた。

「ルナスタリーナ様、いえ、ルナ様がそう望むのなら」

「本当！？ありがとうー！！」

ルナ様は手を合せて喜んでくれた。

「ルナ様、私ずっとルナ様のおそばで仕えたいです。ルナ様が大好きだから・・・」

「ピーナ・・・私もピーナのことかだ〜い好き！！」

「ルナ様」

「ん、なに??」

「呼んでみただけです〜」

「もう、ピーナったら」

キャツキヤとはしゃぐ私たちを、窓の外の小鳥が不思議そうに見ている。

ルナ様、私、一生懸命仕えて参ります！！

私はそんな決意を、新たにした。

さんわめ（後書き）

やっぱり、相手の男性は美形です。
お約束、ということ。

よんわめ

神殿のトップは祭司長である。といっても、仮のトップだ。本当の神殿のトップである地位にいるのは、聖女だ。祭司長が神殿を束ねるのは、聖女が不在のときで、聖女がいるときは、その補佐をするのが本来の仕事なのだ。

のはずだが、ルナスタリーナ様という聖女が神殿にいられた今もその状況はあまり変わっていない。つまり、いまだに祭司長に大きな権限があるままなのである。

まあ、それは当たり前かもしれない。何故なら、ルナ様は神殿にいられて日が浅いし、聖女のお勤めが何であるかを学んでいる最中である。そんな新米聖女様より、ずっと神殿を動かしてきた祭司長に皆が指示を仰ぐのはしょうがない。

しょうがないのだが、祭司長のルナ様への態度は、すこし横柄なものだ。まるで、自分が聖女のルナ様より偉いかのような態度を隠してもせず、接してくる。

今日も、ルナ様と祭司長達の集まりがあったのだが、聖女のルナ様のほうから祭司長らのもとへ行くことになった。普通は逆のはずだが、聖女のルナ様が文句言わないので、周りもこの状態を黙認している。

今ピーナは一人、ルナ様の帰りを部屋で待っている状態だ。

「ふんっ！前々からあの祭司長は何だか気に入らなかつたんだけど、ここまでだとは。もう、ルナ様に意地悪したら、どうしよう・・・」

ピーナはずっとこの神殿に10歳の時から勤めているわけだが、聖職者のはずなのに、人を見下す目祭司長の目が苦手だった。

廊下を掃除しているピーナたち下っ端メイドが掃除しているところを通りすぎる時、彼はチラリとまるで汚らしいものを見るような目で見てくる。

祭司長は御年65歳だが、40歳の時からその祭司長という座についている。噂では、裏から様々なことをして、その座を奪った、とされている。そして、その地位を維持するために悪事もたくさんしてきたらしい。何とも、本来祭司長という存在からかけ離れたじいさんののだ。

当然、そんな祭司長は下っ端たちには嫌われていて、裏で『はげじじい』と呼ばれている。

最近、自分より立場が上の聖女が来たことで、その権力維持に危機感をかんじているらしく、何かとルナ様に何やらと皮肉や難癖をつけてくるらしい。・・・本当にやなじじいだ。

「そろそろ、ルナ様帰ってくるよね？」

もう、帰ってきてもいい時間になり、ピーナは落ち着いて座っていることもできなくなり、部屋の中をぐるぐると歩き回った。

ピーナが部屋を何周か回ったところで、顔色を悪くしてルナ様が帰ってきた。

「ルナ様？ど、どうしたのですか！？顔色がとても悪いです。はやく、ベットで横になってください！」

「ピーナ・・・」

そう呟いたルナ様は泣きそうだった。

結局、泣き出してしまったルナ様をなだめながら聞いた話を要約すると『まだ、聖女としてのお仕事を習得していないとは嘆かわしい。せつかくあなたを招いたのだから、結果を出して貰わないと困る。しかも、我がママを言ってどこの馬の骨とも知れない下女を侍女にするなど信じられない。親御さんはどんな教育をしたのか。早く司祭の仕事を安心して引退したいのに、できないではないか』ということを書いてきたらしい。

「わ、私だけのことならのことなら、いいのよ。実際仕事や知識もまだ自分のものとしていないし事実なのだから。……でも、お父さんやあなたのことまでも悪く言われるなんて……!!」

はらはらと涙を流しながら、悔しそうにルナ様は言った。翡翠色の瞳から涙を流す姿は、場違いだが『どんな時でも、綺麗な人だな』と思ってしまった。

よ、涎は出さないようにしないと。

「私はともかく、お父様達のことまで嫌味に出すなんて、祭司長の品位が疑われますよ！ひどすぎる」

「ごめんね、ピーナ。私があなたを巻き込まなければ、周りに何も言われずにすんだのに……」

「ルナ様、私は全然気にしていませんよ。嬉しいんです、私。あなたと一緒にいられるだけで。むしろ、ルナ様に巻き込まれて幸せです！」

「ありがとう、ピーナ」そういうルナ様は少し微笑んで下さったが、やはりどこことなく悲しそうだった。

・・ああ、なんてダメな人間だろう、私は。守ろう、と誓ったくせに、その人の笑顔すら守れないなんて。

ルナを早めに寝かしながら、ピーナはルナの側にいることしかでき

ない自分の不甲斐なさを齒がゆく感じていた。
次こそは、絶対にルナ様を悲しませない！そう決心した。

つわめ

祭司長にひどく嫌味を言われてから、ルナ様は聖女の学びをそこそこに、部屋に引きこもってしまった。

ルナ様は決して弱音を吐かなかったが、実は祭司長を恐れて神官たちにも親しくはされず孤立している状態であったことを、噂で知っていた。長年、神殿に居座り、私欲で神殿の体制を悪しきものにしていく祭司長に、はむかうことができる者はいなかった。王も軍部も干渉は許されていないため、事実神殿は祭司長の天下なのだ。ここに来たばかりルナ様が対抗するのは、難しいことだった。

ルナ様は、時折私と話す以外ぼーっと一日を過ごすようになり、ますます孤立している状態だ。認めたくないが、祭司長が狙った通りになっていることは、明白だった。

「ど、どうにかしなければ……。でも、特に名案とは浮かばないし。できることといえば、明るくルナ様に話しかけることしか……。はっ！私って役立たず！？うわーん！！」

迷ったら、部屋を歩き回る癖があるピーナは、寝室で寝ているルナ様が起きないよう、隣の部屋で静かにではあるが歩き回っていた。

（手品とかしたら、喜んでもらえるかな？あーでも、私余り手先が器用じゃないし……。大道芸人なんか神殿に呼ぶのなんて、絶対反対されるよね。こーなったら、お父さんがよくやる親父ギャグを連

発すれば、笑ってくれるかな。笑うと元気であるし）

変な方向の慰め方を考えていたピーナだったが、ドンドンとドアを激しく叩かれる音に意識を戻した。

「ん？はい。どなたですか？」

そういつて、ドアを開けると、焦った顔の神官が立っていた。

「聖女様はどうしていますか・・・！？」

「る、聖女様は今具合が悪く、寝ております」

ただならぬ神官の気配に押されつつピーナが答えると、神官は目をキョロキョロさせながら逡巡したのち「起こす、ことは可能ですか？」

と言ってきた。

（具合が悪いつていつてんじゃない！今のルナ様の状況が分からないわけじゃないのに、起こせなんて失礼だな！！）

憤慨しながら、ピーナは答えた。

「申し訳ありません。聖女様は臥せっており、起きることは難しいのです。何かご用件がございますなら、私が代わりに伝えておきますが」

「用件というか・・・、その聖女様に面会したい、という方々がお

見えになっでいて・・・」

（面会？ますますダメだ）

ピーナは今もベットで寝ているルナの苦しそうな顔を思い出した。

「それは、出来かねます。今の状況ではとっても・・・あの、また別の日に再度お越しいただくことは可能でしょうか？」

「それは・・・えーと、どうしても聖女様にお会いしたい、と・・・」

「我々の話はすぐに終わる。こちらは、別に身支度が出来ていなくとも、かまわない。聖女殿に会わせて貰いたい」

しどろもどろな神官の話をさえぎったのは、威圧感がある鋭い声だった。

ピーナが声が聞こえた神官の後ろを見ると、いつぞや見たエドガー総司令官が何人か部下を引き連れて歩いてくるのが見えた。

絹のような女なら誰でも羨むサラサラな長い銀色の髪を一つにし、
怜悯だがしかし恐ろしく整った顔。刀を横に差しながら歩くエドガ
ー総司令官は、やはり目が一瞬奪われてしまう。宮殿の女達が恋人
という座を狙っている、という噂もあながち間違っていないだろう。
そんな彼が、いきなり「聖女に会わせろ」と言ってきたので、ピー
ナは戸惑ってしまった。

「あの、あなた様は・・・」

「申し遅れた。私は総司令官のエドガーだ。至急、聖女殿をお会い
したい。侍女殿、お取次ぎをお願いする」

「え？しかし、どうして・・・」

そもそも軍部の者が神殿に入ってくることで自体が、異例なことであ
る。しかも、聖女に会いたい、などとは。困惑して先ほどの神官を
見ると、何やら諦めきった顔をして伏せている。

（こいつ、総司令官殿の迫力に負けて、ここまで通したな～～！！
！どうしてくれるのよ、私みたいな元下っ端メイドが、国でも特に
地位がある方に対峙できるわけじゃないじゃない）

神官を睨むと、神官はビクツとして、目を泳がせた。

キーッと神官を睨んでいると

「悪いが、お取次ぎをお願いしたのだが」

とエドガーが冷たい瞳で睨んできた。言葉は丁寧だが、全然お願い
されている気分にならないのは何故だろう。言外に『おい、ちん
たらしてないでさっさと聖女に会わせろっ』という気持ちが伝わっ
てくる。

（ひーーーーー！！ど、どうしよう！こんなの、脅しじゃない。
ルナ様・・・）

思わず、エドガーの威圧感に負けて、頷きそうになるピーナの頭に、涙を流すルナの顔がよぎった。

（また、私はルナ様を泣かしてしまうの？あんな状態で、恐い軍部の方に合わせたら、さらに気持ちが悪く沈んでしまうに違いないわ）

そう考えると、ルナは目をギュツと閉じ、目も前にいる男を見据えた。決心は前からついていたのだ。

そう、ルナ様を守ってみせる、と。

ピーナは半開きだったドアから出て、静かにドアを背にしながら閉めた。

ろくわめ（前書き）

軍の階級の名称については適当です。一応調べましたが、最終的に方位のニュアンスで決めさせていただきました。もし、違和感など感じられたなら、ごめんなさい。

ろくわめ

「申し訳ありません。聖女様は最近体調が思わしくなく、臥せっております。起き上がることは難しいのです。面会は出来かねます。また、日を改めていただくか、至急の伝言がございますなら、私を責任をもってお伝えします」

一気にピーナは話した。

たぶん、声は震えていないはず。

相手はまさか、侍女なんかには断られるとは思わなかったのか、少し驚いた顔をした。エドガーの後ろにいた部下たちもそれぞれ「おや？」という顔をしている。しかし、エドガーはすぐ顔を戻すとさつきよりもさらに威圧感を増して、脅してきた。

「直接お話したいことだ。悪いが、侍女であるあなたに伝言はできない内容だ」

く、くそー。侍女だからってしゃしゃりでんなよ、ってこと？腹立つー

「そうですか……。では、また別の日にお願いします」
悔しいから笑顔で言い放った。

「何故だ!？」

「先ほど申し上げたとおりです。聖女様は臥せっているのです。面会ができる体調ではありませんし、無理をしたらますます悪化して

しまう可能性があります。伝言が出来ぬ、というならあらためていただくかもしれませんので」

「……。あなたは侍女だが、少し出すぎてはいないか？」

「そうですね。しかし、私は、聖女様のお世話を一手に引き受けております。神殿から任されているのです。ですから、私個人としてはあなた様に申し上げることは大変おこがましいのですが、神殿からお世話を任されている以上聖女様をお守りすることは、神殿から与えられた私の使命なのです。面会が出来ぬというのは、私ではなく私に責任を与えている神殿としての意志、とお考えくださいませ」

神官が『うそだろう』といった目でピーナを見ている。一介の侍女が軍部のナンバー2に楯突くのが信じられなきようだ。

（私だって、ここから逃げたい。でも、私がどくと、ルナ様を守るものはなくなってしまう！）

本当は泣きそうなのだ。こんなガタイのいい男達と対峙することは、縁のなかったことだし、実力行使で通られるならすぐにピーナは倒されてしまうだろう。

しかし、ここを通すわけにはいかないのだ。ピーナは腹に力を込めて、笑顔で話してビビッているのを悟られないように務めた。

「ほう……」

笑顔で言っただけのピーナ（内心はガクガクだが）を探るように見た後、エドガーは薄く笑った。伶俐な顔が、魅惑的に笑う。だが、ピーナには、何かを企てている邪悪な笑みに見える。

「そうか。それはしょうがない」

やれやれ、というようにエドガーは首をふつたが、それはなんだか演技に見えた。

帰るのか？引き際はいいのか、と考えるピーナの横を、素早い速さで何かが通って鋭い音を出した。神官がヒツというのが聞こえた。

見たくはないが、ピーナは後ろを振り返ると、エドガーの刀がピーナを横にしてドアに刺さっている。

(ぎゃーーーーー！！！！！)

ピーナは内心絶叫をあげた。実際に叫ばなかったのは、あまりの恐怖に声でなかったのだ。

「ああ、すまない。手が滑ったようだ」
全然謝っている調子がない声音で、エドガーが謝った。
むしろ、クスクスと笑っている。

（せ、性格悪いよ、この人！！）

「……手を滑らせた？」

「そうだ」

⌈
•
•
•
•
•
⌋

平常時なら考えられなかったが、ピーナはこの時、恐怖より怒りがふつふつと沸いてくるのを感じた。ずっと張り詰めていたので、恐怖を感じる心が麻痺してしまったのだらう。

(女、なめんなよー！！！！！)

この時、ピーナの頭にはエドガーの総司令官という地位のことは吹っ飛んでいた。

「なんと、総司令官であろう方が手を滑らせるという失敗をするとは、驚きですー。猿も木から落ちる、ということはこのことですね！私、軍の方が握ってもいかなかった剣を滑らせてとばすという、あり得ないミスをするとは思いませんでした」

ピーナは、手のひらをパンとあわせて、さっきよりも何倍もの笑顔で言った。

周囲の空気がピキッと凍ったが、気にしない。

「っ！！！」

「それではエドガー様、この剣を取ってから、帰ってくださいね」

「帰らぬっ。面会を！」

もはや、ブリザートのような気配を隠すことなく、エドガーは怒った調子で言ってきた。

「ですから、それは出来かねるのです」

「知るかつ！」

ピーナを睨んでくるエドガーを、ピーナも負けじと睨み返した。これを見ていたエドガーの部下は、後で二人の視線が雷ようにバチバチいつていた、と証言している。

「……どうしても、ここを通さぬと？」

「はい。それに、剣をもって脅されるような方と聖女様をお会いさ

せることは出来ません！もし、何か私に伝えられないような重要な伝言があるなら、聖女様の補佐である祭司長にお伝えするのが、筋でしょう」

エドガーとの視線を外さず、まっすぐピーナは言い放った。さりげなく、祭司長にエドガー達を差し向けるようにした。ざまー見ろ、はげじじい。軍人にびびればいい！

「お前は・・・」

ふとピーナとの視線を外し、エドガーは目を一瞬つぶった。そして、今までで一番強い殺気をピーナに当て睨んできた。

「最後だ。ここを通せ」

ピーナはエドガーの殺気に満ちた視線をしっかりと受け止めた。もはや、恐怖心は完全に麻痺している。ピーナはルナの笑顔を思い浮かべながら、ひとつのひとつの言葉をゆっくり言った。

「なりません。お帰りください」

どのくらい、睨みあったのだろう。数分にも数刻にも感じられた。エドガーの顔をひたすら睨んでいると、不思議なことに段々エドガーの頬が赤くなってきたのだ。そして時間が経つと、目の淵や耳までもが赤くなってきた。目は潤んでいるようで、男なのに色っぽい。

（ん？怒りで興奮している？それとも風邪ひいた？）

頭の隅でそんなことを考えていると、エドガーはピーナとの視線をやっと外した。

「・・・分かった。今日は帰ろう」

ピーナにふいつと背を向けながら、刀を抜き取ったエドガーのうなじはやはり、赤かった。

一人、先に戻っていく、エドガーの後姿を部下達は、「えっ！？隊長、まさか？！」と言いながら、ピーナと見比べた後、急いでエドガーについていった。神官は、何が起こったのかいまいち分からない、という顔をしたが、軍人達を送るために戻っていった。

ピーナは、背にしていたドアを開き中に入った。完全にドアを閉めると、ずるずるとドアを背にして座り込む。

（こ、腰が今さら抜けた・・・）

なんだか、体も震えてきた。思わず、両手で自分を抱きしめる。しばらくそうしていると、ルナが寝室から出てきた。

「ピーナ？なんだか騒がしかった気がするのだけど、何か・・・どうしたのっ！？」

ピーナの尋常ではない様子に、ルナも何ごとかとピーナに駆け寄った。

「ルナ様・・・起きて大丈夫ですか？先ほどは、来客の方がお見えになったのですが、帰っていただきました」

「私は寝ていたから、大丈夫よ。それより、何があったの?? 怯えているじゃない。普通の来客ならそんなことにはならないはずよ」

ピーナがエドガー達が、神官達を押し切ってこちらに来たことを告げると、話を聞き終える頃にはルナは怒っていた。

「ひどいわっ!! いくら、面会したいからって、強引すぎるわ」
そして、唇を噛むとピーナを見て目を伏せながら言った。

「きつと、軍部が神殿よりも優位に立とうとして、新米の聖女の私に抑圧をかけようとしてきたのだわ。・・・ごめんね。私が引き籠っていたからだわ。私が寝てなければ、面会をしてエドガー様たちの怒りをピーナが受けなくて済んだのに」

「ルナ様! いいえ、違います。私がしたことは、勝手にしたことでも、しかも聖女様の品位を侍女の私が落としてしまったのかもしれない……」

思えば、すごいことを言ってしまった、と今更ながらに気付く。相手がいくら強引だとはいえ、売り言葉に買い言葉で、あるうことが総司令官にはむかってしまったのだから。

「す、すみません。私大変なことを・・・」
「ピーナ」

ルナは、強い口調でピーナの名を呼んだ。思わず顔を上げてルナの顔を見る。ルナは、最近の弱弱しさがある瞳ではなく、何か決意をした強い感情を秘めた瞳をしている。

「ピーナ。私が悪かったの。ここにきて、打ち解けない神官達や、

嫌味ばかり言ってくる祭司長、難しい聖女としての学び、重圧に私押しつぶされそうだったの。まるで、一人でそれに耐えなければならぬ気持ちだったわ。御父様のところに帰りたい、と何度願ったことか。……。あなたがいってくれたのに。あなたがずっと私の側にいて、私を励ましてくれていたのに、私はずっと自分が一人だと思ってしまったの。ごめんなさい。あなたは私を守ってくれていたのに」

「ルナ様……」

守ることができなくて、自分が不甲斐なかった。でも、なんとかして、助けたかった。

「私、もう一度、戦ってみる。祭司長や神官に。いえ、この神殿という腐敗している体制そのものにっ！大変だとは思っけど、あなたがいてくれるから。……。ピーナ、私と共に戦ってくれる？」

ルナの顔には生気があふれ、力強い。

「わ、私、本当に役立たずで、何もできないんです。でも、お側にいて、あなたを支えてたいです」
もはや、ピーナは号泣だ。

「ありがとう。それだけで、いいの」
ルナはそっとピーナを抱きしめた。ピーナはふえっと思わず言ってしまうが、暖かいルナのぬくもりに安心し、目を閉じた。

ななわめ（前書き）

今回は、少し短めですー

ななわめ

暖かい風が吹き、空は快晴だ。そんな時を楽しみつつ、ピーナはルナが居ない間の掃除をしていた。あの日から、ルナは積極的に聖女の務めを果すようになった。親しく出来なかった神官たちにも、ルナから精力的に話すようになり何人が打解ける人が出てきたそうだ。そんなルナをピーナが精神的な支えとなっている。

何もかもが上手く動き出してきたようだが、しかし問題が一つあった。

それは - - - - -

ドアがコンコンとたたかれ、「ピーナさん、・・・エドガー総司令官殿です」と神官の来客をつげる声がした。

ピーナは『げっ！またあの人！？』と思わず言いそうになるのを、押さえ「はい、ただいま」と返事をした。

ドアを開けると神官と総司令官であるエドガーが立っていた。

ピーナがこわごとと「どうぞ、エドガー総司令官殿。お入りください」と招き入れると、「ああ、失礼する」とエドガーが部屋に入ってきた。

そう、たった一つの問題、それはこのエドガーのことだ。

ひと悶着。ピーナと彼が起こした以来、エドガーは毎日のように神殿ルナのところに通うようになった。と、いつても、ルナに会うことはない。「聖女殿に会いにきた」と言いながら、何故かルナが居ない時間に来るのだ。ルナが不在のため、しかたなくピーナがエドガーに対応するのだが、「聖女様が今はいない」と言つと「では、待機していることにする」と毎回彼はここで待っている。

かといって、ルナが来る前に、「すまない。用事があるからここで失礼する。また来る事にしよう」と言い残し帰ってしまうのだ。来てルナが居ない時になるため、会わずルナがくる前に帰る、という状態がずっと続いている。

ルナが不在のため、必然的にエドガーの相手を侍女であるピーナがすることになっているのだ。総司令官であるエドガーをないがしろにするわけにはいけないので、お茶などを用意して待ってもらう。

しかし、この時間がピーナにとっては苦痛で仕方が無い。何故かという、エドガーはルナを待っている間、ずっとピーナを睨んでくるからだ。あまりにもピーナをジッとみてくるものだから、耐えられず何か御用ですか、と聞いてしまうのだが、決まって「特にないと返されてしまう。

なら、こっち睨むんじゃねーよ!!

だが、ピーナも負けてはいない。これはきっとエドガーがピーナへ挑む戦いなのだ。『将を射ろうとすれば馬から』ということわざがあるが、まさに彼はこれにのっとって挑んできているのだろう。

以前にルナ様が、エドガーは軍部が神殿より優位に立とうと、聖女に圧力をかけに来たのだろう、と言っていたし。

エドガーはじつとピーナの顔を見てがんをつける。だから、負けじとピーナもエドガーの目から視線を離さずに必死に対抗する。数十秒か（ピーナにとっては何十分に感じるが）にらみ合ってから、いつも決まってエドガーのほうが目を先に離す。「勝った！」とピーナは満足げにエドガーに隠れて笑う。そして、エドガーを追い出すというなのお見送りをするのだ。

ふっ、今日もガン付け対戦ねっ？ 負けないんだから！ ピーナに視線を向けてくるエドガーを「ムムッ」っとにらみつけた。

この恒例となった二人の行為の真の意味をお互いに理解するのは、まだまだ遠いのだった。

はちわめ

今日は、シオン殿下がルナのところへ来る日だ。基本的に王族と神殿は分権しているので、それ程交流の機会はないが殿下の希望たつてということで、今回お茶会という名の視察ということで神殿に来るのだ。ピーナとしては、王族と聖女のお互いの様子見であれば、王でもいいと思うのだが、何故殿下が来るのか少し不満である。王族ヘルナが謁見しに行ったときの、シオン殿下の瞳に見え隠れするものが何だか気に入らないからだ。その瞳の中にあつた感情は、きつと良くないものだ。

神殿の庭でお茶会をすることになったので、庭にはテーブルやお茶セット等が用意されてある。ルナはイスに座り、ピーナはその側で控えてシオン殿下を待っているのだ。

「ピーナ、さつきからずっと黙り込んでいるけど、何かあつた？」
ルナがおしゃべりなピーナが話さなくなっているのを心配して、話しかけてきた。

「えっ！ い、いえ、何でもないです！ えーと、殿下がお見えになるので、何だか緊張しちゃって……。ほら、今まで王族の方とお会いする機会なんてなかったし……。」

「そうねー。私も実家にいた時は、王族の人と会うなんて考えられなかったし」
クスクス笑うルナ様はとても可憐だ。

おうつと、あまりもの美しさにピーナ涎が出そうです！

でかかった涎をふいていると、神官の「シオン殿下が来られました」という声がした。声の方向を見ると、殿下がルナ達の方へ来るのが見えた。ルナはすくつと立ち上がり、礼をして殿下を迎えた。

「本日はお日柄もよく、殿下を迎えてお茶会を出来ますこと、感謝です」

「こちらこそ、貴方のような可愛らしい方とお話し出きるなんて、光栄です」

「まあ・・・」

にこやかなシオン殿下と少し頬をそめたルナ様の二人の立ち姿は、見ていて一枚の美しい絵のようだ。

何だか、お腹がむずむずする。

猛烈にこの雰囲気破壊したいぞ。

むう！やっぱりシオン殿下は危険だ！！

ピーナはこの雰囲気にもどかしいさを感じつつ、二人の会話を見ていた。心中穏やかではない。

おだやかなお茶会となり、お開きとなった。

シオン殿下は「また、来ます」と残して、帰っていった。

彼が帰ったあと、ルナはボーッとぼんやりしていた。頬をいつも

よりも赤く染め、目を潤ませながら。
ピーナは恐る恐るルナに話しかけた。

「あ、あのー、ルナ様あ」

「んー？なあにー？」

「シオン殿下はどうでした？」

「えっ！？」

「お話ししてみて、どうでしたか？」

ルナは目線を色々な方向へ飛ばしながら、しどろもどろ話し出した。

「えーっと、シオン殿下はとてもお優しくったわ。それに、緊張している私を気遣って、楽しい話題を提供して場を和ませてくれたし。紳士な方ね。……。うん。本当に素敵の方……。
だんだん、話していてうつとりとするルナ。

「も、もしかして、お好きなんですか？」

「ええー！ー！？？そ、そんなじゃないわ！ただ、とても良い方だとは思ったけど……。」

否定するが、ルナのその表情はもはや「恋してます」と言っているようなものだ。ピーナとしては、とっても嫌だ。大好きな聖女さまであるルナが取られてしまった気持ちになったからだ。
くそー！殿下のばかー。やろー。

ピーナはシオンに罵詈雑言を心で浴びせた。聖女様の心を奪った罪

は重いぞ。

「・・・そうね。もし王族とか聖女とか立場が無く、会っていたらすぐに恋してたわ。だって、本当に素敵な方なんですもの。今日お話ししたばかりだけど、そう思える」

ルナはそう言ってから、表情を暗くした。

「でも・・・、それは無理ね。彼は将来王になる方で、私は聖女なんだから。王族と神殿の長が結ばれることは許されない・・・。そもそも、聖女である私は、結婚できないしね」

「ルナ様・・・」

そうなのだ。王族と神殿は表向きは、対立していないが、権力などは分かれている。国という存在は王がまとめているとはいえ、その内情は国の神官たちを神殿が、そして軍人を軍部がその支配下に置いている。決して交わることの無い、3つの権力。そのトップであるシオン殿下とルナ様が結婚することは出来ない。

ピーナは何だか、悲しくなった。改めて、聖女は自由がないことを感じた。

しゅんとしたピーナを見て、ルナは明るい声をだした。

「気にしないで。私、聖女として頑張ることを決めたのよ？大丈夫」
明らかに、無理しているようだが、ルナがせっかく前向きにしようとしているのを見て、ピーナも自分の顔を笑顔に変えた。

「はい！私も頑張りますよー！！」

「ふふ、ありがとう」

二人は顔を見合わせ、笑いあった。

「そういえば、何だか最近ずっとエドガー総司令官が来られているらしいけど、大丈夫？」

「あー、はい。何とか。．．．でも、何だか嫌な方ですよ。いやみで毎日来るのだと思います。あの時、強制的に帰ってもらったから」

「．．．本当にいやみで私に会いに来ているのかしら？本当は．．．」

「そういつて、ルナはプリプリ怒っているピーナを見たが、結局何も言わなかった。」

はちわめ（後書き）

ルナの恋も少し。王族・神殿・軍部の分権体制は、もちろん日本の三権分立を参考にしています。

きゅうわめ

毎日来るエドガーに加え、お茶という名目でシオン殿下も神殿にくるようになってから、少しずつ、環境が変わっていった。何がかと
いうと、3つの権力の体制だ。それまで、互いに不可侵だった権力が、それぞれの長になる者達が交流をしていることで、下の者達も自分の属している勢力以外の者とも接するようになったのだ。

しかし、この状況を喜ばない者は幾らかいる。その筆頭が、祭司長だ。3つの権力が合わされば、当然一番の権力者は王となる。彼はそれが気に入らないらしい。

神殿という中で一番の力を持っていたのに、王という自分より上に存在が出来てしまうことは彼の矜持が許さないようだ。

祭司長は、聖女であるルナに再三、王や軍のものと交流しないように、忠告してきている。

「王族や軍と付き合うことで、神殿の権威が低くなってしまう、なんて言っているけど、本当は自分が上に立てなくなるのが嫌なだけなんだわ！」

祭司長に注意されたルナは、そう言って怒っていた。

しかし、ルナはシオン殿下との交流をやめなかった。（エドガーは、勝手に毎日来るので、言わずもがなである）彼に恋をしているからという個人的な理由ではなく、聖女としてそのようにしたほうが良いと判断したからだ。

「私、考えたんだけど、3つの権力が反目しているのがいけないと思うの。だって何かあった時協力して動かなくちゃいけないのに、

互いに牽制して動かないのなら意味ないじゃない？だから、私から積極的に動いて、とりなしをしていきたいの。すこしでもそれぞれの権力の関係が良好になればいいじゃない？」

そう言って笑うルナは、もう立派な民を思う聖女の顔をしていた。

しかし、事件は起きた。ルナが何者かに攫われたのだ。

それは一瞬だった。

ルナとピーナがくつろいでいる時、いきなり覆面の男達が入ってきたかと思うと、あっという間にルナを気絶させ攫ってしまったのだ。ピーナは叫ぼうとしたが、誘拐犯に口を布で塞がれ縄で縛られた為、ルナが攫われていく様子を見ているしかなかった。

（ルナ様！やめて、何なの、あなた達！！誰か助けて！）

そう叫んだが、実際に出るのは、「んー」というこもった声だけ。そして、覆面の男達はルナを連れ去り、見えなくなってしまった。

ピーナは呆然と眺めるしかなかった。

しばらくすると異変を感じた神官たちがやってきて、大騒ぎになった。驚いたことに、シオン殿下もすぐに来た。シオンはうなだれる唯一の証人のピーナを個室に連れてイスに座らせ、事情を聞いてきた。

「すると、いきなり数人の覆面の男がやってきて、ルナスタリーナ殿を攫っていったのだね？」

「はい・・・」

ルナが攫われ意気消沈しているピーナは、頭をたれて答えた。シオンでなければすぐに泣いてしまいそうだ。

「なるほど。しかし、その者らはやけに手際が良すぎるな・・・」

「え・・・？」

意味深な言葉に思わず顔を上げると、シオンは顔をしかめて考え込んでいるようだった。

「ピーナ。ここはね神殿、しかも国のトップがいるところだよ？そんな所を易々と入り込んでしまうことはまずおかしい。しかも、ルナスタリーナ殿が休まれて部屋に戻っている時間ちょうどに賊が入るなんて、上手すぎるんだ。誰かが、裏で糸を引いているとは思えない。・・・神殿の者がね？」

「！？そ、それって、神殿に裏切り者がいるということですか！？」シオンの言葉に一瞬頭が真白になる。聖女というのは、国の豊穡を支えている存在だ。聖女がいないと作物はあまり育たないし、病気もはやったりする。聖女が神殿で神にとりなしをして祈りを捧げるので、聖女が国の繁栄をもたらしているといっても過言ではない。その聖女を補助するのが神官であり、神殿なのだ。なのに・・・！

「ああ、本来ならば聖女を支えるのが一番の神殿にいる者の役目といてもいい。でも、その聖女を疎む者もいるのだ。何となく、誰か想像できない？」

翡翠色の瞳で覗き込まれると、ピーナは一人の人間の姿が思い浮か

んだ。

「……祭司長……？」

「そうだよ」

「でも、祭司長は、確かに聖女様を疎んでいましたが、彼は祭司長ですよ？そんなことをしたら、国や、国民がどんな目に合うか分かる分別はあるはずですよ！！」

「ここ最近聖女は不在だったが、この国は栄えている。だが、それはリーダーである王が優秀であるがゆえに、最小限の被害でとどまっていたのだ。聖女がいるなら、もっとこの国は繁栄していくはずだ。」

「それが、分からないようなんだ」

「何故？」

シオンはため息をつく、と、苦々しく話した。

「先代の聖女様が亡くなられて以来、祭司長が実権を握っていたのは君も知っているだろう？彼はね、あくどいことを重ねて今の地位に就いた。君もその噂は聞いたことがあるんじゃない？その噂はほぼ合っているし、もっと酷いことを彼はしているんだ。そんな彼が今の状況に甘んじるとは考えられない」

「そんな……！」

ピーナはあまりの衝撃にくらつと眩暈がした。祭司長のルナへの嫌がらせは知っていた。だが、そこまでする人だとは思わなかった。

「証拠は……あるのですか？」

「祭司長がある大臣と最近連絡を裏で取り合っているのは、掴んでいたんだ。恐らく、利害が一致しての共謀だろう。だから、何か起こしてくるだろうと思っていたんだけど。こんなにも早く動くとは」

「では、祭司長を捕まえて、問いたたせばいいではないですか！」
思わず、イスから立ち上がったピーナを、やんわりとシオンはもう一度座らせた。

「それは、難しいんだ」

「っ！どうして！」

「彼は、実質神殿のトップだよ。そんな人間を確実な証拠も無しに捕まえることはできない。共謀の大臣も高い位にいる。次期王の僕でも、そうそう捕まえることは難しいんだ。だから、僕たちも裏で祭司長の動きを探っていた。今も多くの手下を使ってルナスタリーナ殿を捜させている」

皇太子なんだから、もっと出来ないのですか！？と叫ぼうとして、シオンの顔を見てピーナは叫ぶのを止めた。

シオンの顔は悲痛な面持ちで、自分を責めている様子がまざまざと感じられた。

（この人は悔しいのね……。自分は何も出来ないのに、それを棚に上げて怒るのは筋違いだ）

ピーナは自分が恥ずかしくなった。何も出来ないが、冷静になろう。

「聖女様が見つからないときは、どうなるのですか？」

「・・・恐らく、最悪殺されるかも」

「!？」

「まあ、彼女は聖女だ。だから、彼女が死んだら国の気候は悪くなるし、疫病も流行る。どこかで、監禁されるってのが一番高い。彼らも自分の国が栄えにくくなるのは嫌だろうし」

「そうですか」

殺されるよりはマシだ。ピーナはほっと胸をなでおろした。

「僕も、搜索に加わってくるよ」

「はい」

「・・・こんな時、軍が動いてくれるのなら、すごい助かるんだけど」

はい？

不思議そうな私を見てすこし笑って、シオン殿下は答えてくれた。

「いや、聖女が攫われたのだから、結局軍は動くと思うけど、それまで申請やら会議やらですぐには動いてくれないんだ」

「そうですか」

「まあ、こっちはこっちで一生懸命搜索するから、安心して？んじや！」

そう言っつて、彼は身を翻して出て行った。

ピーナはシオンの後姿を見ながら、先ほどのシオンの言葉を頭で繰

り返してた。

『軍がうごいてくれるのなら』

それを可能にする人間にピーナは毎日会っていたはずだ。

「エドガー総司令官・・・」

次期軍部のトップであり、ナンバー2の彼なら軍を動かせる。

きゅうわめ（後書き）

この世界での聖女概念も含んでいます。

じゅうわめ

ピーナが悶々と部屋で待っていると「失礼する」と言って、エドガーがいきなり入ってきた。

いつも涼しい顔をしている彼が今は非常に焦った様子で、急いだのが分かった。

「エドガー様・・・」

「聖女殿が攫われた、と聞いた。あなたは怪我などはないか!？」

「え、ええ。私は大丈夫です。縄で縛られるくらいでしたから」

エドガーがピーナに迫るように聞いてきたので、少し引きながらピーナは答えた。

毎日嫌がらせに来るエドガーは、無表情にちかい顔だったが、声はどことなく心配そうだった。ピーナは拍子抜けしてしまった。そこまで嫌われてはいないのか？それともこれは安心させる芝居なのだろうか？

「それは何よりだ」

ピーナが元気そうなのを確認すると、エドガーはほっとした顔をした。

それを見てピーナは先ほどまで考えていたことを思い出した。ずっと反目していた人だったが今なら、お願いできるかもしれない。

「あ、あの、エドガー様！」

「？なんだ」

いきなり大声を出したピーナを、エドガーは不思議そうに見た。

「ルナ様が攫われたのです」

「そのようだな」

「あの方は私にとって、本当に大切な方なのです」

「・・・そのようだな」

あれ、少し不機嫌になった。気付いたが、ピーナは続けた。

「シオン殿下に最悪、こ、殺されるかもしれないとも聞きました」

「そうかもしれぬな」

ピーナは自分を奮い立たせて、顔を上げた。今からお願いすることは、これまでの体制を大きく壊すものだ。でも、ピーナにとってこれしか出来ないのだ。

ギュツと自分の手で拳を作る。

「お願いです、ルナ様をお助けください！！エドガー様のお力で、軍を動かしルナ様を捜索して欲しいのです！」

最後は涙声になってしまった。

「申請やら会議などをしていたなら、間に合わないかもしれません。今すぐ、軍を動かして欲しいのです。・・・ルナ様をたすけてえ・・・！」

ふえっと、嗚咽が漏れるのを、ピーナは押さえ切れなかった。

エドガーを見ながら話していたのに、もはや涙の膜でエドガーの姿がぼんやりとしか見えない。

ルナ様、ルナ様、ルナ様！

どうか無事でいてください。神様、どうかルナ様を殺さないでください。

しばらく、二人がいる個室に、ピーナの鳴き声しか聞こえなかった。

「何故だ」

「・・・へ？」

「何故、そうも聖女殿を思える？侍女とは言え家族でもなく見ず知らずの他人だ。しかも、彼女と貴方が会ったのは最近ではないか」

思わずエドガーのいきなりの質問に涙が止まる。ピーナは涙を拭いて、またエドガーを見た。彼は、ことなく、切なく苦しそうだった。そんな様子がまた、壮絶な色気を醸し出していて、ピーナは美形は何をしても得だ、と一瞬場違いなことを思ってしまった。おっといけない。意識を戻さないと。

「ルナ様を愛しているからです」

そう、それは聖女だから、という理由ではない。ルナがルナだからその存在がピーナにとってとても大切なもの。

「何故愛せる？」

「人を愛することに理由はいりますか？」

ピーナがそう言うと、エドガーは目を大きく開いた。しばらく間があった後、彼は「そうだな」と呟いた。

「人を愛するのに理由などない」

そう言つて、何故か熱い眼差しでピーナを見つめた。ピーナはいきなり背中がムズムズして、居心地の悪さを感じた。

なんか、この視線嫌だ。限りなく、嫌だ。

すごい、念が込められていそうなんですけど！

思わず、ピーナは顔を下げて、エドガーを見ないようにした。だが、変わらず熱い視線が自分に注がれているのが、強く感じられた。見られている部分がチリチリと焦がされている気がするのは、何故だろう……。

「あ、あのお、それでルナ様のことなんですが……」
堪らず、ピーナは話を戻すことにした。

「ああ。 承知した。今より軍部は我が名、エドガーの名より
聖女搜索のため全軍をあげて動くこととする」

ん？なんかすごいこと言い始めた、この人。軍が全体で動くのなんて、何時ぶりだろう？つてか、そういうことつて、王様が申請してやっと動くものでしょ？それを一存で決めちゃうなんて……。まあ、エドガー様は、軍部のトップだからいいのか？でも、こんな簡単に通っちゃうものなのかな……。

ピーナが混乱している中、エドガーはきびきびと動いた。

「ヒュージ、そこにいるのだろうか？今私が言ったことを全軍に伝え

る。指揮は私がとる」

「ハッ」とドアの向こうで声がした。そこで始めて部下がドアの前で控えていたのが分かる。

「では、侍女殿。これより私も搜索に向かうことにする。また来る」
そう言つて、エドガーは少しピーナを名残惜しそつに眺めた後、無駄の無い動きで部屋を出て行った。

「・・・。あ、お礼言えなかった」

あまりにもすごいことを言ってくれたので、言葉も発せられなかった。

「ははははは」

ピーナの力ない笑い声が部屋に広がった。

神さま、ありがとう。何にせよ希望が持てそうです。

じゅわめ（後書き）

少し、甘くなりましたかね・・・？

じゅうちわめ(前書き)

いつもありがとうございます。

今日は調子に乗って、2話まとめて更新します。

じゅういちわめ

エドガーにより、軍部が動いたことで、事態はあっけなく終了した。エドガーらは自分たちの軍事力をフルに使い、ルナを探し当て、無事救出してみせたのだ。しかも、ルナを攫った犯人を捕まえ、そこから首謀が大臣と祭司長であることも明らかにし、彼らを拘束してみせた。

誘拐犯の証言により家宅搜索して出てきた多くの証拠から、さすがの彼らも言い逃れが出来なかったようだ。

ルナは大臣の別荘に監禁されているのが見つかったが、特に怪我などもなかった。

「ルナ様~~~~!!!!」

「ピーナ！」

ピーナは助け出されエドガーらによって連れてこられたルナにかけより抱きしめた。本来、一介の侍女が聖女に気安くするなど、いけないことだったが、どうでも良かった。

「良かった・・・！本当に良かったです。あ、お怪我はありませんか！？怖かったでしょう？」

一度、ルナから離れ、体を見るが特に大事はないように思える。

「大丈夫よ？監禁されてどうなることかと思っただけど、すぐにエドガー様達が助けてくれたし」

「うう。お助けできず、すみません。でも、よかったああ」
安心のあまり泣き出したピーナをルナはそっと抱きしめ、背中をさすってくれた。

本来泣くのは逆のはずで、情けなかったが止められなかった。

「エドガー総司令官から聞いたわ。あなたが、エドガー総司令官に至急の搜索をお願いしてくれたのでしょ？本当にありがとう。エドガー様達もだけど、ピーナのおかげで私助かったわ」

「そんな、私はぜんぜん・・・」

「いや、ピーナがエドガー総司令官にかけあってくれたから、早期解決につながったんだ。君のおかげでもあるんだよ？」

シオンの声がして顔を上げると彼がこちらに来ていた。

「殿下・・・」

彼はピーナにしか聞こえない声で

「本当、君だから彼も動いたんだしね？」と言った。

「え？」

ピーナが疑問符を飛ばしていると、シオンは視線をルナに移した。

「ルナスタリーナ殿、御無事で何よりだよ」

「シオン殿下・・・」

ポツとルナの頬が赤くなった。

「僕の力不足を許して。君には怖い思いをさせてしまった」

「いいえ、あなたが一生懸命搜索をしてくれていたことは聞いています。その思いだけで、私はうれしい」

「ルナスタリーナ殿・・・」

え、何このバラ色の雰囲気。何なのさーーーー！！！！
シオン殿下、ルナ様から離れなさい！

ピーナがシオンを睨んでいる時に、エドガーはピーナを見つめていた。

「失礼します」

そんな時、黒髪の軍の者が入ってきた。

確か、前にルナを脅そうとして一緒にエドガーが連れてきた部下だ。

「今回の主犯サルバル大臣、エンボ祭司長の拘束をしました。今は関係者の割り出しを行い、判明次第その者らも捕らえることになります」

「・・・」

「ありがとうございます」

エドガーは無言で頷き、シオンは笑顔で頷いた。

シオンと見つめ合っていたルナは、エドガーにあらためてお礼をしようと思いついた。

「エドガー総司令官、あらためてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました」

「いや、このような事態だったのだ、当たり前のことだ」

「そういつてくると、有難いです。あなたの素早い御決意がなければ、私はここにいなかったかもしれません」

そう言つて、エドガーに笑いかけた。

「何かお礼をしたいのです。何か私に出来ることはございませんか？聖女としての地位を乱用することは出来ませんが、私個人として何かしたいのです」

「そうか。であれば……」

エドガーはチラリとピーナを見た。

「時々、あなたのところに話をしに行くことを許してもらいたい」

「ふふ。私というより、別のものと話しがしたいのでは？」

「……」

ルナがからかう様に笑つと、エドガーはふいつとそつぽを向いた。

「喜んで。毎日でも来て下さつて、かまいませんよ？あいにく、聖女としての学びで私が不在の時がありますが、その時はピーナがお相手するようにしてもよろしい？」

「！よろこんで」

「えっ！！??」

ルナの言葉を聞くと、エドガーは喜色をあらわにした。とても嬉しそうだ。

逆に二人の会話に耳を傾けていた、ピーナはルナの言葉にショックを受けた。

な、なんですか！？ルナ様！

私はお相手なんて出来ませんよー！お茶を出すだけでも一杯一杯なのよ！

ピーナは、思わず心で叫んだ。

なかなか、すべてが上手くいくことは難しい。

ピーナが絶望している中、シオンとルナは楽しそうに笑い、エドガーはジッとピーナに熱い視線を送っていた。

数日後、犯人の大臣、祭司長の悪事が国全体に明らかになった。また、一挙に関係者らもつかまり、国に巣くっていた狸どもが消えることになった。

この事により、神殿の権力は実質的にもルナのものとなり、新しいリーダーのおかげで神殿の悪い体制も見直しされるようになる。

じゅうにわめ

「いい天気ですよ、ルナ様」

「そうね」

誘拐事件が起きたとは思えないほど、のどかな天気だ。

「じゃ、私そろそろ行くわね」

「今日は、神官様たちとの清めの儀式ですね？無理のないようにしてくださいね？」

「ええ、分かっているわ。・・・後はよろしくね」

「・・・うー、はい」

あの事件以来、大々的に神殿の関係者以外のものが、神殿にも入れるようになった。それは、いいことなのだが、ピーナにとってはあまりうれしくない事態を引き起こしている。

コンコンと音がする。

「はい」

ピーナは返事をした。

「エドガーだ。失礼する」

ドアが開き、いつもながら誰もが見とれてしまう見目麗しいエドガーが、入ってきた。

「こんにちは、エドガー様。残念ながら、今日もルナスタリーナ様はお勤めに行ってしまったのですが・・・」

「かまわん。待つとしよう」

「はあ。お茶を用意致しますね」

「すまない。・・・待っている間、話し相手になってくれるか？」

「ワカリマシタ」

毎日同じように繰り返されるこの会話。何度ルナがいないと言っても、このエドガーは仕事の合間に来るのだ。さりげなく、ルナがいる時間を教えるのだが、この男はその時間には逆にまったく来ない。そして、依然と上手い具合にルナがいない時間に来るのだ。だから、侍女であるピーナは今日も嫌々ながらエドガーの相手をする。

（やっぱり嫌がらせなの！？で、でも、ルナ様が攫われた時は親身になってくれたし、その恩はしっかり返さなくちゃよね？）

思わず出そうになるため息を抑え、ピーナはエドガーの向かいに座った。エドガーを見ると、ずっとピーナを見ていたのか、エドガーと目が合った。

その瞬間

ギンツ!!

(ひいつ!)

エドガーの鋭い眼光がピーナを貫いた。眉の間のしわが寄り、切れ目の瞳はさらにそれに陰しさが一層増していて、まるで戦う前の気迫が感じられる。そんな雰囲気一般人のピーナが平常心でいられるはずもなく、冷や汗が流れる。ピーナ蛇に睨まれた力エルのごとく動けなくなる。もちろん、恐怖によりだ。少しガタガタと体が震える。

以前からエドガーに睨まれてはいたが、最近ではその睨み方に殺気が込められている。もう、睨み返すことも怖くて出来ずにいるのだ。

「・・・好きな食べ物?」

「え!? 私ですか? わわわ私は、甘いものが好きでありますっ!」
思わず、軍人のような話し方になってしまっピーナ。

「具体的にどんなものが好きか?」

「えと、ピラの実のタルトでありますっ!」

「他には?」

「はっ! ザリアのケーキもですっ!」

何の尋問だ、と見ている者がいたなら突っ込むだろうが、生憎とい

うか幸せなことというかそんな人間はいなかった。

そしてこの会話という尋問の時間は毎日行われている。ピーナが苦手に思うのも、しょうがないことだろう。

この時間、ピーナは半泣きになりながら、エドガーの相手をする。

（ルナ様　　！助けてください〜〜）

ピーナは自分の主の名を心で叫ぶ。この酷い状況を、いつも涙涙にルナに語るのだが、ルナは怒るところかニコニコと笑うだけで助けようとはしてくれないのだ。かえって、ピーナに留守番をさせエドガーの相手を積極的にさせてくる有様だ。なんの拷問だ、これ。ルナ様ひどい！

「それでは、好きな色は？」

「き、黄色でしょうか」

「濃い目の黄色か？薄めの黄色か！？どっちだ」

「ひえっ。どちらかというと薄めであります！」

この日の会話以降、エドガーがなぜかピーナが好きだと言ったお菓子を手土産に持ってくるようになった。初めは「何の呪い！？毒でも入っているの？」と恐怖していたピーナだが、毒が無く、しかももって来るお菓子がどれも有名店のものだと分かると、喜んで食べるようになった。

「しかし、不思議な人だな。侍女である私に良くしたって、何の得も無いのに」と能天気にもぐもぐケーキをつつきながら食べるピナだった。

じゅうにわめ（後書き）

恋愛小説を書いているつもりなのですが、まったくもって甘くなり
ません（笑）すみません

じゅっさんわめ

「いや、カラピヤの地でのエドガー様はさらにすごいカリスマ性を発揮したんだよね。この時らへんから、総司令官の能力を全開で発揮して、周りも認めるようになったってわけよー!!」

「はあ」

「かつこいーんだよ。すごいモテただけど、エドガー様は全然女の子を相手にしなくてさ。でも、一度認めた部下とかはスゲー大切にするから、きつと誰かに惚れたら一生そのこの子のこと大切にするね、きつと!」

「そうですか」

「うんうん。俺も保証するし。エドガー様はすっげー優良物件だよ」

「へえ」

ピーナは一刻ほど前から続く目の前にいる男の話に、うんざりしながらも相槌をうつていた。

目の前にいる男は、エドガーの右腕とも呼ばれるスカル・ヒュージ大佐である。ツンツンと無造作に生えている短い黒髪に、人懐っこい笑顔の持ち主だが本音を見せない瞳は、さすがエドガーの腹心の部下である。以前、ルナを脅しに来たエドガーの後ろにいた部下の一人だ。

そして、何故か最近ピーナのところに来てお茶を飲みにくるようになった。と言っても、楽しい談笑というわけではなく、1・2時間延々とエドガーがどんなにすばらしい人物かを語るのを、ひたすら

ピーナが聞いているだけなのだが。

めんどろなことに、ヒュージ以外にも、エドガーの部下の何人かが入れ替わり立ち代わり来るようになった。かれらもヒュージ同様、エドガーがどんな偉業を成し遂げたかを延々と話していくのだ。おかげで、エドガー様フアンのお嬢様方とエドガーについてのトークができるくらいに、エドガーのことを知れた。まあ、別に知りたくもないけど。部下の方々の話の内容は結局エドガーを褒めるものなので、さすがに飽きて時々意識を飛ばしながらも聞くようにしている。

毎日、エドガーの相手をするだけでも、大変な心労なのに、ピーナの苦労は増えるばかりだ。

（もう、軍の方達って、どうして迷惑なかたばかりなの！？っていうか、どんだけヒマしているのよ！！ここに来る暇があれば、体でも鍛えてればいいのに）

ピーナは内心、軍人達に毒づいた。

「ところで、ピーナちゃんの好みの男性ってどんなタイプ？」
ずっとエドガーのことを話していたのに、話題がいきなり変わった。

「わ、私ですか？」

「そうそう。正直にお兄さんに言ってみなさい。男性として良いアドバイスが出来るかもだしね」

ニコニコと言うヒュージ。いきなり、何なのだ。

「え、えと。神殿ですつとルナスターナ様をお支えしたいと考えておりましたので、あまり男性の方をお付き合いするということは考えてませんでしたので、特には・・・」

「ま、マジで？」

「はい」

ヒュージの顔が真っ青になった。

「じ、じゃあ、結婚とかする気はないの!？」

「あまり。まあ、両親には文句をいわれるかもしれませんが」

ピーナはルナをこの神殿の中で、守ろうと決意してから結婚しないで独身のまま神殿に勤めようと獏全と思っていた。小さい時から、神殿の中で働いていたから、そんな色恋にも縁がなかったし、大して未練は感じていない。

「ダメだーーーー!!!!!!」

「うええ!？」

いきなり、ヒュージが叫び、ピーナに詰め寄った。

「ダメだよ? ピーナちゃん! 若い子がそんなこと言っちゃ! 女の子なんだから、結婚とかには夢を持たなくちゃ! それに、神殿ですつ

と勤めるたって、結婚して勤めることもできるんだしね、ね？」

「は、はひ」

ヒュージの気迫に唖然としながら、ピーナは返事をした。

「そうだ！神殿に勤めているんだから、玉の輿とか狙ったら？お偉いさんとか聖女様関係でここに来るでしょ？そんな出会いで恋が始まったりして〜」

「私なんかにありえませんよ。結婚するとしたら、親が準備した縁談とかではないでしょうか」

「いやいやいやいやいや。あるかもだよ？きつと、ある！ってか、絶対ある！！」

ヒュージは自信満々に言い切った。その自信はどこから来るのか。

「ありがとうございます？」

「ピーナちゃん、灯台下暗しだよ？近くに意外とその出会いが始まっているかもだよ〜？」

ニヤニヤと笑うヒュージ。

あ、なんだか、嫌な笑い方だ。

帰り際、「いい？結婚を諦めたら、ダメだよ？約束だよ？」と何度も確認してくるヒュージに、曖昧に返事をしながら、見送った。本当、めんどくさい人たちだ。

一息入れていると、ドアが叩かれた。

「はい」と返事をし開けると、案の定エドガーだった。いつもながら、軍の服装をきちつと隙なく、着こなしている。

「失礼する。先ほど、ヒュージがお邪魔したようで、申し訳ない」

「いえ。先ほど結婚についてアドバイスしていただいたんですよ」

「け、結婚？」

「はい」

いつも冷静なエドガーだが、何だか焦っている。

「ちなみに、どんなことを話したのか？」

「えーと、好きな男性は？とか？」

「・・・ヒュージめ」

「ひっ」

エドガーは小さく、毒づいた。目が鋭くなり、殺気が流れた。

しかし、怯えるピーナに気付くと、殺気を引込め、ゴホンと咳払いをした。

「・・・ピーナ殿はどのような男性が好きだと答えたのかな？」

何気なく聞こうとしているエドガーだが、目は『早く聞かせろ』とせつついている。

「私は聖女様のお側ですつと働きたいので、結婚する気はないとお

話しました」

ピーナが答えると、エドガーは衝撃を受けたように、目を大きくした。音が聞こえるなら、雷が落ちた音がしたはずだ。

「そ、そうか」

しばらく、エドガーは呆然として、かすれた声で呟いた。

「すまない。今日は用事が出来た。帰ることにする。これは土産の菓子だ。食べてくれ。では」

そう言って、フラフラとしながらエドガーは部屋を出て行った。

「何だったのかしら？・・・まあ、今日はすぐ帰ってもらったし、お菓子ももらったし、よしとしますか」

考えることが好きでないピーナは、エドガーのことを考えるのをすぐに放棄し、菓子のつつみをウキウキと開けた。

その日のエドガーの機嫌は最悪で、軍人達の鍛錬の時間はまさに地獄絵図だった。特に、何故かエドガーの攻撃はヒュージに向かったらしい。

だが、本日もインシュベルツは平和である。

じゅっよんわめ(前書き)

な、なんとか更新間に合いました！
今回は、エドガー視点です。

じゅっよんわめ

軍部の総司令室で、エドガーは悩んでいた。悩みの元凶はもちろん、聖女の唯一の侍女、ピーナ・リロットについてである。

そして、悩みとは彼のピーナへの恋についてである。

彼とピーナの出会いは、とても衝撃的な出会いだった。

初め、エドガーは神殿のトップの聖女であるルナを脅し、軍部の権力を強くしようという目論見で、神殿に押し入った。本来、軍部が神殿に立ち入ることは不可能なのだが、神官を怯えさせ無理やりルナに会おうとした。

この国最強のエドガーの圧力に神官たちはすんなりと聖女のもとへと連れてきた。このまま、計画通り聖女を脅すことができると思った矢先、出会ったのが彼女　ピーナ　だった。

ピーナは小さい体で屈強な男達に歯向かってきた。位ばかり高い神官たちが自分たちに恐怖して聖女に会わす事を了承したのに対して、元下女であるピーナが自分達を恐れずに対抗してきたのだから、おかしいものである。

少し脅せばすぐに引くだろう、と思っていたのだが、彼女は頑として引かなかった。彼女の聖女に対しての忠誠心がとても厚いものであることが分かった。仕方なく、剣や殺気を使って、退いてもらおうとしたのだが、彼女はやはり引かなかった。

逆に、軍のトップである自分に怒り、皮肉まで言ってくる始末だ。

初めは、彼女に対して憤怒の気持ちがあつた。しかし、彼女と睨みあっている内に、胸が激しく動悸するのが感じた。『何だ、これは？』と心中焦った。

ずっと自分を睨んでくる彼女がけなげに感じられ、それでいて可愛く見えてしょうがない。普通、総司令官である自分に齒向かおうとする人間なんていない。媚を売るか、従うかだ。なのに、この少女は違った。自分にけんかを売ってまで、聖女を一生懸命に守ろうとしてきたのだ。彼女の一生懸命な姿に、エドガーは胸が打たれた。

睨んでくる　　といつても、可愛くて迫力はないのだが　　ピ
ーナを、見ていられなくなる。体中の血が逆流しているようで、熱
い。

たまらず、踵を返してそこから去っていた。

この気持ちが恋であることに気付くに、そう時間はかからなかった。

初恋だった。

恋だと実感すると、エドガーの行動は早かった。

初恋は上手くいかないと世間で言われているようだが、エドガーは失敗させるつもりは毛頭なかった。将来、ピーナを妻にすることは、彼の中で既に決定事項である。

彼は獲物を狩る獣のように、どうすれば獲物を捕まえられるか考えた。

とりあえず、アプローチの為、毎日聖女に会うという名目で、ピーナに会いに行くことにした。聖女に会ってしまったら、この言い訳は使えなくなる為、神官たちをお願いして（脅して）聖女が部屋にいない時間を教えてもらい、ピーナのもとへ通った。

だが、緊張のあまり話すことが出来ず、彼女を見つめることしかできなかったのは不覚である。しかし、優しい彼女はそんな自分をずっと見つめてくれた。お互いに視線をはずすことなく見つめ合う時間は、エドガーにとって甘美であり幸せな時間となった。

そんな時、聖女が攫われた、ということが耳に入り、すぐさま神殿に向かった。エドガーの頭には、聖女ではなく、ピーナが無事かどうかしか無かった。彼女は無事であったが、聖女を心から大事にしているのが感じられ、正直面白くない。聖女への思いは男女間のものではないと分かっている、彼女は思いがすべて自分に向けて欲しいと思ったからだ。

気持ちを抑えられず、「何故、それも聖女殿を思える？」と聞いてしまった。

彼女はまっすぐ自分を見つめ「愛するのに、理由は要りますか？」と逆に聞いてきた。その言葉を聞いて、甘い疼きを感じた。

そつだ、自分は彼女を愛している。何故かと聞かれても、『ただ、愛しいから』としか答えられない。彼女のすべてが好ましく、愛しい。欲しくて、堪らない。この気持ちに理由はないが、それでいいのだ、と彼女に言われている気がした。

甘い気持ちに浸っていたかったが、事態が事態であつたので、すぐ聖女の搜索へと向かった。本来軍が神殿のためにすぐに動くことはない。だが、理由があれば、別だ。ピーナの願いだから、この理由に勝る理由はない。愛しい者の笑顔を見る為に、全軍を使い搜索にあたらせた。

現在聖女を助けたからか、以前よりピーナの態度がやわらかくなつた気がする。

そつ、チャンスなのだ！

好きな女が自分に好意（恋愛の好意ではないが）をもっているこの時が、まさに好機！ここぞ、とばかりにエドガーはピーナに質問をし、彼女の好きなものから嫌いなものまですべて知ろうとした。

今では、『ピーナ 研究ノート』が10冊になり、そろそろ11冊目に突入する。

知れば知るほど、彼女が好きになっていく。

彼女の名前も、侍女殿からさりげなく名前呼びするようにした。ちなみに、最終的な目標である彼女の呼び方は、『ハニー』だ。

そんなとき、彼女が結婚する気が無い、と聞いた。あまりのショックに、彼女との会話もそぞろに帰ってしまった。しばらく、落ち込んだ。

しかし、彼女が結婚する気がないから、何なのだ。

彼女が結婚する気にさせればいいだけのこと！
そう、それだけのことなのだ。

エドガーは、新境地に至った。

思わず、笑いが出てくる。

一人静かに、エドガーはクックククと笑った。

「総司令室のドアの前にて」

「おい！エドガー様が一人、笑ってるぞ！」

「こ、こえー」

「ヒューブ！お前、入って書類出してこいよ」

「無理だっつーの！今行ったら、絶対殺される！ピーナちゃんの
と考えているのを邪魔するだけで、機嫌が悪くなるんだぜ！？」

「だよな！本当重症、っーか、なんっーか・・・」

エドガーの部下である大の屈強な男たちは、擦った揉んだとお互い
に必要な書類を誰が出すか、押し付けあっていた。恋は盲目、とい
うが、エドガーはそれが特に酷かった。獲物^{ピーナ}を手に入れるために、
容赦はしないだろう。

「しかし、哀れだよな。ピーナちゃん」

「そうだよな」

「よりもよって、あのエドガー様に好かれるなんて・・・」

「良い子なんだけど」

いくら、容姿・頭脳・地位が揃っていても、エドガーが向ける愛情は、半端ない。ってか、絶対重い。重すぎる。

男たちは、哀れな獲物に、哀悼の意を捧げた。

じゅっわめ

最近、城下では噂が飛び回っている。その噂に出る主な人物達は、この国を担っていくシオン殿下、エドガー総司令官、聖女のルナスターナだ。

どんなことが噂になっているかというと、シオンとエドガーが聖女に恋をして毎日のように神殿を訪れて、求婚している、というものだ。事実エドガーは毎日ルナに会いにくる、という名目で来ているし、シオンは毎日というわけではないが、ルナとの度々のお茶会を楽しんでいる。

こんなことから、噂の真実味も増して、まことしやかに人々の間で話しが飛び交っているのだ。

その噂は神殿にも当然伝わっており、ルナは少し困ったように「うん、どうしよう」と苦笑いしていた。シオンとお茶会は、ルナ自身心待ちにしているものであり、噂もあながち間違っていないかもしれない。しかし、シオンはいいとしても、エドガーのルナに対しての思いは噂とはまったく違うものだ。エドガーはまったくいっていいほど、ルナに関心はなく、別の人間に夢中だからだ。だからといって、それは、当人達で越えていく問題であって、周りの人間に明かしていいものではない。この噂はルナにとってあまり好ましくないものだったが（特にエドガーものは）、大切な侍女を守る為にも、ルナはこの噂に対しては、何も否定も肯定もせずただ無言を貫くことにしたのだ。

だが、周りの人間はそれを許さないらしい。

ピーナは部屋の掃除をあらかた終えて、満足げに部屋を見渡した。いつも頑張っているルナが、せめて部屋でくつろげるように部屋の掃除には余念がない。

「よし！我ながら、完璧ね！」

キラリと額に浮かぶ汗をぬぐい、満面の笑みだ。

（すこし、休憩しようかな？）

そう、お茶の準備をしようとした時、ドアがコンコンと叩かれた。なんだろう？と思いながら、「はい」と返事をして、ドアを開けるといつぞやの神官が困った顔をして立っていた。

「どうしましたか？」

「聖女様に御面会をしたい、というお方がこられておりまして・・・」

あれ？なんだかこの感じ、前もあつたような・・・。
内心、ピーナは首をかしげた。

「エドガー様ではなく？」

「はい。実は……第一王女フィレナ様です」

なんですと！？

「シレアの葉の茶にございます……」

そう言つて恐る恐るカップをフィレナの前に置くが、フィレナは眼差しをピーナに向けず無言だった。

あの後、かしこまった神官に連れられてきたフィレナは「聖女殿に用があります。居ないのであれば、少しここで待ちます」と啞然とするピーナに言い放ち、ピーナが返事をする前に部屋にさっさと入ってしまった。

以前一度だけ見たことがあるフィレナは、なかなかの美少女である。美しい母親と同じ輝く金髪を丁寧にカールさせ、毎日お手入れされているだろう肌は、毎日働いてガサガサになっているピーナとは大違いに綺麗だ。また、蒼い瞳は、シオンと同じ色だが、強い意思が感じられる。年は18歳なので、ピーナと同じ年なのだが、そうは思えないくらいの堂々とした態度だ。

お茶を出し終わると、ピーナはすぐすごと後ろに下がった。本来ならば、侍女とはまるで居ないもののように控えめにしているべきなのだろう。しかし、主であるルナはピーナを親友のように扱い、シ

オンも何かとピーナに話しかけてくれる。あの恐ろしいエドガーでさえ、お茶を出す時には「ありがとう」と言いつくらいだ（その後は尋問のような空気が怖いが）。

だが、フィレナはピーナに目もくれない。上にいる者として当たり前態度なのだろうが、少し悲しい。

（いつも、皆さんが優しいから、それに慣れてしまったのね。甘えちゃダメだ！）

自分に渴を入れ、静かに侍女らしくたたずんでいると、いきなり黙っていたフィレナに話しかけられた。

「あなた、聖女様の侍女でしたね？」

「は、はい」

いきなり話しかけられたことに驚きつつも、ピーナは答えた。

「聖女様はどんな方かしら？私、御挨拶に来て下さった時しか、お会いしてないからよく存じないの」

「と、とても優しい方です。容姿だけではなく、心も美しいのです。私のような者がお仕えするのがもったいないくらいです」

「ふーん」

なんだか、フィレナは気に入らないと言わんばかりに相槌をした。

「最近、お兄様が聖女様のところに通われているみたいです。そのせいで、良からぬ噂が飛び交っています。あなたも聞いたことはあるでしょう？」

「はあ。少しは」

「そのような噂は、本来されてはいけないものだわ。聖女様が誰かと恋するなんて、人々の動揺を誘います」

聖女が結婚してはいけない、という法はない。しかし、聖女が結婚した、という例は極端に少ない。というか、初代の聖女以外は皆結婚しなかったらしい。というのも、聖女という国の状態を支える存在と誰かが結婚しようものなら、その男は大きな権力を握ることができるようになる。聖女の力を思いのままに操ることが出来てしまえば、国の体制自体が崩壊する可能性がある。それを防ぐためにも、聖女が結婚するのは暗黙のうちにタブー化されているのだ。

だが、聖女といえども一人の女である。恋もすれば、誰かに愛して欲しいと思うのは、当然である。なのに、聖女の恋自体、禁忌のようについてくるフィレナの言い方はピーナにとって好ましくなかった。

「・・・・・・・・」

思わず、返事に窮していると、構わずフィレナは話を続けた。もとより、ピーナの返事なんて気にしていないのであろう。

「それに、あのエドガー様が毎日ここへ来ている、というわけではありませんか。エドガー様は将来軍の頂点に立つ方ですよ？なのに、時間を取らせているなんて・・・！」

エドガー様がルナ様がいる時間にこないのが、一番の原因です。

そう言えたら、なんてスツキリするだろう。
ピーナは、段々文句のようになってくるフィレナの話を、我慢して聞いていた。

そんな中ドアが叩かれ、「エドガーだ」と声がした。

最悪のタイミングだ、とピーナは絶望した。
逆にフィレナは、先ほどの鬱々とした表情から一気に、頬が赤くなり表情が明るくなった。

そして、入ってきたエドガーに笑顔でかけよった。先ほどの高圧的な雰囲気はどこへ・・・？

「エドガー様！お久しぶりです。このようなお会いできるなんて、嬉しいですわ！」

「・・・」

エドガーは、怜悯な顔を少ししかめた。頬を染め見つめてくる王女の後ろには、意中の少女がたたずんでいるが、なんだか顔色が冴えない。

「・・・お久しぶりですね。あなたも聖女殿に御用か？」

「ええ、少し御話したいと思ひまして。エドガー様もですか？」

「ああ」

そう言つて、エドガーはすり寄るフィレナを避け、ピーナのところへ大またでやってきた。

「今日も待たせてもらう。これはいつもの菓子だ」

「ありがとうございます。あ、これは・・・」

「ああ、確かピーナ殿が一番好きだと言っていた、ピラの実のタルトだ」

覚えてくれていたんだ・・・。なんだか、フィレナの見下す態度に冷たくなっていた心が、温かくなった気がした。いつもお菓子を持つてくるエドガーに当たり前になっていたが、本当はとても感謝すべきことだったのだと、改めて感じさせられた。

「嬉しいです！」

溢れんばかりの笑顔で、お菓子を受け取ったピーナに、エドガーも口元をほころばせた。

そんな二人をみて、フィレナは美しい顔を歪めた。

「・・・エドガー様はいつもこちらへいらして、聖女様をお持ちしているとか。その間は何をしているのかしら？」

「何も。ただ、お茶を用意してもらい待っているが」

いつになく怯えないピーナとの会話を邪魔され、内心イラついていたエドガーは、淡々と答えた。

「あなたが用意するの？」

フィレナの目線がピーナに移り、ピーナは焦った。なんだか、睨ま

れている気がするからだ。

「は、はい」

「そうなの・・・」

そう言っで、フィレナは考え込むように黙り込んだ。

じゅっわめ（後書き）

ライバル登場！

じゅじゅくわめ(前書き)

よろしく願います

じゅろくわめ

「では、ルナ様。実家に帰らせていただきますね。夜には戻ります」

「分かったわ。でも、いいの？泊ってもいいのよ？」

「ダメですよ。ルナ様のお世話をする侍女は私だけなんですから！それに、これ以上は甘えられません！！」

「ふふ。ピーナらしいわね」

ピーナはいつも着る侍女の服装ではなく、軽装の格好をしている。何故なら、今日は実家に帰るのだ。その理由は、昨日に遡る。

フィレナに会って、少し元気が無いピーナにルナはすぐに気付いた。

「今日、フィレナ王女がいらした、と聞いたんだけど本当？」

ルナが、心配そうにピーナをみた。

「あ、はい。ルナ様に用事がある、とのことでしたが、結局エドガ様と一緒に帰られました。」

「そうなの。何しにきたんだか」

そういえば、そうだ。フィレナは、待っている間ずっとエドガーにひっきりなしに話しかけ、ルナが来ないうちに帰ると言ったエドガーに付いて一緒に帰ってしまったのだ。

エドガーは、自分に付いてくるフィレナを嫌そうに見ていたが、諦

めたように何も言わず去っていった。

「そうですね」

ルナはピーナに近寄った。

「それはそうと、何だか元気ないわ。どうしたの？」

「え！？別になんでもないです！！」

ピーナは手をブンブン振って、否定した。

あはははは、と誤魔化そうと笑うピーナを胡乱な目で見たルナは、
「そうだ」と手をポンと叩いた。

「明日は、気分転換に城下に下りて、実家に帰ってみたら？」

「ええ！？そんな、お仕事がありますし・・・」

「いつもピーナは頑張ってくれているから、御褒美よ！」

「ルナ様」

「これは、命令なんだからね！」

腰に手を当てて怒ったように言うルナ。しかし、本当に怒っているのではなく、ピーナへの愛情のために、言ってくれているのがピーナにまざまざと感じられた。

「はい・・・」

ピーナは、頷いた。本当に、ルナ様に仕えられて良かった、と思いつつながら。

こんなわけで、翌日ピーナはルナの『気分転換に』という言葉に甘えて、実家に帰ることにした。最近、侍女になって実家に帰るのもご無沙汰になっていたので、ルナの申し出は有難かった。ルナは神殿の門まで、ピーナを見送るために、一緒に来てくれた。

「では、行ってきます」

「行つてらっしゃい」

ルナは大切な侍女　ルナは大親友と思っているが　の後姿をまぶしそうに見た。ルナがこうやって聖女としての役目を出来ているのは、ピーナの励まし・存在が大きいい。ピーナがいなければ、自分はこうやって、立っていないかっただろう。彼女の明るく、一生懸命な気持ちは、ルナの心を暖かくする。

そんな大切な彼女に、今春が来ている。・・・といってもピーナは分かっている。だが、ピーナにとって大切な時期だろう確信している。だからこそ、壊してはいけないと思う。ピーナとエドガー、二人の恋がどうなるかは分からない。だが、大切に見守っていききたい、と思うのだ。

小石に躓き、転びそうになったピーナを見て、ルナは小さく笑った。

「頑張れ、ピーナ！」

そう呟いて、自分の今日の勤めのため、くるりと後ろを向いて歩き出した。

「久しぶりの家だな。よし、何かお土産でも買っていこう！」

最近、来ていなかった城下は、いつものようににぎわっている。ピーナは露店の商品や、様々な店、行き交う人々に目と留めつつ、久しぶりの城下を堪能していた。

ピーナの家は、城下のパン屋を営んでいる。祖母と両親、そして５つ離れた弟がピーナの家族だ。

弟のビリーにはペンを買ってあげよう。なんでも、学校のクラスでの成績が一番らしいし。

少し、生意気になった弟の顔を思い出しつつ、フフと笑っていると「ちよいと、待ってくれんか」とお爺さんに呼び止められた。

来ている服はお世辞にも綺麗とはいえず、伸び放題の髪と髭は彼の顔を見えなくしている。

ただ、髪と髭の間から少し見える瞳は、老人とは思えないくらいキラキラと精彩を放っていた。

「すまないのう、お嬢さん。ぎっくり腰になってしまって、動けないのじゃ。ちよいと、家まで送ってくれないかのう」

「わ、大丈夫ですか？もちろんです！お家はどっちの方面ですか？ピーナはすぐに、老人の肩を持った。」

「ありがとう。あっちの方面なんだが、大丈夫かね？」

老人は指で方角を示した。

「はい、分かりました！」

「何か、用があったのでは、ないか？すまないことをした」

老人は、眉を下げ申し訳なさそう（といっても表情はみえないが）にした。

「いえいえ。後でまた買うこともできますし、お爺さんのことのほうが大切ですから！ぎっくり腰なんですよ？痛いのでしょうか？私の祖母もよくなってつらそうにしていたから、気持ちわかります」

「ほっほっほ。そうかいそうかい。お嬢さんのお婆さんも、良い孫をもったようだな」

「そんなことは・・・」

ピーナは照れくさそうに、頬を赤らめた。

この後、老人を家に送ろうとしたが、それはなかなか難しかった。

その原因は老人本人にある。この老人、家に送る途中「実は買い物があつて、店に寄つて欲しい」と一つに限らずいくつものお店に寄せ、買い物させた。ぎっくり腰はどうしたのか、とツツコミたかつたが、ピーナは我慢して根気強く付き合つた。

おかげで、ピーナは老人と荷物の両方を持つことになり、へとへとになった。仕舞いには、「廁にいきたい」と言い出し、ピーナは老人を廁の前で大量の荷物と待つ羽目になった。

「おお！あそこがわしの家じゃ。着いた着いた」

「こ、ここですかあゝ？ぜつはあゝ、良かったですう」

そう言うピーナは疲れ果て、息が切れていた。しかも、すっかり夕方になってしまった。

「ありがとう、お嬢さん。お礼にお茶でもどうかかな？」

「け、結構です！お気持ちだけ受け取っておきます！」

このまま、お爺さんに付き合ったら、もう実家に帰れなくなる。それでは、せつかくのルナ様の気持ちを無駄にってしまう！

「そうか、残念じゃのう」

老人は懷からガサガサとまさぐった。

「これは、せめてもの礼じゃ。もらっておくれ」

そう言つて、ピーナに差し出したのは、シンプルだが、綺麗な蒼い石に獅子の模様が刻まれているペンダントだった。

「え、そんな・・・！こんな高価なものお受け取れません！」

「いやいや、君に受け取ってほしい。わしのような爺が持つよりも、お嬢さんのようなかわいい子にこれは相応しい」

「で、でも」

「もらつてくれるじやろう？」

そう言つて、老人は強制的にピーナの手にペンダントを握らせた。少し垣間見えた老人の力強い瞳に、圧倒されピーナはペンダントを貰い受けていた。

「あ、ありがとうございます。それでは・・・」

「ふむ、また会えたらの」

そう言つて元気そうに腕をブンブン振つて、老人はピーナを見送つてくれた。

本当に、ぎっくり腰だったのだろうか……。澁刺とした老人に疑問を抱きつつ、ピーナは実家に向かった。

疲れて、トボトボと歩くピーナの遠ざかる背中を、老人は目を細めて見ていた。ニコニコと笑う様は、まさに好々爺だ。

「とても素直で優しい子ではないか」
老人は長い髭を触りながら、呟いた。

「あの子なら良いだろう。」

また、会おう。ピーナ・リロツト」

老人はいつのまにか、消えていた。

ピーナは暗くなった、帰り道を急ぎ足で歩いていた。
夜だからといって、にぎやかなこの城下町では人が見えなくなることは無い。だが、ルナと夜には帰る、と約束していた為、急がねば

ならない。

老人と別れたあと、ピーナはやっと実家に帰った。家族にはお土産もペンも買えず申し訳なかったピーナだが、家族が喜んで迎え入れてくれたので、ほっとした。

家族と一緒に夕飯を食べた。ピーナは、ずっとルナがどんなに素晴らしい女性かを政治家のごとく大演説した。

ピーナが聖女の侍女としてやっているのか不安だった家族も、ルナが良くしてくれているのを知って安心したようだった。

短い時間だったが、久しぶりの実家を堪能し、ピーナは意気揚々と神殿に帰った。

翌日、とんでもないことが待ち受けているとも知らずに。

じゅうななわめ

ピーナは気分がとても良かった。ほんのひと時だったが家族と会うことができ、嬉しかったからだ。

昨日あったお爺さんにもらったペンダントは、服の中に隠れてはいたが身につけていた。なんだかんだ言っても、お爺さんの好意がうれしかったからだ。

蒼い石でできたペンダントとは、ピーナの胸のあたりで淡い光を放っている。

ルナ不在の中、いつもよりも早く洗濯物や掃除を片付け、暖かい天気にまどろんでいると、神官がやってきて来客を告げてきた。

「フィレナ王女がピーナ殿に、面会を御希望です」

「わ、私ですか！？ルナ様ではなく？」

「はい、そのようです」

一介の侍女に王女が話があるなんて、考えられない。神官も不思議そうにしていたが、伝えられた内容をそのままピーナに話した。

「なんでも、ピーナ殿だけに用があるらしく、お一人で来て欲しいそうです。フィレナ王女は客室にてお待ちです」

「はあ……。分かりました」

ピーナは観念し、神官の後ろについていった。

（何故に私！？偉い人となんて、今まで話したこと無かったし、緊張する！……ん？待てよ？結構私偉い人と話してるかも。ルナ様はもちろん、シオン殿下でしょ？あ、エドガー様も一応偉い人なのよね……。忘れてたけど。ヒューブ様や他の部下の方々も実は軍の幹部の方々だし……。私って実はすごい環境にいる！？）

今更に、自分の状況を把握したピーナだった。そんなことを考えていると、いつのまにか客間に着いていた。

どうしましょう、とここへ連れてきた神官に目線で訴えるものの、諦めたように首を振られた。あ、裏切りましたね、今！！
神官は「では」と小声で言い、去ってしまった。

ちよ、待つてください！ピーナはそそくさと去る神官の背中に、思わず手をのばした。しかし、神官は触らぬ神たたりなし、というようにさっさと行ってしまった。

頼りにならねえ！

ピーナはドアを見た。このドアの中にはあのフィレナ様がいる。

ここは腹をくくらなければならぬだろう。

「失礼します！お呼びいただいたルナスタリーナ様の侍女をさせていただいている、ピーナ・リロットです」

覚悟をして、ドアを叩くと「お入りなさい」と鈴のようなフィレナの声がした。

恐る恐るドアを開けると、フィレナはチラリとピーナを見て、自分

が座っている向かいのソファを指差し「ここへ」と言った。

「し、失礼致します」

こわごとソファに座ると、フィレナはピーナに視線を合わせた。なんだか、睨まれている。絶対気のせいなどではない。

「今日、あなたにここへ来てもらったのは、他でもありませんあなた自身のことについてです」

「はい」

何を言われるのか、とフィレナを見ていると、フィレナはキツとピーナを睨みつけて言い放った。

「あなた、侍女を辞めなさい」

「・・・え・・・?」

何を言われたのか一瞬分からず、ピーナは頭が真白になった。

「聞けば、あなたは貴族でもなく城下街の娘なのでしょう? 聖女様の侍女というものは、貴族の娘がやるものと決まっております。あなたのような下々の者が、聖女様の侍女になるなんて言語道断ですね。立場をわきまえなさい!」

言われていることは、以前に神官達にも言われたことだ。しかし、このように憎憎しく見られ、言われたのは初めてだ。息が止まりそうになるほど、胸が痛むのは何故だろう。

「地位も教養もない者に侍女をさせるなど、周りがよく許しましたね。周りが許したとしても、私は許しませんよ! どうせ、ここに来

て間もない不安な聖女様につけこんで、侍女にさせたのでしょうか！
？なんて、小ざかしい！」

「そ、そんなことは・・・」

「聖女様もお可哀想。あなたのような者が侍女なんだから。心の中
ではあなたを煙たく思っていてよ！」

「っ！」

「聖女様にあなたのような者は相応しくないわ。あなたが侍女をし
ているだけで、聖女様の権威がさがってしまう。聖女様はお優しい
から、あなたを辞めさせることができないだけなんだわ。あなたの
ほうから、侍女を辞しなさい」

フィレナの言葉一つ一つが、ピーナの心をえぐってくる。

ピーナの存在自体を否定された気がした。

確かに、私が侍女をやるのは、不釣り合いかもしれない。
でも、決めたのだ。

「・・・それは、できません」

ピーナは震える声を必死に抑えながら、言葉を発した。鼻の奥がつ
ーんとする。

「何故！？あなたも強情な娘ね。あつかましいわ」

「そうかもしれません。ですが、決めたのです。ルナスターナ様
をお守りすると」

「あなたが？冗談もほどにしたら」

容赦なく、フィレナはピーナに突っかかってくる。

「確かに、私は役立たずで何も出来ません。でも、何と言われようと辞めません！」

絶対にルナを守る。何も出来ないけど、一緒にいて痛みを分かち合うことはできる。

そう思うから、ピーナは辞めない。

「!!」

ピーナの言葉に、フィレナはカツとなたのか、持っていた扇を投げてきた。

「いつ」

扇がピーナの頬に当たった。鋭い痛みが頬にはしる。

「なんて、娘かしら！身分をわきまえない、と言っているのが分からないの!？」

フィレナは思わず、ソファから立ち上がって、ピーナに怒りをぶつけた。

何も言わないピーナは、俯いていて表情が見えない。

無言のピーナに業を煮やしたのか、フィレナはダンっ！と机を叩いた。

「だんまり？つくづく礼儀のなっていない娘ね」

それでも、顔を上げないピーナを、フィレナは苛立ったように見ていた。

しかし、反応がないのを見てそのまま、フィレナは「もういいわ、明日また来るけど、その時には辞めてもらいますからね」と言い残

し、憤りを隠さず去って行った。

ボタン！とドアが閉められた。部屋には誰も居なくなる。

ピーナはソファに座ったまま動かなかった。

ピーナの膝の上に置いた手の上に、ポタポタと水滴が落ちた。いつのまにか、ピーナは泣いていた。

自分はここに居ていけなかったのだろうか……。

ルナ様に、本当は迷惑をかけているのか……。

私は分不相応なのだろうか……。

そんな言葉が頭の中をぐるぐると渦巻き、堪らずピーナは部屋を飛び出した。

とりあえず、ここから出たかった。

「ふえ、えっ、うくっ、うっ」

ピーナは神殿のはずれにある庭の隅で泣いていた。ここは、人が滅多に来ない場所で、長年働いている神官達でさえ、ここを知らないだろう。偶然、ピーナが見つけた穴場だったりする。落ち込んだりした時は、いつもここで泣くのだ。

「うえ、うー、ふくっ」

涙が止まらない。あそこまで、憎しみをぶつけられたのは初めてだ

った。

ピーナだって、自分が侍女でいいのか、と自問自答したときはあった。だが、ルナが『居て欲しい』と言ってくれたからこそ、侍女として足りないながらも一生懸命にやってきた。

しかし、自分は本当はいてはいけない邪魔な存在だったのだろうか・
・。

そんな考えがつらつらと止まらず、ピーナは子どものように泣いていた。

そんな時、誰かの足音が聞こえた。

ここは、『ピーナ専用の泣き場所』ですよ、と一瞬バカなことを考えていると「ピーナ殿？」と名前を呼ばれた。

ふえ？と思わず涙が止まらない顔を、名前が呼ばれた方向に向けると、そこにはエドガーが立ち尽くしていた。いつも威風堂々としてた雰囲気の人だが、今は困った少年のようにあたふたとしている。

そんなギャップに、泣いているのも忘れピーナは思わず小さく笑ってしまった。

じゅうななわめ（後書き）

フィレナが怒るシーンが、今までで一番書きにくかったです。
人がキレるのって、書くの難しいですね。

じゅっはちわめ（前書き）

ラブラブを目指して！

じゅうはちわめ

エドガーは、ピーナに近づいてきた。

「いかがした？あなたが、いつもの部屋にいたく、泣いて走るあなたを数人みかけた、と聞いた」

「え、えと少し悲しいことがあったので・・・」

「どんなことか」

「言えませんっ！王女に侍女を辞めると、言われたなんて・・・！」

そんなことをエドガーに言ってしまったら、ピーナは本当に自分が侍女として役立たずだということを認めてしまう気がしたのだ。

「それは、そのう・・・」

ピーナが言うのを躊躇っていると、エドガーは長い足で歩いて、ピーナとの距離をすぐに埋めてしまった。

「何があった。どうして、ピーナ殿は泣いているのか。何が、ピーナ殿を苦しめている？」

そう言って、エドガーは座り込んでいたピーナと同じように、方膝で座り目線を合わせてきた。なんだか、泣いているピーナよりもエドガーのほうがつらそうだった。

「い、言えません！」

自分にだって、プライドがあるのだ！自分がダメ押しされたなんて、この人に言いたくない。

意固地になって、顔を背ける。

何故か、エドガーにだけには、弱みを見せなくなかった。

「頬に傷が・・・」

エドガーは、そっとピーナの頬に触れた。

少し、ピリツと頬が痛かったが、頬に当てられた手は想像以上に暖かい。

「かすり傷です・・・」

ピーナは、頬に当てられた手をはねることもできず、ぶっきらぼうに答えた。

「・・・フィレナ王女のことか？」

エドガーのポツリと言った言葉に、ピーナは肩をビクリと動かし、もはや、『そうです』と言ったようなものだ。正直な自分が嫌になる

「そうなんだな？」

エドガーもピーナの反応をみて、確信したようだった。

「神官達に、ピーナ殿がフィレナ王女に呼ばれていた、ということ聞いた。その後、あなたは居なくなっている。フィレナ王女と何かあったということはすぐに推測できる」

「ちちち違います！何も言われてなんかいません！！」

「何か言われたのだな？」

「・・・あ」

なんて、間抜けなんだ、私！！そう自責の念が押し寄せると、また目頭が熱くなった。意図せずに、ふえ、と鳴き声が漏れた。

やっぱり、私は役立たずだ。

「！すまない！泣かせるつもりは・・・」

「ふええ、うくつ、別に泣いてないです！ふうっ」

「・・・私には泣いているように見える」

「泣いてなんかありません！ふえっ。目の錯覚です、うー」
強がって、目をこするピーナ。

「そうか」

「ふえ？」

あっという間だった。いきなり腕を引つ張られたと思ったら、いつの間にかエドガーの腕の中にいた。

ピーナは何が起こっているのか分からなくなり。目を白黒とさせた。

え？え？

「何を言われたのかは、もう聞くまい。・・・だが、これだけは言ってく。」

ピーナは聖女殿に望まれて侍女となった。もはや、その働きは誰も

真似ができない。唯一の聖女殿の支えだ。誇りに思え。
ピーナ存在は、かけがえのないものだ。聖女殿にとっても・・・
・私にとっても」

エドガーが話すたびに、吐息が耳に当たってこそばゆい。身体にまわされた逞しい腕が、苦しいくらいにピーナを抱きしめる。顔に押し付けられたエドガーの胸板からは彼のドクンドクンという動悸が直に感じられた。

「あああああああのうう！こここここれは・・・」

もはや天地がひっくり返ったくらいにピーナは動揺していた。涙が滂沱として流れていたのが、一瞬で引っ込んだ。男の人に抱きしめられるなんて、父親と弟に親愛の情でされることはあっても、それ以外には全く無かった。

「誰も泣いていないし、誰も見ていない」

そう言つて、エドガーはピーナの背中をたどさずすった。その手は氷のような美貌のエドガーのものとは思えないくらいに、優しい。

そんなことをされているうちに、ピーナは涙腺が緩んでいくのが感じた。泣くまい、と思っていたのにまた涙が溢れてくる。止まっていた嗚咽が再開した。

どうして、この人は私をみつともなくさせるのだろう。

侍女として、ピーナだって誇りがあるのだから、強がりたいのに。

「わ、私は侍女として分不相応でしょうか・・・？」

「そんなことはない」

きつぱりとエドガーは、ピーナを抱きしめながら否定した。

「しかし、貴族の出でもない娘がルナ様のお世話をするのは、他から見ればおかしいことなのでしょう？」

「そう思う奴らは、ほおっておけばいい」

「・・・確か、エドガー様も初めてお会いした時は『侍女のくせに出すぎ』と言ってましたよね？」

「・・・」

エドガーは無言になった。ピーナをさすっていた手も一瞬止まる。

（ちゃんと、覚えてるんだからね！）

ピーナは意外に根に持つ性格だった。

「あの時は、すまなかった。私もすっかりと見極めていなかった。・・・だが、今なら分かる。あなたほど聖女殿の侍女に相應しい者はいない」

エドガーは少し慌てた様子で、弁解した。そんなエドガーをジト目で見つめた後、ピーナはフツと笑った。

「申し訳ありません。少し八つ当たりです」

「いや、あの時は私が悪かったのだ・・・」

「いいえ・・・。私自信が無かったんです。ルナ様は私に良くしてくださいますが、その好意を受けるほどに私は相應しいのか、って・・・」

「何を迷う。ピーナは、聖女殿を守る為に軍人の男たちをも恐れずに、果敢に立ち向かったではないか。」

もう、立派な聖女殿の侍女だ」

ピーナは目を閉じた。エドガーの言葉がぼかぼかと体中に染み込んでいく気がする。いつもは怖い、としか感じられないのに、不思議だ。

「ありがとうございます。・・・私もう一度頑張ってみます。ダメダメな私だけど、精一杯やってみます」

「そうか」

そう、女は度胸！と目を開けると、視界いっぱい、エドガーの麗しい顔があった。

「ひえっ」

エドガーは怖いくらいに整っているが、いつも無表情に近い表情が

緩められている。

切れ長の瞳は、いつもなら鋭さを感じさせるのに、何故か甘い。近くで顔を見ることが、あらためてエドガーの顔が恐ろしいくらいに、整っているのが分かる。

その笑顔は、見る者すべてを魅了するくらいの威力があった。

（うわっ！殺人的スマイル！！）

ピーナは頬が赤らむのを感じ、思わず顔を伏せた。そして、二人の状況を思い出した。

・・・私、ずっと抱きしめられている・・・！？

「ぴぎやああああああ、すみませんっ！！」

ピーナは勢いよくエドガーの腕から逃げ出し、頭をさげた。仮にも軍の総司令官になんてことを・・・！

エドガーはピーナが離れてしまったのが不満だったが、とりあえずピーナが元気になったことで良しと思うことにした。

「いや、謝るな。なかなかいい思いをした」

「へ？」

「あ」

思わずエドガーは、ピーナを抱きしめていた幸福で有頂天になって

いたので、本音がポロリと出てしまった。

エドガーは、ひとつゴホンと咳払いをした。

「まあ、・・・気にするな」

「はあ」

ピーナは、何だか分からないが、頷いた。

じゅうはちわめ（後書き）

エドガーのピーナの呼び方が、「ピーナ殿」から「ピーナ」と呼び捨てになっているのは、確信犯です。

じゅっきゅわめ

頬に傷をこさえたピーナを見て、ルナは顔を大きくしかめた。

「ピーナ、これはどうしたの？」

「え、ええとー、ぷぴー」

口笛を吹いて誤魔化そうとするピーナ。あまりにもベタである。

そんな（少し馬鹿な）ピーナが愛しくいつもは、可愛くてしょうがないのだが、今日は別だ。

ルナは、ピーナに詰め寄った。

「今日、フィレナ王女があなたに面会に来た、と聞いたわ。何を聞かれたの？」

「え、そんな大したことは、特に」

「うそ、目が泳いでいる」

正直すぎる、ピーナ。嘘は絶対につけない。

きつと、詐欺師とかにはなれないなあ、ピーナはしみじみと思った。

「頬にそんな傷なんか作って、何もいなんて言わせない！白状しなさい！」

そう言っつて、ルナはピーナに残すことなく今日あったことは話させた。

エドガーとあったことは、伏せておいた。なんとなく、恥ずかしかったからだ。

「明日来る、って言ってたのね？」

「はい」

「分かった、こっちとしても策があるわ」

「ルナ様・・・？」

ルナは、「今にみてなさい、ピーナを傷つけたこと後悔させてやるわー！」いつもの優しいルナではなく邪悪な笑みでニヤリと笑った。

ピーナはそんなルナを見ないフリをした。

「ルナ様、本当によろしいのですか？」

「いいの！私自身が決めたのだから、ピーナは気にしないの！」

「でも」

明日にまた来る、と言ったフィレナを出迎えるべく、ルナは聖女の務めを休んでピーナと部屋で待っていた。

ピーナとしては、そこまでしてもらう必要は無い、と思うのだが・

・。

「やーね、御挨拶よ、ご・あ・い・さ・つ！フィレナ様とはちゃんと話したことないし、初めはあたしに会いにきたんでしょ？」

「それは、そうですが」

なんだか、ルナをとりまく空気が、おどろおどろしい。

（いつものキラキラしたルナ様はどこへ！？）

ピーナは、少しだけ怖いルナに恐怖した。

そんな時、神官が来て、フィレナの訪問を告げた。

「こちらにお通しして」

ルナがそう告げしばらくしたら、フィレナがやってきた。

「失礼します」

そう言つて、おしとやかにフィレナは、ルナ達がいる部屋へと入ってきた。

部屋に入ったフィレナは、ルナがいるのに驚いた表情を見せたが、すぐに笑顔に変えた。

「はじめまして、聖女のルナスタリアと申します。先日はせっかく来ていただいたのに、お会いできなく申し訳ありませんわ」
話しかけたのは、ルナのほうからだった。

一見笑顔だが、纏う雰囲気はそう和やかなものではない。

「とんでもございません。お目にかかれて、光栄ですわ」
流れるような仕草で、礼をするフィレナ。

ピーナに対して、この前激昂した少女と同一人物だとは思えない。

「ふふ、なんだか、うちのピーナまで話しかけてくださったとか。
わたくし、お礼を言いたくて（うちの可愛いピーナに何したのよ！
許さないんだからね！）」
ルナは、笑みを深めた。

「まあ、お気になさらなくて良かったのに（聖女らしく仕事してい
ればいいのに）」
ルナの皮肉とも言える言葉に、悪びれる様子もなく、フィレナは返
した。

ピリリリ、とルナとフィレナの間に稲妻が走った（とピーナには見
えた）

ゴーンとコングがなり、女の戦いが始まったのだ。

うふふふふ、と美少女が笑い合う様子は、なんとも麗しい場面だろう。

しかし、何故かピーナは薄ら寒かった。

「本日はなんでもピーナに用件があるとかで。わたくしも一緒に混ぜていただけない？」

「そんな聖女様にお聞かせするようなお話ではありませんわ」

フィレナは、一瞬ピーナを見た。表情は笑顔だが、瞳には憤怒の色が見えた。

その気迫に思わず、ピーナはビクンと肩が動いてしまった。

「そんなことは言わないで。今日は女性同士楽しくお話しましょう？」

ルナは、お茶の用意をしていた丸テーブルをフィレナに示した。イスは3つある。

「ふふ、今日はフィレナ様が来る、と聞いてとても楽しみにしていたの。だから是非」

「わかりましたわ」

ピーナとだけの会話を諦めたのか、フィレナはため息をひとつし、席についた。

「うれしいわ」

ルナ自身イスに座った。

「ピーナ、あなたも座って？」

「え！？」

ピーナは戸惑った。侍女であれば、ルナ達のような身分の高い者と同様イスに座るなんて、ありえない。近くで立っているべきだろう。いつもルナと二人だったり、エドガー達が相手であれば、ピーナは一緒にイスに座っていた。彼らがピーナを自分達と同じ目線でいるのを望んだからだ。

だが、今回はそうはいかない。

王女であるフィレナがいるのだ。ついこの間、分不相応と言われたばかりなのに、侍女としての領分を越えては、元も子もない。

「ピーナは侍女である前に、私の親友よ？友達が一人だけ仲間外れになるなんて、ありえないわ」

ルナはフィレナを意識するピーナに元気づけるように笑った。

「でも・・・」

それでも、ピーナが座るかどうか、迷っていると、フィレナがルナに話しかけた。

「聖女様、あなたがとても慈悲深い方だと思います。ですが、わたくし時と場合があると思いますの。彼女はあくまでも『侍女』。それ以上のものには、成り得ませんわ。しかも、貴族でもない娘を侍女にするなんて、恥ずべきことではありません？」

（ううつ。はつきりとおっしゃいますね、フィレナ様・・・）

ピーナはトホホ、と少し落ち込んだ。

「何を恥ずべきかは、人によりますわ。それにわたくしとしては、他人の内面を見ず表面的なものばかり見て、見下げる者こそ、人と

して恥ずかしいと思います」

ルナはすつと目を細め、ピシヤリと言い放った。

「なっ！」

フィレナはまさか自分が恥ずかしい、と言われるとは思わなかったのか、気色ばんだ。

「わたくしは、聖女としての沽券に関わる、と言ったまで！」

「沽券？そんなものは意味ありません。真実こそ本当に値打ちがあると思います。ピーナはとても優しく、素晴らしいわ。ピーナがどんな人間か知らないで、ぐたぐた言い立てる人間のほうがおかしい」

ルナは、とても堂々としていた。その様は、とても10代の少女とは思えないくらい貫禄がある。フィレナはそんなルナに押されていた。悔しそうに、ルナを睨みつける。

「・・・何よ。おかしいでしょ？」

城下町の出自もろくに分からない娘なのよ！汚らわし」

パシンッ！

フィレナが言い終わらない内に、ルナがフィレナの頬をめいっぱい平手打ちした。

「ルナ様！」

「それ以上言ってみなさい。今度はボコボコにあげるわ!」
ルナは目を吊り上げ、怒っていた。目がランランとしている。

「・・・何するの!？」

フィレナは叩かれた頬に手を当てて、叫んだ。

「王女であるわたくしを叩くなんて・・・! 例え、聖女であっても許さない!」

「王女とか、聖女とか関係ないわ。私個人として、気に入らないだけ」

ルナは、フンだ!とそっぽを向いた。

「ちょ、ちよつと、お二人とも、落ち着いて・・・!」

ピーナは泥沼化している、ルナとフィレナの会話をなんとか治めようと、オロオロとした。

フィレナ様はともかく、ルナ様がここまで怒るとは・・・。

「そこまでだ」

「そこまでだよ」

収集がつかなくなりかけた頃、制止の声がかかった。

ピーナ達3人以外にいないはずの人間の声がした方向をみると、エドガーとシオンがいた。

軍人の黒を基調とした服をビシッと着こなし、鋭い眼差しを向けて

くる、エドガー。

明るい金髪に、柔らかな微笑みをたたえる、シオン。

対照的な美貌の持ち主の二人が、ドアの付近で佇んでいた。

じじいさん（おじいさん）

あー、あー、あー

にじゅうわめ

「エドガー様！」

「・・・シオン殿下？」

フィレナは嬉しそうに、ルナは気まずそうに意中の相手の名前を呼んだ。

フィレナは、二人の男性のもとに嬉々と駆け出した。

ピーナがルナを見ると、ルナは口を一文字に結んでいる。

ルナがこうなってしまったのは、しょうがないだろう。何しろ、どんな酷いことを言ったにせよ、好きな人の妹に手を上げ、あまつさえその現場を見られていたかもしれないからだ。

「ルナ様、私のせいで・・・」

どうしよう、こんなことでルナ様がシオン殿下に嫌われでもしたらルナ様は、シオン殿下に恋しているのだから、大きなショックになる。

私がきつかけになったからだ。やっぱり、私は役立たずだ。大事な人を傷つけてしまうなんて。

ピーナが心配そうに自分のことを見つめていると気付いたルナは、微笑んだ。少し硬いが、それでも優しい笑顔だ。

「ピーナ、大丈夫？私、ピーナのこと大好きなの。他の人がどう言おうと、大事な親友よ？だから、どんな酷いことを言われても、気にしちゃダメ」

（ああ・・・、ルナ様はこんな時にも、私を気にかけてくれるのね）
ルナは、先ほどフィレナが言ったピーナへの言葉の方を気にかけている。

自分がどんな状況にあっても、ピーナのことを最優先にして心配してくれるルナ。ピーナは目頭が熱くなった。ピーナは話すことが出来ず、コクコクコクと何度も頷いた。

そんな二人とは違って、フィレナはルナ達が自分にしたことをエドガー達に言い立てていた。

「酷いですよ、聖女様も侍女も！見てください、先ほどから罵声を浴びせられて、頬まで叩かれましたの・・・。お二人が来なかったら、どうなっていたことか」

まるで、ルナ達だけが悪いような言い方だ。そんな言い分をするフィレナをルナはジツと見て、何も言い訳をしなかった。

「でも、わたくし、とても嬉しいです。お兄様だけでなく、その、エドガー様まで助けに来てくださるなんて・・・」

上目遣いで、エドガーをみるフィレナ。美少女のフィレナがこんなことをすれば、大抵の男は落ちるだろう。もしかしたら、それも計算しているのかもしれない。

だが、二人の男の反応は、フィレナやルナ、ピーナの想像するものとは、まったく違った。

「フィレナ、今回は君が悪い」

「え？」

いつも笑顔の表情が多いシオンが、真面目な顔をしている。

「悪いけど、君たちの会話は初めから聞いていた。ピーナ殿のことそんな風にいうのは、いけないよ。君は身分に囚われすぎている。僕たち王族は、国民がいるからこそ、今こうしていられる。いわば国民に支えられている存在だ。決して、僕らが優れているわけではない。そんなことを忘れて、人を馬鹿にするのは王族として恥ずべきことだ。ピーナ殿にちゃんと謝りなさい」

「な、何ですか！？頼まで叩かれたのに、何故わたくしが謝らなくてはいけないのですか！しかも、王族のわたくしが、ただの娘に・・・！」

「フィレナ！」

尚も自分は悪くない、と言い張ろうとするフィレナに、シオンは声を荒げた。いつもより、声のトーンが低い。フィレナはびくんと体を竦ませた。いつも温厚な人が怒ると、怖いと聞くと、正にその通りだ。

茶目っ気な性格のシオンが、厳しい態度で怒る姿は、怒られていないはずのピーナでさえビビッてしまう。

（こわーーーー。ってか、初めから居たのなら、さっさと助けてよ）

ピーナはぶつぶつ心で呟いた。

兄に助けを求めるのは諦めたのか、フィレナは瞳に涙を溜めて、今度はエドガーを見た。

「エドガー様、わたくし、わたくし・・・。みんな酷いですわ・・・」

。味方はエドガー様だけです」

フィレナは頬に手を当て、弱弱しく呟いた。しかし、何だか、その行為も計算尽くめな気がするの、何故だろう。

兄にこっぴどく叱られてもなお、好きな相手に向かっていく根性はすごい。

ピーナは軽く、感心した。

「頬が痛いかな？」

エドガーは、フィレナに聞いた。

「はい・・・」

フィレナは弱弱しく答えた。ルナに叩かれても、逆に激昂してきたあの気迫はどうした。

「だが、あなたも同じことをした筈だ。ピーナの頬の傷は、あなたが付けたのだろう？」

エドガーは、淡々とフィレナを追求した。

「そ、そんな」

フィレナは焦ったように、頭を振った。

「わたくしがそのようなことをするわけが、ありません！」

フィレナは必死に弁明した。

ピーナは、堂々と嘘をつくフィレナに少し呆れた。ピーナ自身が『フィレナ様にやられました』と言ったら、すぐに嘘はバレるものを。まあ、そんなことは言わないが。

「まあ、どうでもいい。ピーナが頬に傷を作り、泣いていたのは事実なのだから」

エドガーは興味を失ったように、フィレナから目を離した。代わりに、ルナとピーナがいる方向を見てきた。瞳には熱い意志が感じられた。

「すぐに駆けつけなくて、すまない。事実がどのようなものか我々自身確認したくて、様子を伺っていた。その、大丈夫か・・・？」
冷徹で有名なはずのエドガーが、心配そうにこちらを伺ってきた。

何か言ったほうがいいのか、とピーナが口を開きかけたとき、フィレナは俯いたまま話した。

「何故、そこまでの者を気にかけるのですか・・・！？どうして？あなたは誰にも揺り動かされることなく、孤高の存在であったのに！！」

最後は叫びに近かった。

フィレナは、キッと顔を上げ、ルナ達を睨みつけた。

「フィレナ・・・もう、やめなさい」

そう言っ、シオンがフィレナの腕を掴んで、連れて行こうとした。しかし、フィレナはシオンの手を振り払って、尚も叫んだ。

「どうしてですか！エドガー様！」

エドガーは視線をフィレナに戻した。
「決まっている。」

彼女を愛しているからだ」

エドガーは、何でもないない、というようにあでやかに笑って見せた。

フィレナを含め、部屋にいた者達は絶句した。あの、エドガーが笑っている、ということはもちろんのこと、冷徹漢であり、ロマンチストとは程遠いエドガーが「愛している」なんて言うとは思いませんでしたから。

ここまできたなら、誰だってこの状況がどのようなものか分かるだろう。

ピーナは目の前で起きている、恋愛小説のようなワンシーンに感動した。

ピーナは分かったのだ。どうして、こうもフィレナがエドガーに対して言い募るのか。何故、エドガーが毎日ここへ来たのか。

（エドガー様は、ルナ様を愛していたのですねーーーー！！！！！！）

噂もバカにはできない。

そして、フィレナはエドガーのことが好きなのだ。だから、恋敵であるルナの侍女であるピーナをまず潰そうとしたのだろう。

（ど、どうしよう！遂に花開く、女のカン！！うわ、冴えてる私！）

ピーナは自分の大発見に、この状況も忘れ歓喜した。

でも、とピーナは思う。

（ルナ様はシオン殿下のことが好きなのよねー。おそらく、シオン殿下も。ってことは、エドガー様は片思いで、そんなエドガー様を好きなフィレナ様も片思い。

・・・これって、4角関係！？）

すごすぎる、三角関係どころではない。

そんなことを考えていると、フィレナが戦慄いてエドガーに詰め寄った。

「どこが良いのですか、あの娘！わたくしのほうがずっと・・・！」
自分のほうがエドガーの好きな相手より、優れているというフィレ
ナの言葉に、ピーナはムツとした。

（フィレナ様、たとえあなたでも、ルナ様の悪口は許しません！）

「すべてだ。どんなところも。弱いところさえ愛おしい」

そう言つて。エドガーは再び、こちらを見てきた。その視線はとて
も甘い。ルナを見ているはずなのに、隣にいるピーナもどきまぎし
てしまった。

エドガーの熱い告白に、思わずピーナは手を胸の前で組んだ。
ほう、とため息が出る。

恋をしたことなんて無いし、身近にもなかったピーナだが、エドガ
ーのルナへの思いに胸打たれたからだ。たとえ、その恋が叶わない
ものだとしても、応援したくなる。

（素敵！こんなロマンチックな告白場面、そうそう拝めるものじゃ
ないわ）

ピーナが、感動していると、エドガーがこちらに近づいてきた。お
そらく、正式にルナに面と向かつて交際を申し込む気だ。

きっと、『君が好きだ。愛している、付き合つて欲しい』とでも言
つて。

エドガーはもう目の前まで来ている。

「君が好きだ。愛している、結婚してくれ」

ピーナが想定していた言葉とほぼ同じようなことを、エドガーは言った。ピーナの考えていたものと、違うのは『付き合って欲しい』ではなく、もはや『結婚して欲しい』という一段階飛ばしたプロポーズであり、その相手がルナではなくピーナであることだ。

エドガーは、そう言ってピーナの手を掴み、手の甲にそつとキスした。視線はずっとピーナから外さない。

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

ピーナは、気を失いそうになった。

にじゅういちわめ（前書き）

少し執筆に時間がかかりました。

内容はいつもより、少し長いので、よろしく願います。

にじゅういちわめ

手に口付けを落としたエドガーを、ピーナは呆然と見ていた。

（何故？エドガー様はルナ様が・・・）

「え？え？ええ！？」

ピーナは慌てた。手はエドガーに？まれたままだ。

「返事を聞かせて欲しい」

熱っぽくピーナを見るエドガーは、少し頬が赤らんでいて色っぽい。目じりには朱がさしている。

ピーナはクラツと眩暈がした。

「ああああのう、エドガー様がルナ様のことが好きなのは・・・」
「？」

「何を言う。初めから私はピーナ一筋だ」

「だって、ルナ様に会いに毎日来られてたし」

「それは単なる言い分にすぎない。本来の目的は君と話す為だ」

ど、どうしよう！

ピーナは冷や汗が大量に流れた。

エドガー様は、その人離れした美貌のゆえに、大変モテる。闘いに行く先々で、多くの女性が彼に夢中になる。敵の国の女性でもだ。

国では、彼のファンクラブがあるくらいだ。

そんな彼と付き合うだけならまだしも、結婚！？絶対、殺される！瞬殺だ。

つてか、フィレナ様が先ほどから馬鹿にしていたのは、私だったのね……。

とにかく、丁重に断ろう、とピーナは口を開けた。

「無理ですわ。エドガー様ほどの地位にいる方とその子が釣り合うわけありません。周りが反対します」

フィレナは、ピーナが話す前に、異論を唱えた。

「お兄様やエドガー様がどんなにその子を認めても、納得する者は少ないでしょう」

「フィレナ……」

打ちひしがれていた、と思いきやフィレナは、嘲笑さえ浮かべている。そんなフィレナをシオンは複雑そうに見ている。

「お言葉ですが、そんなものは無視させていただくまで。それでも私たちの結婚に反対するのであれば、叩きのめすだけだ」
エドガーはフィレナを冷たく一瞥する。

（ちよ、ちよっと、待ってください。）

『私たち』！？

いつのまにか、私とエドガー様との結婚が決まっているような言い方じゃないですか！)

ピーナは否定しようと、今度こそ話そうとした。

しかし、またもやピーナは第三者によって話す機会を失った。

「ホッホッホ。それは心配せんでいいわい。何しろ、ワシがピーナの後見人になるのぞな」

突然、第三者の声がした。部屋に入ってきたのは、高齢の男だ。

白い髭、白い髪から、それなりの年齢だとは推測できるが、機敏な動きで部屋に入る姿は只者ではないだろう。イキイキとした表情は、年齢を感じさせない。

彼の後ろにはヒュージが付き添っていた。

「……サルマン元帥！？」「」

ピーナ以外は、驚いたように彼の名を呼んだ。

(・・・サルマン元帥？ええ！？)

ピーナもいきなり部屋に入ってきた高齢の男が、誰か分かれると驚愕した。

サルマン元帥。彼は現在の軍部の長の存在であり、エドガーの上に立つ唯一の存在だ。

そういえば、以前ルナが王族と軍部に挨拶に行った時、ピーナも一度だけ彼を見たことがある。

年を感じさせない立ち振る舞いは、さすが元帥と言われるだけあるだろう。

「・・・サルマン元帥、『後見人になった』とは、どういうことですか？」

流石のエドガーも、サルマンには頭が上がらないらしい。丁寧な口調ながら、少し戸惑ったように聞いた。

「何、そのまんまの意味じゃよ。ついこの間ワシ、サルマンはピーナの後見人となった。彼女もそれを了承しておる」

「！」

エドガーだけでなく、ルナ達もその言葉に驚いた。しかし、一番驚いたのは、ピーナだ。

（何ですと？私サルマン様に会ったのなんて、今日が2回目だし。それに後見人になってもらった覚えなんてまったくないし）

「そうなの、ピーナ？いつのまに・・・」

ルナはピーナを凝視した。元帥が後見人になるなんて、滅多にないことだ。軍部のトップであるサルマン元帥。彼は、様々な功績を残して、今の地位に上り詰めた。軍人の尊敬を一気に集める人だ。あた、王族や神殿にも広く影響力のある人だ。そんな人が後見人になってくれるとは。こんな凄いことがあれば、ピーナはルナに教えるだろう。もとより、隠し事が出来ないピーナは、隠し通すことも無理だ。

「初耳です！私、サルマン元帥と話したことなんて、無いし・・・」

「寂しいことを言うのではない、ピーナ。ワシらは以前に会っただろう？」

悪戯が成功した少年のような瞳をして、サルマンはピーナにウィンクした。

何だか、この瞳は見覚えがある。

ピーナは少し考えた後、叫んだ。

「あー！あの時のぎっくり腰のお爺さん！」

「正解じゃよ、ピーナ」

サルマンは、鷹揚に微笑んだ。

「でも、あの時は・・・」

ボロボロの服を着て、ボサボサの髪の毛と髭。目の前の堂々とした人間と同一人物とは思えない。

「思い出しました。でもなんであんな格好を？」

「何、可愛いエドガーに好きな女の子ができた、と聞いてどのような子が見定めようとな」

「『可愛い・・・？』」

一瞬背中に寒気が皆に走った。冷徹かつ冷静沈着、いつも無表情な大の男が、可愛い！？

エドガーはムスツとして、眉間に深いしわが寄っている。

シオンは、笑うのを堪えていた。・・・が、肩が小刻みに動き、バレバレだ。

「お主は、見知らぬ私に、快く助けの手を差し伸べた。普通、薄汚い爺に、あそこまでする人間はそうそういない。心根の優しい娘だ、ピーナは。流石、エドガーが惚れただけある」

「は、はあ・・・？」

ピーナは褒められ嬉しいというより、エドガーの名前が出てきて複雑だった。

逆にエドガーは、先ほどの冷気を放つような雰囲気から一転、目を輝かせた。

まるで、分かっているらしいやう！とでも言うように。

「しかし、後見人になったとは？ピーナ殿は覚えていないようですが？」

シオンはどことなく、わくわくしたようにサルマンに尋ねた。

完全に楽しんでますね、シオン殿下。

しかし、気にはいられない。後見人なんて、知らないところでされていたら、困る。ピーナはシオンに続いて、尋ねた。

「そ、そうです！私後見人になってもらった記憶は・・・！」

「石をあげたじゃろう？」

「へ？」

「蒼いペンダントにした石じゃ。あれは、元帥になる者に代々受け継がれるもの、いわば証しのような石じゃ。あれを受け取ったものは、軍部の加護をつけるも同然」

「な、な、な！？」

そんな凄いもの、軽々と渡さないでください！正直いりません！凄すぎて、いりません！身の丈に合っていないものです！返しますー！

そんなピーナの気持ちがあったのかサルマンは

「あ、返還は無理じゃ。受け取ったら、最後、もう後戻りはできん」と笑顔で言ってきた。

なんだってー！！？

ピーナは、あまりの衝撃に、固まってしまった。

「・・・それでは、ピーナには、あなた様が後見人となってくれるのですね？」

ルナは、うれしそうに、サルマンに確認した。

「そうであれば、周りも文句はいえませんか。元帥が後見人になるんですもの！身分が合わない、なんて言えない」

ルナは、未だに固まっているピーナを見た。このことが彼女にとって、吉と出るか凶とでるかは分からない。だが、ピーナの地位に対する陰口は一気に減るだろう。

「二人の愛を邪魔する障害物は、なくなるわけだ」
サルマンは、自慢げに言い放った。

「・・・そんな」
ポツリと、先ほどから黙っていたフィレナが呟いた。唇はわなわなと振るえ、顔は青白い。彼女はドレスをひるがえして、部屋から走り去っていった。

「フィレナ！」
シオンが、名前を呼ぶものの、フィレナは止まらなかった。

シオンは困ったように、苦笑いした。

「ごめんね。フィレナは、根はいい子なんだけど、女の子だから両親に甘く育てられて、わがままなんだ。しかも、彼女の乳母が貴族至上主義者で、その教えがフィレナの中に強くあるんだと思う。・・・でも、だからと言って、フィレナがピーナ殿に言った言葉は許されない。代わりに僕が謝るよ。申し訳なかった」
シオンは、ピーナに頭をさげた。

「そんな！どうか頭を上げてください！」
一国の王子が、ただの小娘に頭を下げるなんて、前代未聞だ。ピーナは慌てて、否定した。

「この後、しっかりとファイレナは叱って、今後は暴走させないようにさせるから、今回はどうか赦してほしい」

真摯なシオンの言葉が、ピーナの心を打った。

（きつとこんなところが、ルナ様は好きなのよね・・・）

ピーナはゆっくりと頭を振った。

「私、全然気にしてません。初めは悲しかったけど周りの方が親切にしてくださいましたし……。かえって、いつも与えてもらっている皆さんの親切が、どんなに暖かいかを気づくことができました。そういった意味では、私感謝しています」

ファイレナに辛くあたられて事で、何気なくもらっていたルナたちの優しさのすばらしさを分かることができた。自分が皆の配慮に甘えていたことを再確認し、あらためて感謝する大切さを学べたのだ。ちゃんと、良いこともあるのだ。ピーナはいつのまにか、微笑んでいた。そんなピーナをシオンは、ジッと見つめる。

「ありがとう。そう言ってもらえると助けるよ」

シオンはピーナの顔を少しの間見ると、ほっとしたように笑った。もう、いつもの笑顔だった。

「さて、僕はファイレナを捜しにいこうかな」

シオンが部屋を出ようとすると、ヒュージがそれを留めた。

「殿下。御足労かけられませんよ。私が代わりに行きます」

「そう？んじやお願いできるかな。妹は意地っぱりだから大変だけど、よろしくね」

「分かりました」

ヒュージは、一礼して去って行った。

「・・・さてと。んで、二人はどうするの？」

シオンは、目をキラキラさせて聞いてきた。

（やめてー！話しが逸れていたのに、蒸し返さないで！

ってか、本当に面白がってますね）

ピーナは心で絶叫した。

さっきの真摯なシオンはどこに行った。

「何、これですべてが万々歳じゃ！ホッホ。はやく、二人の子どもがみたいのう」

サルマンはウキウキとした表情だ。

「へ！？」

サルマン元帥なんてこと言うのですか！まだ、お付き合うことすら、了承してませんよ私！

「身分とか地位に拘らない、二人の姿。感動したよ。僕もいつか絶対、高嶺の花を射止めてみせる」

シオンは意味深な熱い視線を、ルナに送った。

途端ルナの頬がポツと、赤くなる。

「な！」

ちょっとおー、何言っているんですか！不埒な視線を送らないでください、シオン殿下！ルナ様がよくれる！

「ピーナ、私応援するわね！」
ルナは嬉しそうに、言った。

「うえ！？」
ルナ様！違います、誤解です！ってか、何この雰囲気。もはや、私とエドガー様が結婚するの、決まった雰囲気じゃないですか！

「一生大切にする、ピーナ・・・！」
エドガーは、両手でピーナの手を包んだ。うつとりとピーナを見るので、ピーナは何だか居たたまれない。

「ひっ！」
だから、私返事してない！

ピーナは、予測不可能な事態に、思考が追いつけなくなり、ついには気絶した。

にじゅういちわめ（後書き）

ここで、ひと段落です。
つかれた！。

にじゅうにわめ（前書き）

よろしくお願いします。
ルナやサルマン視点です。

にじゅうにわめ

ピーナはエドガーの熱烈なプロポーズまがいを受け、少しの間身体が固まっていた。

そして、ピーナはふらついたかと思うと、倒れてしまった。

「「ピーナ!?!」」

ルナたちが驚いて声をあげるも、すぐにエドガーがピーナを受けとめた。

エドガーはピーナの顔を見て、首に手を当てる。しばらくすると、ほっとしたように息をはいた。

「どうやら、気絶したようだ」

「・・・気絶?」

ルナははっとした。

先ほどは、ピーナの「身分」がサルマン元帥によって保証された喜びで、舞い上がってしまった。ピーナは気にしないように振舞っていたが、フィレナのように時々ピーナの出自を馬鹿にするものがある。そんなこと阿呆らしいとルナは、思うのだが、大切な友人であるピーナが見下されるのは、我慢できなかった。

サルマン元帥が後見人となってくれば、そんな陰口をたたく者はいなくなる。そんな嬉しさと、その場の雰囲気の流れに流され、思わずエドガーとピーナの仲を祝福してしまったが・・・。

(ピーナはエドガー様に好意をもっているのか、答えていないのよ

ね……。しまったわ。ピーナにその気がないのに、せつつくようなことしてしまったかもしれない……。)

ルナは、猛反省した。だが、そうしてはいられない。とりあえず、この場を収めないといけないのだ。

「そうですか。最近心労が多く、疲れていたのかもしれませんが。ひとまずピーナを寝室まで運んでいただけません、エドガー様？」

「それは、ピーナのか」

エドガーは挙動不信な動きをした。

「……そうですが」

エドガーが、慌てた様に聞き返したので、ルナは、いぶかしんだ。

「なんじゃ、エドガー。好いておる女子の部屋に入れるからって、取り乱すんじゃないわ！」

サルマンは、面白そうにエドガーをからかった。

図星だったのか、エドガーは目をそらす。

ルナは冷たい視線をエドガーに送った。だが、あとは任せられる人もないので、エドガーの行動について何も言わなかった。

「ピーナの寝室は、ここからつきあたりの部屋です。……くれぐれもよろしくお願いしますね？」

ルナは、とびつきの笑顔をつくった。言外には、『ピーナに不埒な真似はするな』と釘をさしている。

エドガーもその意味を汲み取ったのか「ああ」と気まずそうに返事をした。

ピーナを運ぶエドガーを、ピーナの寝室へと案内する。寝室に入ると、エドガーはピーナをベッドにそつと降ろした。エドガーは、ベットに横たわったピーナの寝顔から視線を外さず、熱く見続けている。

ピーナといえば、「うう〜」とうなされている。寝ているピーナだが、何かを感じ取っているのかもしれない・・・。

「エドガー様、あとは私がしますので、もう戻って結構ですわ」
ルナは、このままじゃいつまでたっても、エドガーはピーナを見続
けていると判断した。現に、ピーナをベッドに降ろしたかんだ体
制のまま、エドガーは１ミリと動いていない。ピーナに見とれたま
まだ。

ルナに戻れ、と言われ諦めたようにゆっくりと立ち上がる。だが、
未練がましくなおもピーナを見ながら、部屋を出て行った。そんな
エドガーにルナは、苦笑した。

（こりゃ、ピーナは大変かも）

ルナは、唸っているピーナの頬をなで、毛布をそおつとかけた。寝
室から出るときは、すこしピーナの表情がやわらんでいた。

ルナがピーナ寝室から出ると、シオンたちがまだ部屋にいた。ちゃ
っかり、フィレナを迎えるべく準備したテーブルを囲んだイスに３
人とも座っている。サルマンは用意されたお菓子にまで手をつけて
いる。それぞれの権力者たちが小さいかわらしいデザインのテーブ
ルを囲んでいる姿は、何とも異様であり、近寄りがたい。近づくの

を躊躇っているルナに気付くと、シオンはニコつと微笑んで、手招きした。それだけで、ルナの心は躍った。もはや、ルナの視線はシオンに釘付けだ。あとの二人は、かし1、かし2、である。一応、軍のトップの二人だが、恋する乙女には何の意味もない。

シオンに引き寄せられるように近づくと、シオンは近くにあったイスをとってきてルナを座らせた。

「ありがとうございます、シオン殿下」
熱くなる頬を自覚しながら、シオンを見る。シオンは蕩ける様な笑顔でルナを見つめる。

「どういたしまして」
シオンとルナは見つめ合った。もはや、二人だけの世界。ピーナがいたら、齒軋りしていたに違いない。
しかし、ルナは先ほどのことを思い出した。

「あの、先ほどはカツとなってフィレナ様を叩いてしまい、申し訳ありません」
ルナはシュンとなった。大好きなピーナを侮辱されたのだから、フィレナを叩いたことは後悔していない。だが、やりすぎたかもしれない……。

「いいや、フィレナにはいい薬になったと思うよ？」
シオンがルナを気遣うように、眉を下げた。

「でも……」
シオンは、なおも詫びようとするルナの手のひらに、自分の手をそっとのせた。

「頬を一回叩かれるだけで済ませてもらって、かえってこちらが申し訳ないよ？・・・それに、友人の為に、あそこまで一生懸命になって怒る君は素晴らしいと思ったんだ」

「し、シオン殿下・・・」

ルナは重ねられた手から、じんわりと熱が広がっていくのを感じた。

「おーい、お二人。ワシらもいるのじゃが？」

飄々とサルマンの声が、二人に水を差す。ルナははつとし、今の状況を察すると、恥ずかしさのあまりタコのように赤くなった。重ねた手を引き抜いてしまう。

（私ったら、サルマン様たちがいるのも忘れて・・・見られちゃったわ）

シオンとのやりとりを他人に見られていると考えたと、いたたまれなくなった。ルナは悶えていたので、シオンのチツ、という舌打ちに気がつかなかった。

すぐに、表情をいつもの笑顔にしたが、サルマンたちはシオンが一瞬鬼のような顔をしたのを見逃さなかった。

「・・・若いの。今舌打ちしたじゃろ」

「何を言っているのですか？そんなことはありませんよ。別にルナスタリーナ殿との甘い時を無粋に邪魔されたなんて、思ってもないですよー」

「・・・・・・・・・・」

笑顔だが、シオンがものすごい黒いオーラを出しているのは気のせいではないだろう。

（（絶対、怒っている））

サルマンとエドガーは、シオンの黒い部分を垣間見た。

ルナが意識を取り戻すと、シオンはニコニコとサルマンを見つめ、サルマンは楽しげに笑っていた。エドガーは、というと我関せず、とお茶を勝手に淹れ飲んでいる。

（？）

ルナは何だか違和感を感じたが、気にしないことにした。

「あの、ピーナのことですが」

「おお、そうじゃった！」

ルナがピーナの名前を出すと、サルマンは嬉しそうに叫んだ。サルマンがいたくピーナを気に入っているのが、伺える。

「あらためて、感謝を。ピーナは私の大切な親友。サルマン元帥が後見人になってくれて、心強いです。ピーナは気にしない、と言っておりませんが、心無い人々がピーナの身分についてとやかく言うのには傷ついていると思うのです」

いくら、ルナやエドガーが身分を気にしない、と言っても、批難を受けるのはいつだって弱い立場のピーナだ。ルナたちに文句を言えない分、はけ口をピーナに的を絞るのだ。ピーナをひどい目にあわせたくわない。

「僕からも、お礼を申し上げます」

シオンは真面目な顔をした。サルマンはまさかシオンから礼を言われるとは思わなかったのか、変な顔をしてシオンを見た。

「僕はかねがね、今までの貴族至上主義の風潮を変えたいと思っています。位に関係なく、能力があり志が高いものが、重要な位置を占めるべきだ、とも。地位に居座り慢心した貴族が政治に関わったとしても、国が腐敗するだけです。ピーナはそんな雰囲気壊してくれる最初のきっかけになれる存在だと思うのです。彼女は、貴族の出ではないけど、聖女の侍女という役に就いた。このことは、きっと他の者にもおおきな励ましとなる。身分が無くとも、志できつと大成できる、って」

シオンは、真剣だった。その姿は、一国の王子に相応しい。シオンをルナは食い入るように、サルマンは興味深そうに見ている。エドガーは尚もお茶を飲んでいたが、シオンの言葉に耳を傾けていた。

「ホッホッホ。いい目をしとる。お前さんの気持ちはよう分かったわ」

サルマンは目を嬉しそうに細めた。けして、今の王が暗愚などではない。むしろ、よくやっている方だと思う。しかし、国の体制に巣食う腐心した貴族や権力者に歯止めを効かすのは、手こずっている状態だ。王でさえも手を焼く存在は、王一人では対抗できない。だから、少々の悪事は見逃しているが今の現状だ。以前、聖女が攫われ、一度は狸どもを一掃できたが、すぐにまた同じ様な者が出てくるに違いない。

だが、と思うのだ。もし、王族・神殿・軍部の力を合わせれば、国の体制を変えることは不可能ではない。目をつぶるしかなかった、

力に慢心する者らを取り除く勢いが、目の前にいる若いリーダーたちには感じられる。彼らなら、長い間の悪しき習慣を取り除けるかもしれない。

「今日にでも、正式にワシがピーナの後見人となったことを発表しよう」

今はサルマンが後見人にならないと、ピーナは排除されてしまうかもしれない。だが、身分のないピーナが聖女の侍女として、正式になれる意味は大きいだろう。

シオンとルナは見つめ合った後、サルマンに向かって頭を下げた。

それまで黙っていたエドガーが、口を開いた。

「シオン殿下の熱意痛み入った。私もピーナを婚約者として周りに認めさせる努力を惜しまない。貴族でないピーナと私が結ばれることで、周りの貴族至上の認識も変えられるだろう」

キリツとエドガーは言い放った。整った顔には、やる気がみなぎっている。切れ長の瞳は、いつも冷たい印象だが、今は熱い意志が感じられた。

容姿だけに注目するなら、とてもかっこいい。だが、言っている内容は……あまりそうでもない。

「……」

（それは、単にお前の希望だろう……！！！！）

他の3人の心が一つになった瞬間だった。

にじゅうにわめ（後書き）

シメは、やっぱり彼しかない！ということだ（笑）

そして、シオンは腹黒です。ルナが大好きです。

にじゅうさんわめ(前書き)

誤字・脱字ありましたら、教えてください。
今回もよろしくお願いします。

にじゅうさんわめ

ルナのことを好きだと思っていたエドガーに求婚され、気絶した日から、一週間がたった。

ピーナは困っていた。とつてーも、困っていた。何にかというと、今置かれている状態だ。

なんと、ピーナにサルマン元帥という軍のトップに後見人にいつのまにかなられており、しかもエドガーがピーナに求婚した、という情報が国全体に流れまくっているからだ。ありえない。本当ありえない。

このせいでピーナのことが、世間に明るみに出ってしまった。庶民のピーナが軍の次期トップのエドガーに求婚されるなど、信じがたいことだ。しかし、実際にサルマンがピーナの後見人になった以上、二人の結婚は秒読みだと、噂されている。

待つて。私の意見はどうした。

ピーナはこのことを考えると、激しい頭痛に見舞われる。国中の女性を敵にしたかもしれない。そう思うと、頭を壁に打ち叩きたくなる。もし、ノイローゼに10段階をつけるとしたら、間違いなく今のピーナの状態は10だろう。

気を失い、起きたらもう次の日だった。

「あのことは、きつと夢ね」と現実逃避しようとしたピーナだったが、大量に送られてくるエドガーのファンからの脅迫状を見て、叶わぬことなのだと悟った。

幸運なことに一週間まったく、エドガーの音沙汰が無い。いや、高級なお菓子や花がエドガー名義で贈られてくるが、これは無視だ。まあ、お菓子は食べているが。

しかし、何故か、エドガーとピーナの情報が周りに流れるのが、早すぎる気がする。噂って、もっとゆっくり浸透していくもののはずだが……。エドガーが来ない代わりに、何だか暗躍されている感じがしてならない。考え出すと、大きな策略が感じられ、寒気がする。

「人の噂も75日っていうし、きっといつかは無くなるわよね!？」
自分に言い聞かせるように、ピーナは呟く。そうしていないと、精神が不安定になってしまうのだ。

（何か手を打たないと……。でも、どうやって？はつきり、もう一度エドガー様に結婚をお断りして……）

ルナは務めで居ない今、ピーナは部屋でうろつくと動き回っていた。

「エドガーだ。失礼する」

前もって来るという知らせもなく、部屋に入ってきたのは、一番会いたくない人物だった。サラサラの銀色の髪をなびかせ、部屋に入ってくる。

「え、エドガー様……」

まだ、心の準備が出来ていないピーナは、冷や汗を流す。エドガーを直視できない。

「一週間ぶりだな、ピーナ。元気か？」

「へ？ははい！」

「ずっと、会いたかった・・・」

声色に熱を感じ、思わず顔を上げると、精悍な顔をうつとりとさせ、目の縁が赤くなっているエドガーがいた。強烈な色香を放っている。

「ひえっ！」

駄目だ。私には刺激が多すぎる。この人をお付き合いするなんて、不可能に近い。すぐにでも、求婚を断ろう！

命の危険を感じたピーナは、勇気の欠片を集めて、あらためて求婚の返事をすることにした。

「あ、あのー、エドガー様？」

「なんだ？」

問う声音は、甘い。そして、ピーナを見つめる瞳も。

（頑張るのよ、私！ちゃんと断れば、全て解決なんだから！）

ピーナはキッとエドガーを見る。

「あの、結婚についてなのですが、私お断りします！」

言えた！言えたよ、私！！そうよ、たった一言ですむ問題だったのよ！

ピーナは、断りの一言を言えた事で、すっかり安心し、もはやエドガーとの求婚の問題もこれで解決された、とつかの間喜んだ。

「・・・何故だ？」

「え、何故って、私とエドガー様とじゃ身の丈にあってないし、私ずっとルナ様をお守りすると決めているので、結婚はしないつもりです」

ピーナは、ほっとしたままだったので、エドガーの声が低くなったことに気がつかない。

ガシッ

「ふわっ!!」

いきなり、ピーナはエドガーに両肩をつかまれた。

エドガーはさっきとは違って変わり、目が真剣だ。というか、瞳孔が開いている!?

「身の丈というものは、最初から気にしてはいない。サルマン元帥がピーナの後見人になったのだから、もはや問題ないのでは？」

「そ、そうですね・・・」

「聖女殿をお守りする、ということだが。ピーナと私が結婚すれば、

もし聖女殿に万が一の事があっても私が守ることができる。しいては、聖女殿のためになるとは思わないか？」

「そ、そうかもしれませんが・・・」

あまりのエドガーの気迫にピーナは押される。言われるままに頷きそうになるのを、必死に堪える。

「では」

エドガーは、肩に置いた手をピーナの頬にもっていき、ひと撫でした。そのなで方は、どこか艶かしい。吐息が、ピーナの額に当たる。

「問題はない」

エドガーは、口元を弧に描いて、妖しく笑った。

「ありまくりですー！ー！？」

ピーナは、思わず涙声になった。

「私結婚する気ないのです！そ、それにお気持ちは嬉しいのですが、エドガー様がお相手の方として考えることは、・・・その出来ません」

最後は小さい声になった。

「きっと、エドガー様にはもっといい方がいらっしやいます」

「無理だ」

エドガーがきつぱりと否定した。

「え？」

「ピーナしか考えられない」

「・・・ひ」

「というか、もはやピーナとの結婚しか認めん」

「ふへっ」

エドガーはピーナの手を握った。もはや、拒否を許さないというように。

なんだ、これは。何だか、堂々と居直られたんだけど。これじゃ、居直り求婚だ。

「あのう、拒否権は・・・」

恐る恐る、ピーナはエドガーに聞いた。

「無い！」

取り付く島も無かった。

にじゅっさんわめ（後書き）

二人の誤解は解けましたが、今度はエドガーがぐいぐいと迫ります。次は番外編です。前編・後編になる予定です。よろしくお願いします。

王女と大佐 前編（前書き）

初めての番外編です。

登場人物は、フィレナ王女と、エドガーの部下ヒュージとなります。

王女と大佐 前編

女は皆かわいいと思う。

特に、誰かに恋をしている表情が一番好きだ。

今まで、一つのことに真剣になったことは、自分にはない。だからなのだろうか。

一途に相手を想う姿は、何にも執着してこなかった自分とは違い羨望を感じるほどだ。

伯爵の次男として生まれた俺は、気楽な生活をすることができた。

それなりに地位ある息子として生まれ、なに不自由なく育てられた。また、伯爵という責任ある位は兄が受継ぐことが、決まっており、自由きままに育てられた。逆に、ほっとかれすぎなくらいだった。だからか、気付けば周りからよく「気ままな奴」とか「つかめない」と言われるようになっていた。

15歳になり、特にやりたいことも無かった俺は、親に反対されたが軍部に入った。軍人はだいたい平民がなり、貴族は入らない。だが、自分でいうのも何だが、剣にはそれなりに自信があったし、頭を使って戦いに勝つことも得意だった。だから、すぐに上への地位へのぼっていった。しかし、すぐに俺の前に越えられない壁があらわれた。

エドガー・ヘルツォーク、後に総司令官にまでなった男だ。俺と同様、公爵の次男として生まれた彼は、この国の初代王シユベルの再来とまで謳われ、その誰も敵うことの出来ない剣の腕もさながら、どんな戦局でも冷静さを失わない鋭い戦略の知恵をあますことなく用いた。そんな男に、俺を含めた軍人は尊敬を抱き追従している。今は、彼の右腕として大佐という地位までに登りつめた俺だが、どことなく冷めた性格であることは否めない。元もとの性格が何かにのめりこむことはなかったし、すべてのことにつけてそつなくこなしてこれた。だからだろうか。常に面白いものを探すようになっていた。人を操り、またはからかつては、何か夢中になれるものを探っていた。

そして最近、面白いことが起きた。我らが上司エドガー様が、聖女の侍女に恋をしたのだ。これには驚いた。あの怜悧・冷血な上司が、ただの小娘に骨抜きにされるとは。相手の少女が、上司の迫力に真つ向と対峙したことは、凄いと思う。だが、それ以上に、エドガー様の惚れっぷりに驚いた。恋は盲目というが、あそこまでとは。

もはや、この恋（一方的な）を応援するしかあるまい！と俺や他の軍の奴らで、策を練った。とりあえず、相手の少女にエドガー様のことを知って、好きになってもらう為、交代でエドガー様の素晴らしさを語ることにした。他の奴らは純粹に上司を思つての行動だろうが、俺にとつては面白半分のものだった。

だが、この作戦はなかなか上手くいかなかった。肝心の相手の少女がまったく、上司になびく気配が無いからだ。これは誤算だった。行く所で、女にモテまくっていたエドガー様だから、すぐに彼の容姿・地位に参つて陥落する自信があつたのだが。意外に恋の成就とは難しいものかもしれない。俺は考えを改めた。

そんな中、この国の王女フィレナが、相手の少女に対して脅しをかけてきている、という情報が入った。フィレナ王女は、エドガー様

に惚れている。だから、エドガー様が恋している少女に圧力をかけてきたのだろう。これに対してすぐに、エドガー様は行動した。その行動の早さは、戦地でのものと変わらない。今まで関わらなかった王子に連絡し、王女のやることの証拠を取り、同じことをさせないようにしようとした。

エドガー様とピーナちゃんの仲を壊そうとしたフィレナ王女だが、サルマン元帥の後継人という後押し、そしてエドガー様の意中の相手への思いの強さを目の当たりにしたことでの衝撃は、さぞや大きいだろう。走り去る彼女の後姿を見ながら、考えた。

「殿下。御足労かけられませんよ。私が代わりに行きます」

気付けば、シオン殿下の代わりに彼女を探す、と言ってしまった。言ってしまった以上神殿の回廊を歩き、彼女がどこに行ったか人を見つけ次第、聞くことにする。

彼女を追いながら、フィレナ王女と初めてあった時を思い出していた。

彼女と初めて会ったのは、5年前だ。魔物が群れをなしてこの国を襲ってきた時だ。その時既にエドガー様の部下だった俺は、常にエドガー様の後ろに従っていた。この国の大きな試練の時でさえ、エドガー様はとも頼りがいのある上司だった。非常事態でも、冷静に軍が動けたのもこの上司の功績が大きい。

そんな中、魔物に怯える貴族たちの中で、ひとつの案が出されていた。それは、『嘆きの乙女』というものだ。150年前、やはり魔物が大量に押し寄せてきた時、この国を憂う王女が、人身御供として己自身を献げたところ魔物たちがその王女の愛国心に感動し国から引いていった、という言い伝えによるものだ。王女が自ら自身を献げたかどうか怪しいものだし、その言い伝え自体が信頼性にかけると思うのだが、切羽詰った貴族たちはこれにすぎた。すなわち、この国の唯一の王女フィレナに、人身御供をするように申し出たのである。普通、主の娘を献げよ、などと言えるものではない。だが、非常事態であり王族としての使命だ、ともっともらしいことを言つて、王に了承させようとした。

王も一人の親である。この意見には大変しぶった。だが、この国の為である、と言われれば王としての責務上果たさざるを得ない。しぶしぶながら、王女を監禁し、いざというときに備えさせた。だが、戦局は上のものたちが想像したこととは反対に進んだ。エドガー様の活躍によってだ。魔物を絶滅寸前にまで追いやる、という偉大な功績を残したのだ。

闘いに勝利した後、エドガー様がしたことは、監禁されていたフィレナ王女を解放することだった。塔に監禁されていたフィレナ王女は、まだその時13歳。エドガー様が部屋に入ってきたときは、目が赤くなっていた。いつ自分が殺されるか戦戦恐怖として泣いて過ごしていたのだろう。

そんなフィレナ王女にエドガー様は、淡々と事実を述べた。

「我々が勝利した。あなたが人身御供になる必要はない。もう、あなたは自由だ」

もう少し労わりを込めた言い方はないものだろうか、と後ろに控えた部下の俺たちは案じたが、これが上司の性格なのだから、しょうがない。

王女は、言われたことを咀嚼したのか、だんだんと表情が明るくなった。

「あ、あの私死ななくても、よろしいのですか？」

「ああ。魔物は追いやった」

「っ！」

青い瞳から、涙が出てきた。この塔に監禁されて、何度も泣いたのだろう。だが、今は喜びの涙だと分かる。考えてみれば、13歳の少女に、御供という重荷を押し付けること自体が、酷な話だ。彼女は、王族の出生というだけで、この役目を与えられた。

「ありがとうございます・・・！」

フィレナ王女は見上げてエドガー様に礼を言った。瞳には、感謝の意が込められている。だが、その中に、また別の感情があるのを俺は見抜いた。

「安らかに過ごされよ」

エドガー様にとっては何気ない一言だったのだろう。だが、その一言で、彼女の纏う雰囲気が変わった。頬が赤くなり、瞳を潤ませながら、フィレナ王女はひたむきにエドガー様を見つめる。その瞳に、俺はぞくつと体がふるえた。この時からだろうか。恋する瞳が美しいと思ったのは。

人から聞いた情報を合わせて、彼女が神殿の中庭にいることを特定

した。中庭に行くと、彼女が頼りなさに、ぼんやりと歩いているのを見つけた。

「フォレナ王女、見つけましたよ」

フィレナ王女は、ギクリと肩を動かした。気まずそうに振り向く。俺を見ると、残念そうな顔をした。・・・そうか、エドガー様だと期待したのか。

俺は皮肉げな笑みを作った。

「王女、城までお連れしますよ」

「・・・はい」

フィレナ王女は俺を伺うように見た。瞳には少しの怯えがある。

「エドガー様だと思いましたか？」

「！」

いきなりの俺の質問に、彼女は顔を強張らす。それで、是だと分かる。

「残念でしたねー。エドガー様は、今頃ピーナちゃんと想いを通わせているんじゃないですかー」

あくまで、穏やかに俺は話す。俺の顔の見てくれは、笑顔だ。

だが、言葉に含まれる毒に彼女は気付いたのだろっ。俺をキッと睨んできた。

「何で、そんなこと・・・」

構わず、俺は話を進めた。

「ある意味、あなたのおかげですよ。あなたが、ピーナちゃんに

ちよつかいをかけたから、エドガー様も自分の想いはつきり伝えるのに躊躇しなかった」

「・・・・・・・・」

あえて、彼女が傷つく言葉を選ぶ。もう、エドガー様と相手の少女の間に入る隙間はないのだと、思い知らせたかった。叶わない恋は早く終わらせた方が良い。

俺の言葉を、王女はピンク色の唇に齒をたて、食いしばって聞いている。表情は苦しそうだ。

「誰も、あの二人の仲を裂くことは出来ない。十分に分かったでしょう」

「黙りなさいっ！」

堪らず叫ぶ彼女を、俺は冷ややかに見た。何故、そこまで気持ちを高ぶらせるのか。そんなにエドガー様に執着していたのか。俺には解せない。本心は心の奥に隠して、他人には見せないものだ。そうでなければ、弱みを握られる。

どんなに好きな奴がいても、恋を成就する為に周りを排除していく程の気持ちなど、理解できない。感情に囚われるなど。

「そこまで、必死になってエドガー様を自分のものにしたかったですか？」

「もう、言わないでっ」

「あなたのしたことは、ただ人を傷つけただけ」

「いやっ」

「そんなことをする人をエドガー様は、愛することは無いと思いますよ」

「……お願い……やめて……」

だんだんと、王女の声が泣き声になっていく。

しまいには、泣き出した彼女を俺は見つめ続けた。

「では、城に戻りましょう」

「……」

フィレナ王女は返事をしなかった。ただ、ポロポロと涙を流していた。しばらく動かない様子だ。しょうがなく、手をつかみ彼女を引っ張って歩いた。最初、抵抗したように腕に力を入れた彼女だったが、それでも引つ張ると諦めたように自ら歩き出す。俺は手を離さなかった。俺たちは、彼女の侍女たちに彼女を渡すまで、ずっと無言だった。

サルマン元帥がピーナちゃんの後見人となり、同時にエドガー様の想い人が彼女だと知れ渡ると、その後の処理が大変だった。俺たちエドガー様の部下はその処理に追われた。時々、「あれ、俺軍人だよな？何でこんな仕事してんだっけ!？」と考えるときもしばしばだ。

噂で、といつても裏の情報網によりだが、あの後フォレナ王女が、こつてり両親に絞られたらしい、ということが分かった。まあ、フィレナ王女がわがままになったのも、5年前彼女を人身御供させる

ことを拒否できなかつた申し訳なさから、周りが甘やかしたのにも原因がある。

今なお、部屋から出るのを禁止されているのは、周りに対してのしめしだということだろう。

（王女つてのも、大変だよー）

周りに振り回されてばっかだ。

ふと、彼女の顔を思い出す。気が強いくせに、すぐ泣く女。恋という感情に囚われた、女。兄のそれより少し色素の薄い青の瞳は、常に一人の男を追っていた。5年前から。俺はそのことを知っている。何故なら、ずっとエドガー様の近くにいて、その様子を見ていたから。

彼女が恋に落ちる瞬間からずっと。

王女と大佐 前編（後書き）

連日、投稿します。
次は後編です。

王女と大佐 後編（前書き）

誤字・脱字があれば、教えてください。

王女と大佐 後編

今日も変わらず、俺は軍の職務とはほど遠い仕事をしていた。外では窓の淵にとまって鳥が相手の鳥に必死に求婚していた。

（つたく、あっちこちで恋しくって）

心は忙しすぎる職務に、荒れずさんでいる。天気は皮肉なくらいに、快晴だ。心地良い風が窓から吹いてくるが、まったく気分は良くない。

「おい、ヒュージ。ピーナちゃんの実家にはっている護衛の報告書、持って来たぞー」

のんきに、俺の部屋に入ってきたのは、同期のマルコだ。薄い茶色の髪と瞳の彼は、どこにでもいるような顔をしているが、そんな高くない鼻にあるソバカスで愛嬌がどことなく感じられる奴だ。実際、相手の懐にすぐ入っていける性格だ。

「ありがとうー」

「何だ、ヒュージ。お疲れな顔だなー！」

わははは、とマルコは能天気な笑い声を上げる。お気楽な奴め。だが、今はその性格が羨ましい。いろんなことがあって、疲れてしまった。

「当たり前でしょー？エドガー様がピーナちゃんとの婚約をほめかしたお蔭で、いろんなところの暴走を止めなきゃいけないんだからー」

やはり、庶民のピーナちゃんにサルマン元帥が後見人となり、エド

ガー様が求婚した、となれば周りがほっておかない。彼女を排除しようとする動き、逆に利用しようとする者も出て、その対応に軍部は追われている。シオン殿下が何かと協力してくれているが、予想していたよりも大きな反響を呼んでいる。

ピーナちゃんの実家に対しても、何かがあるかも分からないので、交代制で見張りをつけている。もちろん、指示したのはエドガー様。そういうことは、抜き無。ピーナちゃんを前にすると、全然ダメだけど。

「そういえばさ、フィレナ王女の謹慎解けたんだってさー」

マルコは、書類を並べている。洩れている書類が無いが、確認しているのだろつ。

「・・・へー」

何でもないというように、返事をした。

「といつても、城から出れないから、庭とかで時間潰してるんだつてー」

書類を揃え、トントンとバラつきを無くす。それを満足げに見るマルコ。視線は書類から離さず、俺を見ない。

「何だ、マルコ。お前詳しいな」

「俺、城のメイドと何人か仲良い子いるから。教えてもらった」

へへん、と胸を張ってと笑うマルコ。そういえば、何気なく人から情報を引き出すのも、こいつは得意だ。だから、何かと情報を得ようとするときは、皆こいつに頼む。

「ふーん」

何気ないように装う俺だが、頭の中は彼女の泣いた顔が浮かんでは

消えていた。最後に話をした日の彼女の顔だ。

「あー、俺少し外に野暮用があつたわ！書類は適当に置いておいてー」

自然に言葉が口から出ていた。ヒラヒラと手を振り、俺は部屋から出た。マルコを見ず、前を見据えて。だから、マルコが俺をどう見ていたか気付かなかった。

野暮用だ、と門兵に言えばすぐに城に入れてもらった。俺は大佐だから、顔パスだ。何となく、足が早歩きになる。向かった先は、庭園だ。

キヨロキヨロと庭園を歩いていると、すぐに探していた相手がみつか。供の者も付けず、ぼんやりと咲き誇るバラを見ている。俺は、自然と口角が上がるのに気付いた。はやる気持ちを何とか抑え、彼女に話しかける。

「綺麗なバラですねー、フィレナ王女」

ギクリと彼女は俺を見た。怯えが瞳には混じっている。いつからだろうか、彼女がこうして俺を見るようになったのは。エドガー様を熱く見つめる彼女を、俺が悪戯にからかった時からだろうか。

「ヒュージ大佐……。どうしてここに？」

「いやね、城の庭園が見たくなつてねー」
俺はへらへらと笑った。

「そう。それでは、わたくしはこれで・・・」

「失恋の傷は癒えましたかー？」

「っ！」

そそくさと立ち去ろうとする彼女を、呼び止めた。思わず足を止める彼女の反応で、まだ立ち直ってないことが分かる。まあ、そうだろうな。何しろ5年越しの恋だし？

「エドガー様は精力的に動き、ピーナちゃんと結婚してしまいますよ？」

まあ、ピーナちゃんの想いは、そうでないかもしれないが。

「・・・何が、言いたいの？」

「いやねー？あそこまで、自分の恋の為に、いろいろと為さったあなたはどんなのかなー、って」

「しつこいわねっ！わたくしがしたことは散々、お父さまたちから叱られ、お咎めも受けましたっ！」

「へー」

飄々とした俺の態度に、彼女はイラついたようだ。頬を赤く染めて、目じりを上げて怒った表情をした。俺はお？と少し驚いた。ずっと何かと嫌味を言ってきた俺に対して、彼女が初めて怒りを示してきたのだ。

「ずっと思ってきましたけど、今日こそは言わせてもらっわっ！あなた、何なのですか！？会うたびに、ちくちくと皮肉ばかり言ってエドガー様に話しかけようとする度に、邪魔ばっかりしてっ！いい

加減にしてください!!」

はあはあ、と息を荒げる彼女は、猫が威嚇する姿に似ている。どんなすました表情よりも、彼女の魅力が滲んでいる。これが、彼女の本心なのだろう。そうだ、この少女は、静かに誰かを想っているより、少しわがままであるが、怒ってても自分をさらけ出すほうが彼女に似合っている。

「それは、すみませんねえ」

彼女のありのままの気質を見て、俺は思わずニヤニヤと笑ってしまうのを止められなかった。初めて、怖がることなく彼女は己を自分にさらけ出してくれたのだ。エドガー様にさえ、見せなかった姿だ。そんな俺を、彼女は睨んでいる。

「あなたは、私を睨むか人の悪い笑みを浮かべるだけだったわ!どうせ、馬鹿な女だと思っていたのでしょうか!? 叶わない思いをもっている、と・・・」

彼女は、唇をかみ締めた。唇から血が出そうにならないか、と場違いな心配をする。手が勝手に彼女に伸ばされたが、彼女はそれに気付かず、話し続けた。

「王女だから、ある程度の贅沢や好き勝手は出来たわ。でもそれは王族としての責務があるから。・・・だから、5年前だってお父さまにそう言われて、嫌だったけど人身御供になる決意だったわ。なのに、なのに・・・」

つうつと頬に涙が伝う。美しい青の瞳から出る涙は、水晶のようだ。

「わたくし、あの子が嫌い! 何の責務を負わず能天気にごしてき

たのに、私が欲しいものを奪ってしまう！エドガー様も……。憎かったわ！あの子を見て、私とは逆に何にもせずのうのと平和に暮らしてきたことが、分かった。なのに、エドガー様の心を捉えた！だから――」

「でも、それはただの八つ当たりでしょー？ピーナちゃんがではなく、エドガー様が彼女に惚れたんだから。ピーナちゃんは全然悪くない」

「分かってます！そんなこと！……。でも、止められなかった」

「本当に好きだったものねー？エドガー様のこと」

彼女は顔を歪めた。俺の前で必死に声を出して泣くのを、堪えようとしているのだろう。

彼女のした行動は誉められたものではない。だが、彼女の一途な瞳は好ましかった。俺には無いものだから。

「軍部の者と王族の者が婚姻したら、国の結束力も高まりますし、一石二鳥ですよー。そんな言い訳をしながら、エドガー様への恋心を正当化しようとしたり？……。まさか、そんなことも考えました？」

「もう、黙ってくださいっ！」

彼女は、顔を赤くする

どうやら、凶星だったようだ。

「ふーん？」

俺の意地悪な視線に耐え切れなく、彼女は下を向く。さらり、と金色の髪が揺れ、綺麗な光のようだ。

「でも、それなら出来ますよ？」

「・・・何がですか」

しぶしぶ聞いてきた彼女に、俺は笑顔で答えた。

「軍部の者と婚姻すれば、いいんでしょう？ だったら、俺と結婚すればいい！ 俺、結構高い地位にいるし」

「はぁーーーーー！？」

思わず顔を上げ、すっとんきょうな声を出す彼女を、見つめる。あ、間抜け面もかわいい。

「俺と『恋』しましょ？ 王女様」

かがんで、彼女の顔と自分の顔を近づける。

「な、何冗談を言ってるの？！ 言っていることと悪いことがありますっ！」

顔を赤くしたり、青くしたりとなかなか彼女は忙しい。それを見ていて、楽しんでいる自分がいる。

「冗談じゃありませんよ、酷いなー。本気ですよ？ 何しろ、あなたと同様5年越しの想いですからね！」

そう、彼女の恋する瞳に、俺は落ちた。その一途さに。初めは、憧れかとも思ったが、違った。彼女のその愚かな行動さえ、愛しい。彼女がエドガー様ばかり見つめるのが、ずっと気に食わなかった。だから、彼女に皮肉を言うようになった。少々やりすぎた感はあるが。

その瞳で、今度は俺を一途に見てほしい。ぶれることなく、ひたす

ら。前の好きな男は君を好きにならなかったけど、俺は裏切らない。だって、俺は見つけたのだから。絶対に手放したくない、必死になれるものを。あの日君の瞳を見てから。

「だ、断固拒否ですわー!!」
庭園で、王女の悲鳴が響いた。

総司令官と聖女の侍女との仲が騒がれている中、もう一組のカップルの攻防戦が、したたかに始まっていたのを、人々は知らない。

マルコは、ヒュージが早足で部屋から出て行くのを見て、ため息をついた。同期であり友人の彼は、意地っ張りだ。プライドが高いのだ。好きな女性に対しても素直に自分の気持ちを伝えないで、別の男に恋する意中の相手に意地悪ばかりしている。餓鬼が、まったく。

「きつと、ありゃヒュージも初恋だぜ」

何せ、好きな相手に、構いすぎて嫌われているのだから。いや、怯えられているのか？

どっちにしろ、エドガー様を熱くみつめるフィレナ王女を、イライラと見つめ、皮肉ばかり言い怒りをぶつけている辺り、ダメダメだ。余裕が無いのだろう。

結局、どんな優秀で頭が切れたり、女の扱いにたけていても、惚れたなら、どんな男も同じだ。相手の女性に振り回されるのは。

ふと、ヒュージの机の引き出しが少し開いているのに気付く。隙間から、本が入っているのが、分かった。何気なく、引き出しを開け、本を取り出すと、本には

『相手を惚れさせる方法』これであなとも意中の相手と両思い』

という題名がある。

(ヒュージ・・・)

あいつ、涼しげな顔して、こんな本に頼るほど余裕無かったのか・・・。

本には、付箋が付けられているところがあり、ページを開くと、

『惚れさせる極意その2・失恋したところを狙うべし』

とあった。丁寧に、マーカーで色までつけられていて、彼の意気込みが伺える。

(ヒュージーーー!!!!)

お、お前って奴は・・・。

マルコは、ほろりと涙を流した。彼女との恋を成就するため、ヒュージの涙ぐましい努力が感じられる。プライドの故に、周りには相談しなかったのだろう。

プライドが高い二人が、これからどうなるか、見守っていきこう！マルコは静かに決意した。

王女と大佐 後編（後書き）

どんな人にも良い面・悪い面があるように、登場人物にも様々な面を持っています。誤ったことをしたフィレナですが、そんな彼女もいろいろな考え・経験・性格があることを知ってもらえれば、と思います。

皆さんの感想をいただき、この番外編を執筆する意欲ができました。ありがとうございます！

引かれがちなエドガーも少しカッコ良かったでしょうか！？

にじゅうよんわめ

『花渡しの祭り』

この日に行なわれる、一年に一回の祭りだ。この祭りの日には、旅芸人や見世物がたくさん来て、出店も多く並び、観光客も大勢やってきて、活気付く日となる。国の人間にとっても、大切な娯楽の時ともなり、毎年皆が楽しみにしているのだ。だが、この日は、若者たちにとっても重要な日となる。『花渡し』というのは、男性が意中の女性にプロポーズしたい時、一本の花を贈り、相手に受け取ってもらえれば求婚が成立する、という伝統行事でもあるのだ。

城下では、前日からお祭りで賑わいを見せており、当日の今日は最高潮と達しているだろう。だが、これは聖女のルナには、あまり縁が無い行事だ。聖女というものが、軽々しく城下を歩き回っていないはずないからだ。そんなことをすれば、ありがたい存在である聖女に人が群がり、混乱状態になるだろう。だから、ルナがお祭りを見れたとしても、城の高いところから、見おろす程度になる。ピーナも、そんなルナを一人にさせるつもりはなく、今日も変わらずルナと一緒にいるはずだった。なのだが。

「わ、私が、お祭りにですか!？」

ピーナはすつとんきような声を上げた。ルナに言われたことがまだ、ちゃんと理解できない。

「ええ、私、お祭りに行けないでしょ？だから、代わりにピーナに

お祭りに行つて、その様子を教えてほしいの」
ルナは、おつとりと微笑む。翡翠色の瞳には、優しさをたたえている。

「で、でも・・・」

ピーナは分かっていた。こんなことを言っているが、ルナは単にピーナにお祭りに行つて楽しんできて欲しい、だけなのだと。彼女はどことなく、ピーナが侍女という役柄に拘束されていないか憂いているふしがある。だから、何かとピーナのことを気にして、こうやっては気分転換をさせようとしてくるのだ。

その気持ちはとても、嬉しいのだが、同時に申し訳ない思いでいっぱいになる。初めは強制的だったが、ピーナは決意して侍女の役目を果たしているのだから、ルナは責任を感じなくていいのに。

「ね？お願いっ」

顔の前で手をパンと合わせ、ルナはピーナにおねだりする様に言うてくる。

（か、かわいいです、可憐ですっ！）

一瞬、ルナに見とれてしまったピーナだが、慌てて意識を戻す。

「私毎年お祭りに行つてましたし、今年は出なくていいです。お祭りの様子なら、去年のものであれば、覚えてますし・・・」

ルナを一人にさせてはならない。彼女だって、お祭りに行きたいに決まっているのだ。だけど、こうして我慢してピーナだけでも行かせようとしてくる。そんなルナだからこそ、ほうっておけない。ピーナは誘いを断ろうとした。

「毎年お祭りの様子なんて、違うでしょ？それに、お土産も買ってきてくれば、それでいいのよっ」

頬をふくらますルナ。ルナも負けじと、ピーナをお祭りに行かせようとしてくる。

「でも、ルナ様をお一人になんて」

「一人じゃないよ？」

優しい声色が、ピーナの言葉を止める。第三者に驚くと、シオンが部屋に入ってきた。今日はお祭りのせいか、いつもより装飾品などもたくさん付けて、煌びやかさが倍増だ。

「ルナスタリーナ殿には、僕と一緒に城からお祭りの様子が見えるバルコニーでのお茶を招待したいな？だから、ピーナは思いつきり、お祭りを楽しんでくればいいよ」

・・・ピーナは分かっていた。こんなことを言っているが、シオンの本心は違うことを。訳すと、『ルナと二人でデートしたいから、ピーナはお祭りにでも行ってなさい』だ。にこやかに言っているが、絶対にそうだ。ピーナのルナへの愛ゆえ、センサーが発動していた。この男、危険、と。

「シオン殿下！いいのですか？」

ルナは嬉しそうにシオンに聞く。逆にピーナの心が荒んでくる。ここは邪魔しなければ・・・。

「わ、私もそのバルコニーに行きたいですー」

てへっとな気なく、二人のお茶会を阻止しようとする。笑顔が少し強張った気がする。だが、ここで引けば、ルナが危ないかもしれない。自然を装うピーナをシオンを見ると、クスッと笑った。

「王族の僕や聖女のルナスターナ殿は、なかなかお祭りには立場から参加できない。せいぜい城から人々に手を振ったりするだけだしね？でも、ピーナは制約がないんだ。せつかくだから行つてきなよ」

軽い調子で言ってくるが、有無を言わせない雰囲気強くシオンから感じた。何だか、怖い。

（でも、ルナ様をお守りしないと）

徹底的にシオンに対峙する心積もりのピーナだったが、意外な者に阻止された。

「ピーナ、せつかくだから行つてきなさいよ？あなたには、私の分も楽しんできて欲しいの」

「えっ！？で、でもー」

ルナが曇りの無い笑顔で微笑む。心からピーナを思ってくれているのが、感じられ、何も言えなくなる。ピーナの大好きな笑顔で見つめられれば、拒否できない。ルナの笑みに負け、ピーナはうな垂れて、「はい」と返事をした。ピーナの様子をルナは不思議そうに、シオンは読めない笑顔でそれを見ていた。

「ちえゝ。ルナ様大丈夫かなー？」

ピーナは足元にある石を転がしながら、呟いた。お行儀が悪いかもしれないが、心配のあまりつつい小さいころの癖が出てしまう。

あの後、あれよあれよと追い出され、城下町に放り出された。もちろん、シオンによって。あの人、絶対確信犯だ。用意周到であり、計画性を感じる。きっと、ルナとピーナが別々になるこの日を狙っていたのだろう。ルナがシオンを想っているのは知っていたが、素直にルナをシオンのところへ行かすのも癪である。ピーナは心をもやもたとさせ、賑わう通りをトボトボと歩いていた。

いつもより格段に、人通りが多く、楽しげな声で満ちた道を通る。そのうちに、ピーナのやさぐれていた心もだんだんと治ってきた。どうせなら、思いっきり楽しもう。実家に帰って、久しぶりに家族とお祭りを堪能するのもいいだろう。お土産も買って行かなくては。そういえば、ルナ様たちにもお土産買わないと。

だんだんと、ピーナもお祭りの雰囲気によりわくわくとしてきた。何だか、早歩きになり、スキップまでしてしまいそうだ。

（と、とりあえず、出店でお腹を膨らませて、腹ごしらえよね？腹が減っては戦はできぬ、って言うし。その後家に帰ってー）

頭の中で、今日の計画を立てていたピーナは、大広場に足を踏み入れた。見世物・出店、さまざまな人が大広場において、特に活気あふれたところとなっている。ここを通過して、少しするとピーナの家なのだ。

どうせなら、ゆっくり歩いて雰囲気を楽しもう、とピーナが考えた矢先、女性の黄色い悲鳴が聞こえた。

（何っ！？強盗？）

にしては、嬉しそうな悲鳴だ。悲鳴が上がったと思われる方向を見ると、人だかりが起きている。女性の。

ピーナは冷や汗が背中に流れるのを感じた。とてつもなく、嫌な予感がする。今までの経験が、危険だとピーナに告げる。やめておけばいいのに、何が起きているのだろうと気になってしまい、その人だかりを注意深く見ていると、中心にいた人物がちらりと見えた。

絹のような銀色の髪がまず目に入る。それは光に反射しキラキラと輝いている。

氷のような冷たい美貌。いつも通り隙のない軍服で、佇む姿は見る者をとりこにしまう。

それは、まぎれもなくピーナがよく知る人物だった。

（エ、エドガー様 ！？）

なんで彼がここにいるのだろう。エドガーは、とても目立っていた。若い女性たちは歓声を上げ、彼を人目みようと必死になっている。逆にピーナはこの状況をいかに切り抜けるか、必死に考えた。とりあえず、急いで家に駆け込もう、と一歩後ろに下がった。

その時

ピーナと距離が離れていたはずのエドガーとの視線が一瞬、かち合った。

ピーナは蛇に睨まれた蛙のように、動けなくなる。視線がそらせない。

ニヤッと、エドガーは凶悪そうな笑みを浮かべた。

にじゅうわめ

エドガーと視線があつたピーナは身震いした。興味本位で、人だかりを見てしまった自分が恨めしい。エドガーがピーナとの結婚を諦めない、と宣言してから、会つたびに求婚されている。それとなく断つたりしているのだが、相手は聞く耳をもたない。何だか、求婚の激しさも日々増している気がする。今日は、そんな日々から解放され、お祭りを楽しめると、思ったのだが……。そうもいかないらしい。

(とりあえず、逃げなきゃっ！)

ピーナは、エドガーを背にして走り出した。今実家に帰るのはまずい。というより、家族に迷惑をかけたくない。とすれば、向かう先は、さつき追い出されたばかりの城だ。ルナに匿ってもらえば、なんとかなるだろう。ピーナは下っ端メイド時代に鍛えた健脚で、走つた。

「キヤーー!」

「うわっ!」

「ひいっ」

後ろから、人々の悲鳴が聞こえる。理由は、考えたくない。ピーナは恐々と後ろを振り返つた。

(ぎゃ~~~~~っ!?)

ピーナは内心絶叫した。エドガーが、凄じ剣幕でこちらに走ってきていたからだ。もともと切れ長な瞳は、さらに鋭くなっており、獲物を狙う狩人のような目つきだ。軍人である彼が、鍛え抜かれた動きで走ってくるのは、なかなか迫力がある。というより、怖すぎる。

そんなエドガーに、誰も近づこうとはしない。エドガーに群がっていた女性陣ですら。彼の発する気迫に、人が密集していた広場でさえ、自然と人が彼をよけて道をつくっている。逆に、ピーナは溢れる人に、あまり進めない。このままじゃ、追いつかれてしまうっ！ピーナは焦った。

「後生ですっ！どいてくださいーい！！どーいーいーてーいー！」

ピーナは、なりふりかまわず叫んだ。そんな必死な形相のピーナに、周りの人間はぎょっとしたように見る。そして、彼女を避けてくれた。なんとなく、悲しかったが、今はそんなことは言っていられない。エドガーから逃げなくてはならないのだ。捕まったら危険、とカンが告げている。ピーナは今までに無いくらい一生懸命に、走った。

おそらく、わき目もふらず走るピーナと、ピーナに一直線に疾走するエドガーをみて、人々は二人が追いかけ追いかけられていることが分かったのだろう。お祭りの楽しいな雰囲気が一転し、皆が二人の動向を手に汗をにぎって見守る奇妙な空気が流れている。お祭りそっちのけで、注目をあびる二人。よく見れば、エドガーの手には一輪のかわいらしい花が握られている。このお祭りの日に、花を持っている理由は明白だ。花渡しの行事にあやかっ、求婚をする、ということだ。そして、その花を受け取ったら最後、ピーナはエドガーの求婚を断ることは難しい状態になることは必至だ。

エドガーが聖女の侍女に求愛している、という噂はもう国中の者が知っている。そんなエドガーが一心不乱に追いかけている少女こそ、エドガーの意中の相手だと予想はついた。だが、それはピーナにとって大変不名誉な事だ。というより、エドガーを狙う女性たちに顔がバレるのはとても痛い。今ピーナたちを見つめている女性たちに睨まれているのではないか、とびくびくした。それとなく、走りながら周りを見ると、周囲の人間はピーナを可哀相なもの見る眼差しで眺めていた。意外にも、エドガーの登場に黄色い悲鳴をあげていた乙女たちですら、ピーナを同情や哀れむように見つめてくる。

（いや~~~~っ！やめて、そんな目で見るなあ~~~~！）

もはや、ピーナは止まらない滂沱と出る涙を流しながら、走った。

軍人のエドガーは本気で走るのだから、ピーナとエドガーの距離はだんだんと縮まってきた。だが、ピーナも死ぬ気で走っている為、いまだエドガーに追いつかれることはない。息を切らしながら、城下を駆けていると城の門が見えてきた。ここをくぐり、シオンと城のバルコニーにいるルナに助けを求めれば、こっちのもんだ。

（やった~~~~っ！ようやく、私にも運が回ってきた・・・た！？）

ほっとしたのもつかの間、城の門には、ズラ〜と軍人たちが構えて立っているのが見えた。確か、城を出た時には、こんなに人数は

いなかった。だが、今は重層な警備体制だ。何か、城で起こったのだろうか？しかし、軍人たちの顔には焦りの色はない。疑問に思いながらも、走る速度は緩めず、門をくぐろうと近くの軍人に声をかけた。

「すみませんっ！聖女様の侍女、ピーナ・リロットです！城に入れてくださいっ」

早くしないと、エドガー様が来てしまう！ピーナは軍人をせっついた。

「あ、ピーナちゃん！ひさしぶりー」

そんなピーナに声をかけたのはヒュージだ。いつものごとく、読めない笑顔でピーナを迎える。

「ヒュージさん！？お、お久しぶりです！今日は何も言わず、はやく城へ入れてくださいっ！！」

ピーナはヒュージにかけよった。

切羽詰った表情のピーナを、申し訳なさそうにヒュージは見つめた。

「ごめんねー。それが出来ないんだよ」

「何故！？」

意味が分からない。一応、ピーナは聖女の侍女なのだから、顔パスで門をくぐるはずだ。何しろ、ヒュージという立場の高い軍人がピーナを認知すれば、手続きなど不要なはずだ。

「命令でね、ピーナちゃんだけは門をくぐるときは、エドガー様と一緒にしないと、駄目なんだー」

ほら、これが令状、とヒュージが見せた書状には、

『特例』

本日ピーナ・リロットが城に入る際は、総司令官であるエドガーの付き添いが無ければならない、とする。

総司令官』

なんじゃこりゃー………っ！

ピーナはヒュージから令状を奪うようにして取り、何度もその文を読み返した。なんだか、今日の事は前々から仕組まれた感がバシバシ感じる。

「お願いです……っ！ 今日だけは見逃してくださいー！」

ピーナは涙目になりながら、ヒュージに頼み込んだ。

「いやねー？ ピーナちゃんとエドガー様がくっついてくれれば、俺としても助かるんだよね。だから、無理」

笑顔で断られた。しかも、意味が分からない。なぜ、ヒュージが助かるのか。ヒュージでは、頼りにならないと判断し、他の軍人たちをみると、さっと目をそらされた。……酷すぎる。

お前ら、民間人を守るのが仕事だろう。だったら、危機に瀕している私を助ける。

ピーナが恨みがましく、うぐぐぐ、と唸っていると、ポンと肩を叩かれた。しかも、ピーナが逃げないよう両手がピーナの肩をつかむ。

誰かが、後ろにいるのが分かった。何だか、寒気がする。ピーナは、自分がふるえているのに気付いた。

「もう、諦めるしかないよねー」

とヒュージが楽しげに微笑んでいる。他の軍人たちは申し訳なさそうに、ピーナを見つめていた。

「ピーナ」

少し掠れた美声が、ピーナの脳天に響く。その一声で、ピーナは石になったように動けなくなる。両肩をつかまれて、相手の手の温度が伝わる。それは、熱いほど。ポン、と後ろからピーナの頭に己の頬を摺り寄せたのが、感触で分かる。

「捕まえた」

「ひ」

強制的に体を後ろに回され、向かい合わせにされる。予想通り、エドガーが嬉しそうにピーナを見据えてきた。追いつかれてしまったのだ。さっきまで、疾走したとは思えないくらい、涼しい顔だ。

「今日は花渡しの祭りだな」

「は、はい」

迫力に負け、思わず返事をしてしまうチキンな自分恨めしい。

「花を受け取れば、求婚を承諾することになるな？」

「そうでしたっけー？」

ピーナは目を泳がせた。ここで、しらはつくれて、話をうやむやにしたい。そんな挙動不審なピーナを愛しそうにエドガーは見た。そ

して、表情を獣のように寧猛な顔つきへと一転させる。思わず、一歩下がろうとしたが、いつの間にか腰に腕がまわされ、動けない。エドガーはもう一方の手で、胸のポケットにさしていた花をとり、ピーナに差し出す。

「花を受け取ってくださいか、ピーナ？」

顔を息が掛かると思うくらいに、近づけてくる。優しい言葉とは逆に、瞳は有無をいわせない意志が感じられる。だが、ここで花を受け取れば、後が無い。尚も逃げ道を探ろうとピーナが返事を躊躇っている、エドガーはピーナの耳に唇をそっと押し付けた。その柔らかな感触に、心臓が高鳴った。

「ここで、花を受け取るか、私の口付けを受けるかどっちか選択しなさい」

ピーナにしか聞こえないように、ボソボソと言葉をつむぐ。熱い吐息がピーナの鼓膜を揺らす気がした。他には選択肢は無いらしい。唇を耳から離し、もう一度エドガーはじっとピーナを見つめる。

人は、何でも問題から逃げたいものだ。逃避をする生き物だ。もし、問題が先送りに出来るのであれば・・・。

ピーナは緩慢な動作で、花を受け取った。エドガーは花を受け取った喜びと、口づけ出来なかった残念さが混じった表情をした。だが、これで求婚に承諾したことになる。エドガーは結婚が近づいてきた喜びで、ピーナを強く抱きしめた。めったに見られない、笑顔で抱きしめられたピーナは、遠い目をしていた。温度差のある二人である。

そんな二人を周りの人間は、何とも言えない顔で、ぱちぱちと拍手

をした。

このことで、正式にピーナとエドガーの仲は『婚約者』、となった。ピーナにとっては、最悪の事態となったのだ。

だが、ひとつ良かったこともある。大量に送られてきたエドガーのファンからの脅迫状が、ピタツと止まったのだ。エドガーに追われたピーナが、哀れすぎて怒る気が削がれたらしい。嬉しいやら、情けないやら、である。

ピーナは、これからどうなるのだろう、と未来に想いを馳せた。

にじゅうごわめ（後書き）

皆さん想像の通り、これはシオンとエドガーの共謀です^^
ヒュージも己の恋の為、協力的です。

もう、物語も後半になりました。

ラストスパートに向けて、頑張ります。

にじゅうろくわめ（前書き）

軽い流血表現あります。ご注意ください。

にじゅうろくわめ

事件はこの国、アインシュベルの北で起きた。最北の村が、隣国の国フアラント国の軍によって襲撃されたのだ。幸い、怪我人はいたが、死人はでなかった。だが、このことは意図的にされたことで、フアラント国のアインシュベルに対しての宣戦布告とも言える行動だった。

数日後、フアラント国から使者が送られてきた。その使者が言ったフアラント国の意向とは、『聖女であるルナスターナをこの国に引き渡せ』というものだった。一方的に圧力をかけてくるフアラント国の行為に、王たちは怒った。フアラント国は、国の規模としてはアインシュベルと同じくらいだ。大陸の中で強国なアインシュベルに並ぶ、大国だ。だが、この国の姿勢は強硬的で、他国からも敬遠されていた。この国も、聖女はいなく、久々に生まれたアインシュベルの聖女が、喉から手が出るほどに欲しいのだろう。ここ数年、とみに疫病や飢饉に見舞われていたからだ。

もちろん、大事な聖女をおめおめと引き渡すわけにはいかない。だが、このことを拒否すれば、フアラントが戦争をしかけてくるのは明白だった。大同土が争うのは、巨大な被害をもたらす。返事はまた後で、と一旦使者には帰ってもらい、王や権力者たちは会議を毎日のように繰り返していた。

「何だか、物騒ですねー」

「そうね・・・」

ピーナは窓から外をキョロキョロと見渡した。暖かい光が、庭に注いでいる。いつもと変わらない風景なのに、どこが不穏な空気が流れている気がしてならない。実際、神殿の中にも、会う神官たちの顔の表情は暗い。自分たちのリーダーである聖女が隣国に狙われているのだから、仕方ない事だろう。ピーナは、渦中にある本人のルナがどう感じているのか心配だった。心優しいルナがこの状態を憂いはいはずがないのだ。ルナは時々ため息をつくようになった。戦渦が始まっていないか気にしているように、遠くを見ていることが多くなっている。今も、ルナは長いため息を吐いた。

ピーナの周りも緊張感のある雰囲気を漂わせている。エドガーやヒュージも最近、固い表情をして仕事の忙しさから神殿に訪れることがなくなってきた。シオンは、時々ルナに会いに来るが、ルナが元気が気落ちしていないかを気にしているようだった。そんな状況であるため、ピーナとのエドガーとの婚約話の噂も鳴りを潜めている。国中、これからどうなるのか心配して活気がなくなり、嵐の前の静けさといった感じた。

（ああ、嫌だなー！早く、問題が解決されればいいのにつ）

楽天家のピーナでさえ、気がふさいでしまう。何より、大好きなルナが悲しむのは見たくない。ルナは、神殿から一切でるのを禁じられ、事実上監禁状態だ。いつ隣国の賊が襲ってくるか、分からないということとで部屋からも出れなくなった。ただでさえ、息が詰まるのに、さらに気分が重くなってしまふ。ピーナは明るいを出した。

「でも今日は、久しぶりに外に出れますね？私はドキドキします！」
今日は午後からこの国の創始者、シュベルが魔王を倒した日、とされ大々的な式典がある。王族・聖女・軍の上層部が出席する日だ。侍女であるピーナも出席が許され、ルナの側に控えていることになった。緊張するが、誇らしい心持でもある。

「そうね。ただ座っていればいいのだけど、式の間あまり動けないのだから疲れそうだね」

ルナは目を細めピーナに微笑みかけた。ピーナが何とか自分の心をほぐそうとしてくれているのが、分かったから。

「そろそろ、準備しましょうか？」

「ええ」

式に備えるべく、式典用の衣装に着替えることにした。

そんな二人の周りを不穏な影がうろついているとは知らずに。

式は王の号令から始まった。ずらりと王たちを始めルナやサルマン、エドガーなどの長がイスに座る。ピーナはルナの後ろの小さなイスに座った。途中エドガーの熱い視線を感じたが、式の最中はピーナだけを見ているわけにもいかず、しぶしぶと前を見ていた。神官がずらずらと国の英雄であるシュベルの偉大さを物語口調で謳う。あまりにも長いので、ピーナはうとうととした。目の前にいるルナは、始めの姿勢と同じ姿で話を聞いていて、凄いと想う。

（やっぱり、ルナ様はすばらしいな）

改めて、ルナのこと大好きになる。式典では中央に王族、左右に聖女、元帥と総司令官が座っていた。シオン見ると、いつもより派手な服装をしている。優しい顔立ちでありながらも、王族としての風格を備えている姿は、さすが王子だ。王子の隣には王と后、アレックス王子、そしてフィレナ王女がいた。美しい金髪を結い上げ、上品に座っている。エドガーが初めてピーナに求婚した以来、話したことはないが、今はどうなのか気になった。少し離れたことには、サルマン元帥とエドガーが並んで座っている。サルマンは、目を開けてまだ話す神官を見ている。・・・が、口の端からよだれがつつと出ていた。以前に、『得意技は、起きたフリじゃっ！』と言っていたが、今まさに目を開けて寝ているのかもしれない。そして、横に視線を滑らすと、エドガーがいた。無表情で神官の言葉を聞いていた。カリスマ性のある彼はただ、座っているだけなのに目が引き寄せられる。

（私すごい人に求婚されているのよね・・・）

今更だが、そう思う。今までのピーナの人生は、平凡ながらも幸せだった。優しい家族に恵まれ、憧れの神殿で働く事ができた。大変ながらも、やりがいのある生活だった。それが、変わったのはやはりルナと出会ってからだだろう。このことは、ピーナの中でも、最大級の幸運だったに違いない。物語で聞かせられて、夢見ていた聖女のもとで今は一番身近な侍女という働きをしている。庶民のピーナが侍女することに陰口をたたく者もいたが、気にしなかった。それ以上に、僥幸に恵まれていたから。だが、そんな日常が波乱万丈なものになったのは、彼、エドガーのせいだろう。会ったびに睨んできた彼が、実は自分に好意を抱いていたなんて、誰が思うだろう。

思えば、最近はいろいろなことがあった。そう感じさせないくらいに。ピーナはしみじみと感じ入った。

じつとエドガーを見つめて物思いにふけっていると、エドガーの灰色の瞳と視線が合った。

「っ！」

すぐに目を離せばいいものを、なんとなく視線を外せない。自分が彼を見ていたことに、気づかれた事が何故か恥ずかしかった。心臓がどきどきした。そういえば、この人に抱きしめられたことが、幾度かあった。今になって、その感触をまざまざと思い出してしまう。

絡まる視線をどうすればいいのかわからなく、焦っているとエドガーは薄く微笑んだ。その笑顔を見た時、心臓がつかまれた気分になった。いたたまれなく、視線を必死に外す。尚も彼の視線を感じたが、もう一度彼をみる勇氣はない。

（ど、どうした、私？心臓病！？）

ピーナは、さらにバクバクする心臓がどうすれば治るか、必死に考えた。

そんな時、異変が起きた。式典を見ていた観衆の中から悲鳴があがったのだ。その後は一瞬だった。一般人に見せかけた数十人の男たちが、刃物を取り出し、一斉にルナたちのほうに向かってきたのだ。陣形のとれた様子でせまってくる。警備にあたっていた軍人たちが、必死に交戦する。荘厳な式典は一気に騒がしい空気にのまれた。何が起こっているのかわからない。ただ、一つ言えることは、男たちがルナを目指している、ということだ。

「ルナ様っ!!」

「ピーナ!？」

ピーナは、思わずルナの前に立った。何も出来ないが、いざとなったら、自分の身を挺してもルナを守る所存だ。そんな時、数人の徒党を組んで、刀を持った屈強な男たちが近くまでやって来た。シオンが必死にこちらにやって来ようとする姿が見えたが、他の男に阻まれ、動けずにいるのを目の端に捉える。

(せめて、私が時間稼ぎをっ)

ピーナが決意を込めて、男たちを睨むと、その途端に男たちは倒れこんだ。ピーナは啞然とした。ただ、睨んだだけで、人は倒れるのか・・・？

(わ、私、実は目からただならぬ覇気を出せるとか・・・!?)

そんなお馬鹿なことを少し考えたピーナだったが、「大丈夫か?」という声で現実に戻る。いつのまにか、エドガーが右隣にいて、ピーナを心配そうに見おろしている。

「え?・・・はい」

思わず、返事をするピーナ。よく見渡せば、暴動を起こした男たちの大半を軍人たちが既に取り押さえているのが目に入る。エドガーの手には刀がいつのまにやら握られている。式典の時には、脇に差していたものだ。やっと、ピーナの頭が覚醒した。どうやら、先ほど倒れた男たちはエドガーが倒したのだろう。自分が倒したのだと一瞬でも考えた己が恥ずかしい。顔が熱くなるのを感じた。

「ピーナ、大丈夫？」

そんなピーナに黙っていたルナまでもが、心配そうに見てくる。二人に見つめられ、いたたまれなくなったピーナは、赤面しながら、後ずさった。

「だ、だ、大丈夫ですーっ！」

しかし、それがいけなかった。軍人に拘束されていた一人の男が、一瞬の隙をつき縄を這い出しナイフを投げてきたのだ。

「このやろうつ！」

それは悔し紛れの行為であつた。ナイフはピーナに向かって飛んできた。ピーナが気付いた時には、ナイフが目前と迫ってきていた。

「ピーナアーツ」

ルナの悲痛な叫び声が響く。

ザシュツという何かを切り裂く音と共に、ピーナの目の前で赤い血しぶきがあがった。

にじゅうろくわめ（後書き）

初めて暗い内容ですね。
すみません。

にじゅうななわめ（前書き）

暗いままが嫌なので、堪らず更新します。

にじゅうななわめ

ピーナは呆然と赤い血の雫が、床に落ちるのを見た。銀色の髪が顔をくすぐる。そこで、初めて誰かに抱きかかえられるようにして、かばわれているのに気付いた。顔を上げると、眉をひそめるエドガーだった。そして、視線をずらすと、エドガーの右肩にはナイフが刺さっており、血がにじんでいた。

「・・・エド・・・ガさ・・・ま・・・？」

掠れた声が出る。上手く言葉を話せない。視線も血が流れる肩から離すことができない。そんなピーナに薄く微笑み、ピーナの頬をそつと撫でた。そして、エドガーは身をひるがえし、先ほどのナイフを投げてきた男に近寄った。既に男は、再度他の軍人によって捕えられていた。エドガーは先ほどのピーナに向けていた笑顔から、怒りに満ちた表情へと一転させる。

「ひっ！」

男はエドガーの剣幕に、思わず悲鳴をあげる。エドガーの放つ憤怒のオーラにのまれていた。

エドガーは、男の目の前に来て、視線を合わす。

「貴様、よくも俺のピーナにナイフを投げたな」

男を凄い勢いですごむ。睨まれている筈の、軍人や捕まった他のルナたちを襲ってきた者でさえ、その激しい形相に怯えた。

「ピーナがいるから、今は何もしない。だが、覚悟しておけ」

言い放つと、ナイフを抜き取り、投げ捨てた。ナイフを投げた男は恐怖に、呆然自失となっている。

エドガーはそんな様子を一瞥し、先ほどまでナイフが刺さっていたとは思わせない、きびきびとした動きで軍人たちに指示をし始めた。

そんな様子をピーナは、ずっと見ていた。『いつ、あなたのピーナになったのですか』というつつこみは思い浮かばなかった。ピーナは、エドガーが浅はかな行動をしたピーナをかばって、怪我をしてしまったのだと、気付いた。一気に、心が重くなる。ドロドロとしたものが胸に溢れる。

エドガーは、一瞬ピーナを伺うように見た。だが、ピーナはびくっと思わず体をふるわせる。自分の過ちで怪我をさせてしまった、エドガーにどうすればいいのか分からない。すぐにでも謝ればいいのか、頭が混乱してそれすらも思いつかなかった。エドガーはそんなピーナを見て、どこもなく悲しそうにしたが、己の業務に戻っていった。

もしかしたら、エドガーは自分のことを怖がっているのだと思ってしまったのかもしれない。

「あっ……」

思わず、手をのばす。

違う、そうじゃない。あなたが恐ろしいのではないのです。ただ、自分の罪が大きすぎて、どうすればいいのか分からないのです。結局、何もエドガーに言えなかった。

「ピーナ、大丈夫？」

心配そうに己を見てくるルナを見て、思い出したように涙が溢れた。エドガーの肩にナイフが刺さり、血が流れる場面が何回も頭の中で繰り返される。

「ふえっ、ルナさま、どうしよう・・・、うう」

自分の行動から、あんなことになるとは思わなかった。謝って、済む問題ではない。何より、人に傷を負わせてしまったことが、ピーナにとって重かった。今までそんなことは無かったから。

えぐえぐ、と泣くピーナの背中をそっとルナは撫でた。もはや、この状況は軍人たちが立ち回り、式典どころではない。王たちは避難させられ、人々も軍の指示にしたがって、移動し始めている。そんな慌しい中ピーナは取り残されたように、泣いていた。そんなピーナとルナにシオンが気付き、近寄った。

「大丈夫？もし歩けるなら、神殿に戻ろう。あっちのほうが、落ち着けると思うし」

「ええ、そうですね。ピーナ、歩ける？」

シオンはピーナに手をかした。ルナは肩を抱き、ゆっくりとピーナを連れていった。

神殿にピーナを連れて行き、一回戻ってきたシオンからの情報によると、エドガーの傷は深くなく、傷を縫うほどでもないようだ。し

ばらく、動かさないように、との診断、ということらしい。だいぶ落ち着いたピーナだったが、それを聞いて、ピーナはほっとした。ひとまず、一安心だろう。

「良かったわね、ピーナ！でも、あなたがそんなに気を負うことはないのよ？悪いのはナイフを投げてきた奴なんだからっ」

「いいえ、私の短慮すぎる行動のせいです……。謝らないと」
ピーナは、スカートをぎゅっと握り締めた。さっきは、自分のあやまちに、我を忘れるとほどうるたえてしまい、ルナたちに迷惑をかけてしまった。すっかりしなくては、と自分に言い聞かせる。

「それがね、さっき襲ってきた犯人たちんだけど、どうやら、フアラントの国の奴らみたいなんだ。もう、これには王や高官たちも怒り心頭でさ、もしかしたら戦争が始まるかもしれない」

「ええ！？」

「そんなっ」

シオンの発言に、少女らは言葉を無くす。シオン自身つらそうな表情だ。そういえば、あの刃物を向けてきた男たちはルナをひたすら狙っていた。おそらく、ルナが公の場に出るときを虎視眈々と狙っていたのだろう。

「たぶん、強制的にルナスタリーナ殿を奪おうとした計画だと、思う。……。だから、その後始末や、もしかしたら戦争するかもしれないからその準備とかで、エドガー殿は忙しいと思うんだ」

「……そうですか」

ピーナは唇をかんだ。謝りたくとも、エドガーの迷惑になるのなら、意味が無い。もし、戦争が始まるなら、軍の総司令官であるエドガーは多忙を極めるだろう。ピーナになどかまっていられないほどにそんなことを考えていると、ルナがそつとピーナの手を握るのを感じた。思わず、ルナを見ると、心配そうな顔をしながらも瞳には力強さが感じられる。ピーナはその手の温かさに、励まされる気がした。

「では、お詫びのお手紙だけでも書いて送ります」
そして、感謝の言葉も添えて。

「では、僕がエドガー殿のところに届くよう、手配しよう」
シオンは力づけるように笑った。
ピーナは深々とお礼をした。

にじゅうななわめ（後書き）

次は、ピーナいろいろ頑張ります。
暗いのは、ここまでです。

にじゅうはちわめ

ピーナはすぐにエドガーへ、お詫びと感謝の言葉を綴った手紙を書いた。

その翌日、「怪我が無くてなにより。私は大丈夫だ」という短い返事と花束とピーナが大好きなお菓子が送られてきた。

お菓子までついているのを見て、ほっこりと笑ってしまう。手紙をにぎりしめて嬉しそうに微笑んでいるピーナをルナは、じっと見た。

「ピーナは、エドガー様のことどう思っているの？」

「ふえ！？」

いきなりのルナの質問にピーナは戸惑った。挙動不審に目をパチパチさせるピーナに、ルナは思わず笑った。そして、また爆弾発言をした。

「好きなの？」

「！」

ピーナは、自分の頬が赤くなるのが分かった。こういった恋に関する話は、あまり今までしたことがない。下っ端メイドの時も、友人たちがそんな話をしているのを聞いていたが、話半分に聞いていた。自分には関係ないことだと思っていたからだ。免疫のない話に、あたふたした気持ちと、どこか心が弾む気分を味わう。

ピーナはエドガーのことをあまり考えようとしてこなかった。というより、考えられなかった。自分とは縁の無かった軍の偉い人に、

求婚されることは、ピーナにとって信じられないことだったからだ。だが、目を輝かせ、どこかわくわくとしたルナに、ピーナは観念した。

自分の思いが何なのか、自分自身に問いかける。

「私、エドガー様は私のこと嫌って、嫌味で毎日来られると思っていたので、わ、私のことを好いてくれているなんて、始めは整理ができなくて……。からかいなのかとも思いました。すぐに、飽きるとも」

「うんうん」

「でも、求婚されたり、『愛している』って言ってくれたりして、本当なのかなって。信じてもいいことかもしれないって、感じて」

「そう」

ゆっくり自分の気持ちを咀嚼しながら、言葉に出す。そんなピーナの言葉を、急がすでもなく、親身になって聞いてくれるルナ。だから、ピーナは安心して、自分の想いをしどろもどろになりながらも、吐き出せる。

「でも、エドガー様のことを好きな方はいいいますから、自分が敵対されるのは、どうしても嫌で。そんなことになって、受け止められる自信はありませんでしたし」

「ええ」

「だから、お断りしよう」と

「そうなの。でもね、ピーナ、そのことがピーナがエドガー様を好きにならない理由にはならないはずだわ？彼に対してピーナがどう思っているか、が一番よ。後のことは、二の次」

「私が・・・どう思っている・・・か？」

「そうよ」

ピーナはルナの言葉を繰り返した。自分は彼をどう思っていたのか。エドガーと出会ってから今までのことをずっと、思い出す。それは、鮮明に思い出せた。

「始めは、怖い方だった・・・。眉間にしわを寄せて、睨んできたから。でも、最近は時々、笑いかけてくれるんです」

式典の時も、わずかであるが、エドガーはピーナに笑った。他の人には気付かないかもしれないが、最近ピーナはエドガーが笑っているか、など表情が読めるようになってきた。エドガーのふと見せる笑顔が、結構好きだ。ルナのような優しいものではないし、シオンのような柔和なものでもない。彼は、そつと微笑むのだ。

「半強制的に求婚はされるし、何かいろいろと裏でなさっていたようです・・・」

「そ、そうね」

少しやさぐれたように言うピーナに、ルナは冷や汗を流す。エドガ

ーが彼女にせまったやり方は、誰が見てもやりすぎだと感じるだろう。エドガーが暴走していたことは、否定できない。

「・・・でも、私が本当に悲しかったり、苦しかったりした時、慰めてくれたのは、エドガー様でした。そのことで、私はだいぶ救われました。最近は何気なく、頼りにしてしまってます」

ピーナは目を閉じた。そうだ、もう既に彼への気持ちは決まっていたのだ。それを認めなかっただけで。

「ピーナ・・・。それは」

「・・・本当は、私エドガー様のことが好きなのだと思います」
言葉にだして言うことで、さらに確信が強まる。目を開けると、キヤーッとルナがピーナに抱きついた。

「自分の気持ちが分かって、良かったわね！あとはそれをエドガー様に伝えるだけよ!？」

ルナはピーナをぎゅうぎゅうと抱きしめた。ピーナはルナに抱きつかれて、慌てた。

ルナからは、いいにおいがして、どぎまぎする。

「る、ルナ様。びっくりしました」

「ふふ。それで、いつ行く?」

「へ?」

何のことですか?というように首をかしげるピーナ。

「エドガー様に気持ちを伝えるときよっ」

当たり前でしょ？と腰に手を当てる。

「ええ!？」

まさか、気持ちを自覚した途端に、それを伝えるとは。一気に、気恥ずかしさが増す。もじもじし始めたピーナ。そんな彼女をみて、ルナは少し呆れたように笑った。

にじゅうはちわめ（後書き）

やっと明るめになったでしょうか？

にじゅうきゅうわめ

ここ数日、軍部は忙しかった。ファランタ国との戦争へと王たちの意志は固まり、それに向けて着々と準備が進んでいたからだ。総司令官であるエドガーも、指示をしたり、手配をしたり、と寝る暇も無く働いた。ピーナと会えなくなったのが、辛い。唯一の救いは、彼女からの手紙だ。彼女の人柄を表したような、すこし丸い文字で綴った手紙を疲れたときは読んで、自分を慰めた。

いよいよ開戦間際となり、軍部では会議が続いた。明日にはこの国をたち、エドガー自らファランタ国に遠征することになっている。今日の会議は、サルマンやヒュージなど軍のなかでも高位の地位にいる者が集まった。作戦をまとめ、ひとまず最終のうちあわせが終わった。

「では、明日に」

というエドガーの声に、皆が立ち思い思いに退出しようとしていた。そんな時、一人の若い軍人が会議室に入ってきた。

「失礼します！総司令官殿にお会いしたい、という方がお見えになつていますが・・・」

申し訳なさそうに、びくびくしながらエドガーに伺いをたてる。

「馬鹿者、無理に決まっている。こんな忙しい時に。帰ってもらえ」エドガーは、すぐさま答えた。取り付く島もないエドガーの応えに、若い軍人は怯えたように首をすくめる。だが、すぐに諦めずに、もう一度恐る恐るエドガーに話しかけた。

「あのー、そのお会いしたいという方が、ピーナ・リロットさんな

のですが・・・」

「馬鹿者、早く通さんかつ！」

くわっと目を見開いて怒るエドガー。

「は、はい！！」

若い軍人は、声をひっくり返しながらか、敬礼した。すぐに、走って部屋から出る。内心、何で、俺2回も怒られるんだよとぼやきながら。

そんな様子を、好奇や恐怖の目でみる他の軍人たち。エドガーはそんな周りに気にせず、というか余裕が無いのか、そわそわとし始める。机にある資料を意味もなく広げたり閉じたり、うろつくと部屋の中を歩いたりする。さっきまでの会議での威厳は完全に消えていた。そんなエドガーをサルマンやヒュージは生暖かい目で見守っている。何だか、他の男たちも会議室から出るに出れなくなっていた。

そのうち、先ほどの軍人が戻ってきた。後ろにはピーナを連れてくる。どことなく緊張した様子の彼女を見て、エドガーは口元をほころばせた。久しぶりに彼女と会うことができ、溜まっていた疲れが吹っ飛ぶ。

ピーナエドガーを見つけると、お辞儀をした。

「お忙しい時に、すみません。お時間はとらせません」

「いや、別に大丈夫だ」

（さっき、忙しいって言ってたくせに・・・）

見ていた者たちは、エドガーの変わりように、つつこんだ。

「あの、私エドガー様に伝えたい事があって・・・その、あの」
頬をそめて、視線をいろんなところに飛ばすピーナ。
可愛すぎる。エドガーは静かに悶絶した。

そんな中、軍人たちは沈黙を守っていたが、一人だけ空気を読まない人間がいた。

「おお！ピーナ！元気じゃったかー？」
サルマンは、飄々とピーナに話しかける。

「お久しぶりです、サルマン元帥！お立場のため、忙しいかと存じますが、お体にはお氣をつけてくださいね？」

「ふむ。ほんに、ピーナはいい子じやのうー」
サルマンは、ペコツとお辞儀をするピーナに目じりを下げた。そんなサルマンをエドガーは殺人的な目で見ている。

（サルマン元帥　！？空気読んでくださいー！！）
ここには屈強な男たちばかりが集まっていたが、エドガーの殺氣には固まった。対して、サルマンは己をエドガーが睨んでいると知っ
ていながらも、余裕の態度だ。

「・・・会議は終わった。解散だ」
エドガーはサルマンを睨みつけながら、言った。背中にはブリザー
ドがふぶいている。

「ええー！？わしもピーナと話したいのう」
サルマンは口をとがらす。エドガーは、いい年して、何かわいこぶ

ってんだ、と内心毒づいた。しかも、何気にピーナの手をつないでいる当たり、いろいろ油断ならない。

「か・い・さ・ん・です!!」

エドガーがサルマンをねめつけた。サルマンにはだいぶお世話になったが、ピーナに関しては譲れない。エドガーが威嚇する様子をサルマンは楽しそうに眺めている。あ、確信犯だ、と見ている男たちは思った。

「サルマン元帥！会議でお疲れでしょう！？今日はゆっくり休みましょう！」

「今日、この後食事にも行きませんか!？」

「うぬー!」

このままでは、泥沼化する、と感じた軍人たちは一致団結した。強制的にサルマンの背中をグイグイと押し、いやじゃ、いやじゃ、と喚くサルマンと一緒に部屋から出た。そして、パタンとドアが閉まる。部屋はピーナとエドガー以外なくなり一瞬にして、静かになった。

呆然とその様子を見るピーナ。逆に満足そうなエドガー。あいつらには特別ボーナスを出そう、と考えていた。そして、ゆっくりとピーナに向き合う。エドガーが自分を見ていることに気付き、ピーナは体を強張らせた。

「せっかくきてくれたのに、騒がしくてすまない。して、話しとはなんだ？」

自分の声が自然と甘くなっているのが、分かる。ピーナ自ら自分のところに来てくれたことが嬉しい。最近は本当に、忙しく彼女のところにいけなかった。だがそれだけではなく、最後に会ったときに

彼女を怖がらせてしまったのではないかと思い、何となく行きづらかった、というのもある。今まで、何度も彼女に求婚を断られては、いろいろと工作したり強引に迫ってきた。だが、本気で彼女が自分を拒否したら・・・と考えると、息がつまるような苦しい思いになる。どんな敵にも果敢に向かってきたエドガーだが、好きな少女に否定される事は、恐ろしかった。

「あの、先日は私の不注意で怪我をさせて、すみませんでした！」
ピーナが勢いよく、頭を下げる。

「・・・あの、お怪我はどうですか？」
頭を下げた姿勢から、伺うように、エドガーを見る。自然と上目使いになる。その様子にエドガーは、またまた悶絶した。表情には出さないものの、脳内では「かわいい」のワードが繰り返され、頬はかすかに赤くなっている。

「頭を上げてくれ。怪我はもうすっかり完治した。心配するな・・・
それに、ピーナを守れたのだから、私は嬉しい」

「へっ!？」
みるみるピーナの顔が赤くなる。今まで、どんなに甘いことばを言っても、迷惑そうな顔をするかひきつった顔をしていたのに。ピーナの対応の変化に、エドガーは喜んだ。これは脈ありか！脈ありなのかっ!？

「そ、そ、そうですか・・・あ、あのお話したいこと、もう一つあるのです」

ピーナは、エドガーにさまよっていた視線を戻す。茶色い瞳には強い意志が感じられる。

「なんだろう？」

「エドガー様たちは明日に遠征される、と伺いました」

「そうだ」

「エドガー様がお帰りになった時、申し上げたい事があるので。・
・その時は聞いてもらえますか？」

心配そうに見上げるピーナ。声音にはどこか、懇願するような響きを感じる。エドガーは、必死なピーナをじっと見つめた。何なのだろうか？

「・・・どんな内容か、今聞いても？」

わざわざ、戦争が終わってから、なんて。エドガーはいぶかしんだ。

「わ、私とエドガー様の、将来・・・のこと・・・です」

最後は小声になっていたが、エドガーは一句漏らさずに、聞き取った。一気に胸が高まる。そ、それは、もしかして・・・！？

「期待していいのか？」

思わず、質問に熱が入る。思わず、一步ピーナに近づく。

「今は、何も申しません」

ピーナは詰め寄るエドガーに、軽くビビりながらも、答えた。はつきりしたことを聞けなくて、少しエドガーは気落ちした。だが、次の彼女の言葉で、またエドガーのテンションは上がった。

「・・・だから、絶対に戻ってきてくださいね？」

ふ、とピーナは柔らかに微笑んだ。今まで、こんな風にエドガーに笑ってくれたことは、あっただろうか。いや、ない。エドガーはピーナに見とれた。

きっと、この笑みを生涯忘れる事は無いだろう。

にじゅっきゅつわめ（後書き）

あと、2・3話で、完結となります。

皆様には、大変感謝しています。

最後まで、楽しんでいただければ、幸いです^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294w/>

侍女と総司令官

2011年10月17日23時33分発行